

若松町文化財調査報告書第1集

曲古墓群

—五島列島若松町日島所在の中世墓群—

1996

長崎県若松町教育委員会

曲古墓群

—五島列島若松町日島所在の中世墓群—





曲古墓群空中写真



筒ノ浦から北の湾口を望む



曲古墓群整備前の状況



曲古墓群整備後の状況



曲古墓群宝篋印塔



曲古墓群五輪塔

発刊にあたって

曲崎の古墓群は、若松町北西に位置する日島地区の、トンボロという砂嘴に所在する中世から現代におよぶ墓地であります。

この曲古墓群は、町教育委員会並びに町文化財保護審議会においても貴重な遺跡として大変関心を持ち、県文化課に専門的な調査を依頼したところ、県文化課の全面的なご理解とご協力により、平成5年度から6年度の2カ年で調査発掘を完了し発刊の運びになりました。

調査の結果、日島曲古墓群のすばらしさは、九州全体から見ても特異なものであり、特に『安山岩質凝灰岩』の関西形式『宝篋印塔と五輪塔』は、室町時代の中央〈大和・山城〉形式をもったものであることがわかりました。しかも、日島という一遺跡だけで40基分以上の中央形式宝篋印塔や五輪塔が集中的に確認されたことは、長崎県ではもちろんのこと、九州全域からみた中世石造美術から考えても、驚くべきことであると専門家の大石先生〈大村高校〉は言っております。

これほど規模が大きく、長期にわたって営まれた墓地は、大変貴重な遺跡であります。当時の漁村、漁業基地、貿易基地としての繁栄を偲ぶ資料として、五島史研究のみならず、民俗学的にも重要な遺跡であります。

このような貴重な文化財遺産が町内になることは、私たち町民の誇りであります。今後も整備保存に努め、生きた教材としていつまでも残したいと考えています。

調査に当たって、大変多忙なか、県文化課の安楽勉副参事をはじめ、文化財保護主事の先生方、大村高校の大石一久先生に多大のご指導とご協力を頂きました。衷心より感謝を申し上げます。なお、町当局をはじめ、町文化財審議会委員長の近藤章先生他審議委員の先生方、並びに地元関係者の全面的なご支援ご協力に心からお礼を申し上げます。

平成8年3月30日

若松町教育委員会

教育長 江頭重男

例 言

1. 本書は長崎県南松浦郡若松町日島郷曲に所在する曲古墓群の調査報告書である。
2. 調査は古墳群の保存整備を目的とし、一部発掘調査を併行して行った。
3. 調査は若松町教育委員会が事業主体となり、長崎県教育庁文化課が調査を担当した。
4. 本書の執筆は項目の末尾に記した。
5. 日島の中世・石造美術については県立大村高校教諭大石一久氏に、出土人骨の考察については長崎大学医学部解剖学第二教室分部哲秋氏より玉稿をいただいた。
また地元文化財保護審議会委員長の近藤章氏には町内の石塔についてまとめていただいた。
6. 本書関係の写真撮影は、安楽が担当した。

7. 調査関係者

平成5年度

若松町教育委員会	文化財保護審議会委員	長崎県教育庁文化課
江頭重男 教育長	近藤 章 (委員長)	安楽 勉 埋蔵文化財班係長
寺田速人 社会教育指導係長 (派遣社会教育主事)	藤原栄之助 山路敏男	高野晋司 ”
荒木宣貴 社会教育係長	鼻崎惣右エ門 梶山 正	寺田正剛 文化財保護主事
荒木哲郎 総務係長	浜端太吉 荒木秀太郎	岡 大博 ”
		川口洋平 文化財調査員

平成6年度

江頭重男 教育長	文化財保護審議会委員	長崎県教育庁文化課
田尻知久 事務局長	近藤 章 (委員長)	安楽 勉 埋蔵文化財班係長 (副参事)
荒木宣貴 社会教育指導係長 (社会教育主事)	藤原栄之助 山路敏男	古門雅高 文化財保護主事
荒木哲郎 社会教育係長	鼻崎惣右エ門 梶山 正	岡 大博 ”
	浜端太吉 荒木秀太郎	

8. 調査協力

長崎大学医学部解剖学教室 分部哲秋・佐伯和信 県立大村高等学校教諭 大石一久

9. 本書の編集は安楽による。

本文目次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	4
III 調査の概要	9
1. 平成5年度の調査	9
(1) 遺構	13
① 第1号遺構	13
② 第2号遺構	14
③ 第3号遺構	16
④ その他の遺構	16
(2) 遺物	24
① 弥生・古墳時代の遺物	24
② 中世の遺物	24
③ 近世の遺物	29
④ 金属器	29
IV まとめ	29
○長崎県若松町日島曲古墓群出土の中世人骨 (分部哲秋・佐伯和信・長島聖司)	73
○日島の中世・石造美術…とくに中央形式塔の分布とその問題点について… (大石一久)	85
○若松町内の古石塔群 (近藤章)	131

挿 図 目 次

第1図	若松町の遺跡 (1/50,000)	5
第2図	調査前の曲古墓群遺構位置図 (1/400)	10
第3図	町道北側整備後の石塔群位置図 (1/200)	11
第4図	第1号遺構実測図 (1/80)	13
第5図	第1号遺構下部遺構実測図 (1/20)	14
第6図	第2号遺構実測図 (1/20)	15
第7図	第2号遺構人骨出土状況実測図 (1/10)	15
第8図	第3号遺構実測図 (1/40)	16
第9図	町道北側五輪塔実測図 (1/10)	17
第10図	町道北側宝篋印塔及び石塔実測図 (1/10)	18
第11図	町道南側調査区地形図 (1/1,000)	20
第12図	町道南側五輪塔群位置図 (1/40)	21
第13図	町道南側五輪塔実測図 (1/10)	22
第14図	釜崎宝篋印塔実測図及び紀年銘拓影 (1/20)	23
第15図	出土遺物実測図 (1)	25
第16図	出土遺物実測図 (2)	26
第17図	出土遺物実測図 (3)	27
第18図	出土遺物実測図 (4)	28
第19図	遺跡の位置	74
第20図	人骨の残存部 (1号人骨・2号人骨)	75
第21図	人骨の残存部 (3号人骨・4号人骨)	76
第22図	津雲縄文人男性を基準とした偏差折線	78
第23図	津雲縄文人女性を基準とした偏差折線	78

図版目次

図版 1	釜崎宝篋印塔近景及び遠景	33
図版 2	町道北側整備前の状況及び整備後の状況	34
図版 3	町道北側中央部の整備前の状況及び整備後の状況	35
図版 4	崩壊した石塔群及び整備された石塔群	36
図版 5	石垣の復原状況及び整備された五輪塔群	37
図版 6	崩壊した石塔群	38
図版 7	町道北側整備後の石塔群	39
図版 8	整備前の中央部宝篋印塔と整備後の宝篋印塔	40
図版 9	中央部宝篋印塔下部の状況	41
図版10	調査中の第 3 号遺構	42
図版11	調査中の第 2 号遺構	43
図版12	第 2 号遺構調査状況	44
図版13	中央部高台付近の石塔群及び供養塔横の自然石の板碑	45
図版14	町道南側の自然石利用の板碑及び町道北側中央部付近の石塔群	46
図版15	町道北側調査風景	47
図版16	調査復原作業風景	48
図版17	町道南側調査区近景	49
図版18	町道南側整備前の状況及び整備後の状況	50
図版19	町道南側の調査風景	51
図版20	町道南側の整備状況	52
図版21	町道南側五輪塔群地区瓦質土器出土状況	53
図版22	町道南側遺物出土状況	54
図版23	整備された五輪塔群及び埋れた 1 号五輪塔水輪と地輪	55
図版24	1 号五輪塔の整備前・後の状況	56
図版25	2 号五輪塔の整備前・後の状況	57
図版26	2 号五輪塔下部の遺物出土状況	58
図版27	3 号五輪塔の整備前・後の状況	59
図版28	4 号五輪塔の整備前・後の状況	60
図版29	5 号五輪塔の整備前・後の状況	61
図版30	6 号五輪塔の整備前・後の状況	62
図版31	町道南側 1 号トレンチ東土層	63

図版32	町道南側出土の遺物	64
図版33	町道南側五輪塔群地区出土の瓦質土器	65
図版34	町道北側遺構出土の遺物	66
図版35	町道北側出土の遺物	67
図版36	町道北側・南側出土の遺物	68
図版37	山王山二宮岩穴出土の鏡(1)	69
図版38	山王山二宮岩穴出土の鏡(2)	70
図版39	九州各地の石塔群(1)	71
図版40	九州各地の石塔群(2)	72
図版41	曲2号遺構出土人骨(1)	82
図版42	曲2号遺構出土人骨(2)	83
図版43	荒川郷割子宝篋印塔	119
図版44	寺屋敷跡石塔群	120
図版45	宿ノ浦郷薬師堂裏石塔	121
図版46	白魚四人塚石塔群	122
図版47	光石海岸墓地石塔群	123
図版48	林蔵庵跡石塔群	124
図版49	榊ノ浦郷宝篋印塔	125
図版50	モエン様石塔群	126
図版51	経崎宝篋印塔	127

I 調査に至る経緯

若松町は五島列島のほぼ中央に位置し、若松島と若松瀬戸をはさんだ中通島の一部と日島、有福島漁生浦島を主とする31の大小の島々から成り、その複雑な地形から町内には幾多の平家落人伝説が残り、それらしき古墓群も各所に残されている。しかし、実際には自然石を利用したものが多く年代の決め手となりうるものは極めて少ない。

そんな中で早くから知られていた石塔に白魚家五輪塔や千人塚がある程度で、昭和55年3月に刊行された若松町誌には、曲古墓群についての記事はなく、それとおぼしき写真が掲載されているだけである。初めて曲古墓群に接したのは昭和59年(1984年)に県が主体となって実施した県下全域の遺跡周知事業である。その時すでに日島と有福島は防潮堤で繋がり、道路も開通していた。中世と考えられる宝篋印塔や五輪塔が雑草の中にひしめき合い、累々と散乱した状況はまさに圧巻であった。

その後数年が経過し、平成3年頃から何とか調査できないものかという相談を町教育委員会から受けた。調査するには事前によく検討しておかなければならないとの判断から、翌平成4年7月県文化課の田川と安楽は事前調査を行った。この時には町教育委員会と町の文化財保護審議員も加わっての調査となった。この時、昭和47年に開通した町道によって墓域は二つに区切られ、その時の工事中に数十体の人骨が出土し、銭貨やかんざし類も出土したという話を聞いた。人骨類はすべてではないが、駐車場として造成された一角に供養碑が建立され、その中に納められている。

この時の観察では、礫丘上におびただしい数の墓石が崩壊し散乱しているが、よく観察してみると墓石を乗せる基壇の一部と思われるものが残っている。また石垣や墓道ではないかと思われる石敷きもある。

石塔の種類は五輪塔、宝篋印塔、板碑等があり、さらに各細分することができる。石質は玄武岩、花こう岩、凝灰岩等が利用されている。

時期については江戸時代のものは元禄、享保ごろを筆頭に多く見られるが、それ以前のものについては風化が著しく、年代ははっきりしない。しかし石塔の形状から推察すると、鎌倉時代以降室町時代ごろまでの、いわゆる中世の時期のものが多くを占めているのではないか。

日島は周囲数キロメートルの小さい島でありながら、中世から現代に至るまで延々と築かれた墓地は県下に類を見ない。おそらく生活の中心を海に求めた「水軍」の伝統を強く引き継いだ集団ではないか。

など色々な問題が提起され、遺跡の整備にあたっては次の3区分に分けることにした。

- (1) 道路北側に位置する墓地群の整備
- (2) 道路を挟んで両側の部分的な区域の整備
- (3) 現代墓を排した全域の整備

また整備にあたっての留意点は

- (1) 墓石はかなりの状況で崩壊しているのがほとんどで、できるだけ同類のものを併せて復原する。

- (2) 崩壊している石はいったん取り除き、基壇部分を出して整備する。
- (3) 紀年銘等判明しているものについてはすべて記録する。
- (4) 整備の段階で、人骨等の出土の可能性が考えられるのでその処置を検討しておく。
- (5) 事業に先立ち詳細な地形測量図及び現況図を作成する。
- (6) 整備については専門家の指導のもとに行う。

以上の点を調査前に町側に申し入れ、事前の了解を得た。

調査は初年度が平成5年8月23日～9月18日まで、次年度は平成6年8月29日～9月16日までの2回実施した。

また人骨の取りあげと観察については長崎大学医学部解剖学第二教室に多大な御協力を得た。石塔類の観察については県立大村高校教諭大石一久氏の指導を得た。記して感謝申し上げる。



有福島から曲古墓群を望む



平成4年度分布調査

II 遺跡の地理的環境と歴史的環境

1. 地理的環境

曲古墓群は長崎県南松浦郡若松町日島（ひのしま）郷に所在する。日島は日之島とも日ノ島とも書く。

日島が属する若松町は、31の島々からなるが、そのうち常住の島は日島をはじめとして若松島、有福（ありふく）島、中通（なかどおり）島、桐小島、漁生浦（りょうせがうら）島の6島である。

若松町は五島列島のほぼ中央部に位置し、北は若松瀬戸を境に南松浦郡青方町と、東は同じく若松瀬戸を境に南松浦郡奈良尾町と、南は滝河原瀬戸を境として南松浦郡奈留町と各々接している。東経129°1'26"、北緯32°53'7"に位置し、東西13.3^{キロ}、南北16.5^{キロ}、面積60.20平方^{キロ}の町域をもつ。人口は男2434人、女2526人、世帯数1901戸である（平成6年12月末現在）。

若松町の気候は、冬の平均気温7～8度、夏の平均気温27度、年間降水量2000^{ミリ}で、冬は暖かく夏は比較的涼しいといえる。

若松島の地勢は北北西から南南東方向の湾入によって、山地は東西に2分され、しかも神ノ島と堤を結ぶ線より以北に山地に限られる。これより以南は起伏量の大きい丘陵地となっている。若松町の中通島側の若松瀬戸沿岸も起伏量の大小が混在した丘陵地となっている。低地は極めて貧弱で、一部の谷底低地や小さな湾奥に形成された海岸低地が散在するにすぎない。

若松島の地形は、北からの湾入によって山地が東西に区分され、東部の山地は天神山（標高306^{メートル}）があつて起伏が大きく、若松越の東西方向の鞍部によって南部の丘陵地とつながっている。若松瀬戸沿岸は南部において著しい溺れ谷の地形をみせる。

河川は一般に短小で急勾配をなし、西田川（長さ1300^{メートル}）が町内最長である。

表層地質は日島、有福島、漁生浦島、若松島北部が砂岩を主とする五島層群である。一方、若松島中部における五島層群は砂岩と泥岩が互層をなし、若松島南部には流紋岩という火山性岩石が広く分布する。若松島および中通島の若松瀬戸に面した海岸地帯は火山砕屑岩（かざんさいせつがん）があり、鎌田泰彦によって築地（ちじ）層と名付けられた（長崎県土地対策室1982）。築地層は五島層群堆積後の火山活動によって生じたと考えられている。

山地の土壌は若松町のほとんどが乾性褐色森林土壌で、地力は総じて低い。低地の土壌は、ほとんどが黄色土壌である。五島層群の砂岩や、花崗岩、頁岩などの風化物を母材とする土壌である。土性が粘質である場合は養分含有量も中庸であるが、乾性の場合は養分含有量が少ない。

遺跡の所在する日島は、若松島の北西1^{キロ}に位置し、さらに北西は東シナ海に面している。島の北東は若松瀬戸を隔てて南松浦郡青方（あおかた）町にいたり、東は同じく若松瀬戸を挟んで若松島と向かい合う。南西は宮ノ瀬戸をしきる防潮堤で有福島とつながり、南は漁生浦島と対峙している。

日島は面積1.65平方^{キロ}の島で、人口は男52人、女47人、世帯数53戸である（平成6年12月末現在）。

日島の地勢は、隣接する有福島と同じく、丘陵地で、低地は島の南部にわずかな海岸低地があるにすぎない。

日島の地形は祇園山（標高244m）を最高所とする起伏の大きい丘陵地で、島の北部には海食崖が、東部と西部は海食棚が発達し、南部は海岸低地となっている。

曲古墓群が立地するのは日島南西部の曲崎（まがりざき）といわれる砂州で、有福島とを結ぶ防潮堤口にある。砂州は礫丘をなし、昭和30年頃までは松林が砂州全体に生えていたという。また礫丘の先端部には浜沈丁の群落がみられる。

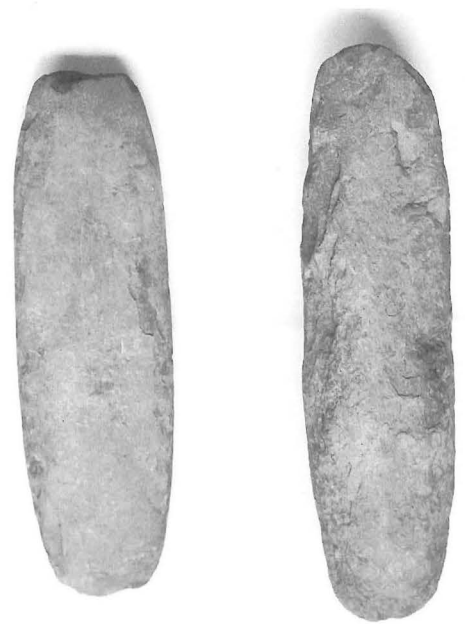
2. 歴史的環境

ここでは日島を含めた若松町について詳述する。

若松町では、旧石器時代の遺跡や遺物は現在までのところ発見されていない。

縄文時代になると遺跡が増えてくるが、いずれも発掘調査がなされていないので、詳細は不明である。その中でも桐古里（きりふるさと）遺跡（第1図15）は、縄文中・後期の阿高系土器や後期の鐘崎式土器、北久根山式土器、晩期の夜臼式土器、磨製石斧、搔・削器類が表採されている。表採遺物は弥生・古墳時代のものまで含まれ、長期にわたる遺跡で貴重といえる。

笛吹遺跡（第1図13）はかつて「笛吹山の神遺跡」といわれ、「山の神」と称された神聖地に磨製石斧6点が祀られていた。石斧の出土地は不明とされていたが、昭和59（1984）年の県文化課の聞き取



笛吹遺跡出土の磨製石斧

り調査により、付近の宅地において小屋を造る際に出土したものであることがわかった。

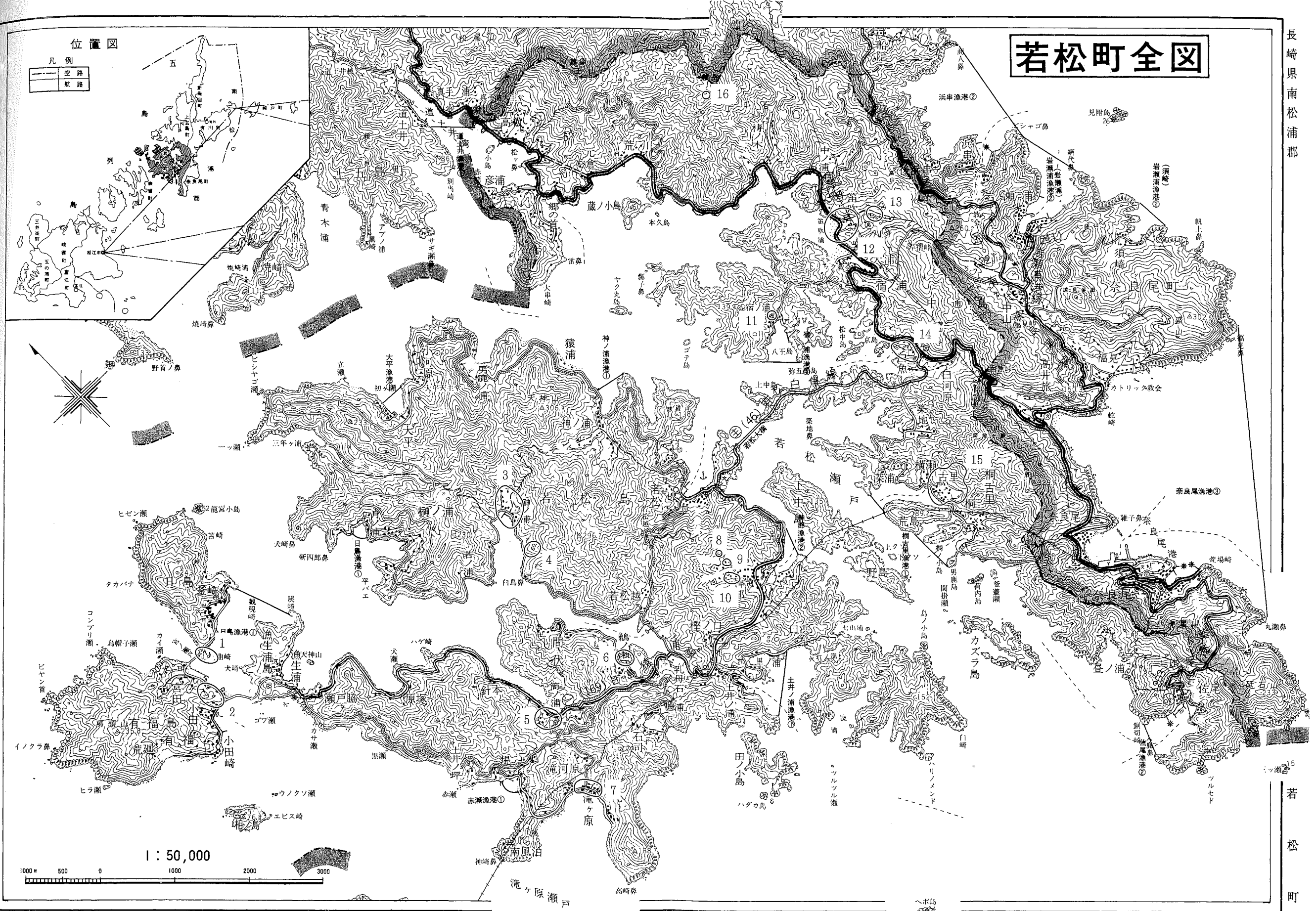
そのほかの縄文時代の遺跡として、高仏遺跡、笛吹浦遺跡（第1図12）、神部遺跡（第1図10）、榊ノ浦遺跡（第1図3）、鶉ノ瀬遺跡（第1図6）、筒ノ浦遺跡（第1図5）などが海岸部を中心に立地している^(註1)。

曲古墓群の付近では有福島に馬込遺跡（第1図2）があり、黒曜石剝片が採集されている。



桐古里遺跡出土の弥生土器

若松町全図



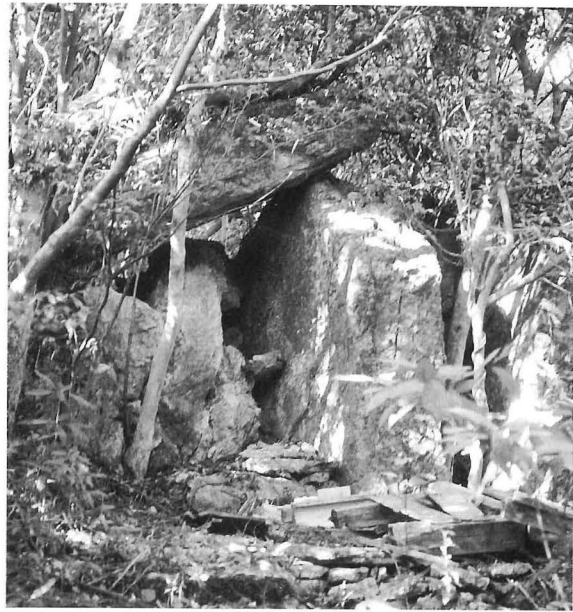
この地図は建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号) 平4九複第 53 号

第1図 若松町の遺跡

- | | | | |
|----------|------------|----------|---------------|
| 1 曲古墓群 | 5 筒ノ浦遺跡 | 9 真浦遺跡 | 13 笛吹遺跡 |
| 2 馬込遺跡 | 6 鶴ノ瀬遺跡 | 10 神部遺跡 | 14 白魚遺跡 |
| 3 榊ノ浦遺跡 | 7 滝ヶ原遺跡 | 11 宿ノ浦遺跡 | 15 桐古里遺跡 |
| 4 榊ノ浦石塔群 | 8 老松神社岩陰遺跡 | 12 笛吹浦遺跡 | 16 三王(山王)岩陰遺跡 |



滝ヶ原遺跡出土の弥生土器



老松神社裏岩陰

弥生時代の遺跡としては、先述の桐古里遺跡から弥生時代前期の板付II式土器や中期初頭の城ノ越式土器が表採されている。また、滝ヶ原遺跡（第1図7）では、昭和42（1967）年に道路と広場を造成していたところに箱式石棺から板付I式の小壺が発見された。付近一帯には弥生時代の包含層が存在したようで、板付II式、須久式土器も採集されている。後述する白魚遺跡（第1図14）でも弥生土器が表採されている。

弥生後期から古墳時代にかけては、若松町内でも五島列島の他の地域と同じく、遺跡の数が減少する。先述の桐古里遺跡、馬込（まごめ）遺跡、白魚遺跡などから須恵器・土師器が採集されているのみである。奈良・平安時代も同様に遺跡密度は低い。



老松神社裏岩陰出土の罎口

しかし、中世になると祭祀遺跡や石造物を中心に遺跡の数が増加する。荒川郷に所在する三王（山王）岩陰遺跡（第1図16）では小さな岩陰の水底から平安後期に渡来したと思われる舶載鏡2面と15面の中・近世の和鏡が発見されている（田中1970）。また、真浦（まうら）遺跡（第1図9）は神部（こうべ）の集落を見おろす標高24.5mの舌状丘陵であるが、丘陵頂部の20mの範囲に玉砂利が広がっており、経塚の可能性が指摘されている。当地は神聖地だったらしく、付近には五輪塔や宝篋印塔がある。同じく神部の老

松神社裏の小さな岩陰（第1図8）から、天正7（1597）年の銘が刻まれた鰐口と鏡片が発見されている。

若松町の白魚・佐尾（さお）の地は鎌倉時代、青方氏の分家にあたる白魚（しろお）氏の勢力下にあった。白魚氏の根拠地であった中通島の白魚はかつて「白魚千軒」と称されたといわれる。現在も五輪塔などの中世墓が残り、付近の海岸や畑からは青磁、備前焼の播鉢、高麗青磁、石鍋などが採集されており、文献の記述を裏付けている。



白魚遺跡出土の石鍋

その他の中世遺跡として榊ノ浦石塔群（第1図4）がある。通称「寺屋敷」といわれており、寺院跡の可能性もある。付近には積石塚、石垣、宝篋印塔などが残る。

また、若松町における中世の遺構・遺物として、従来より板碑が注目されていた（上五島高校1981）。「上五島高校紀要」によると、若松町内で確認される板碑は8カ所、44基ほどである。板碑のほとんどが砂岩の自然石を使用しており、海岸部に立地するという。

文献資料にみえる古代・中世の若松島や日島は、中国へ渡る航路にあたり、近海でしばしば船が難破している。「青方文書」は、永仁6（1298）年に渡唐船（貿易船）が日島付近で難破したことを伝えている。

南北朝から室町時代では、文明年間（15世紀後半）に朝鮮で書かれた「海東諸国記」には、五島日島太守藤原朝臣盛が文明元（1469）年に朝鮮へ遣使したことが記されている。

[註]

註1 各遺跡の具体的な様相については、県文化課が作成した埋蔵文化財包蔵地カードによった。

[引用・参考文献]

上五島高校社会科 1981「上五島町・若松町の板碑とその分布」『紀要』創立30周年記念号
長崎県立上五島高校

瀬野精一郎 1972『長崎県の歴史』山川出版

瀬野精一郎・外山幹夫編 1987「角川日本地名大辞典42長崎県」角川書店

田中重雄 1970「五島若松二宮岩穴発見の報賽鏡について」『史迹と美術』第403号

長崎県土地対策室 1982『離島振興開発地域 土地分類基本調査』長崎県

若松町教育委員会 1980『若松町誌』若松町役場

III 調査の概要

1. 平成5年度の調査

初年度は町道以北の外海に面した、一番高い部分である。聞くところによると、昭和初期頃はこの礫丘一带には大小の松が鬱蒼と茂り昼間も暗かったという。しかし戦中から戦後にかけて松は枯れはじめ、根元も掘り返されたといわれる。そのためか、礫が非常に乱れた地点が見られた。町道以南の海岸に面した所では今も松の根元が残り面影を偲ぶことができる。

礫丘の根元部と現在供養塔が建てられている付近には近世から現代にかけての墓地が形成されているが、まわりを囲む石垣などを見てみると、古い石塔の一部と見られるものが積みあげられている。古墓群は外海に近い方を背にして高くなり、南側にゆるく傾斜している。板状の自然石を墓標とした一部の墓碑以外は殆ど崩壊している。五輪塔が数基建っているものの、後世に違うもの同志が組み合わせられて置かれているだけにすぎない。円礫や角礫が無数に入り混り、崩壊した墓石のすき間や礫の間からは、はまぼうやいばらなどの雑草が繁茂しており、先ずはこれらの除去作業から始めた。全体を取りのぞくと、そこには予想以上の荒涼とした墓域が現れた。

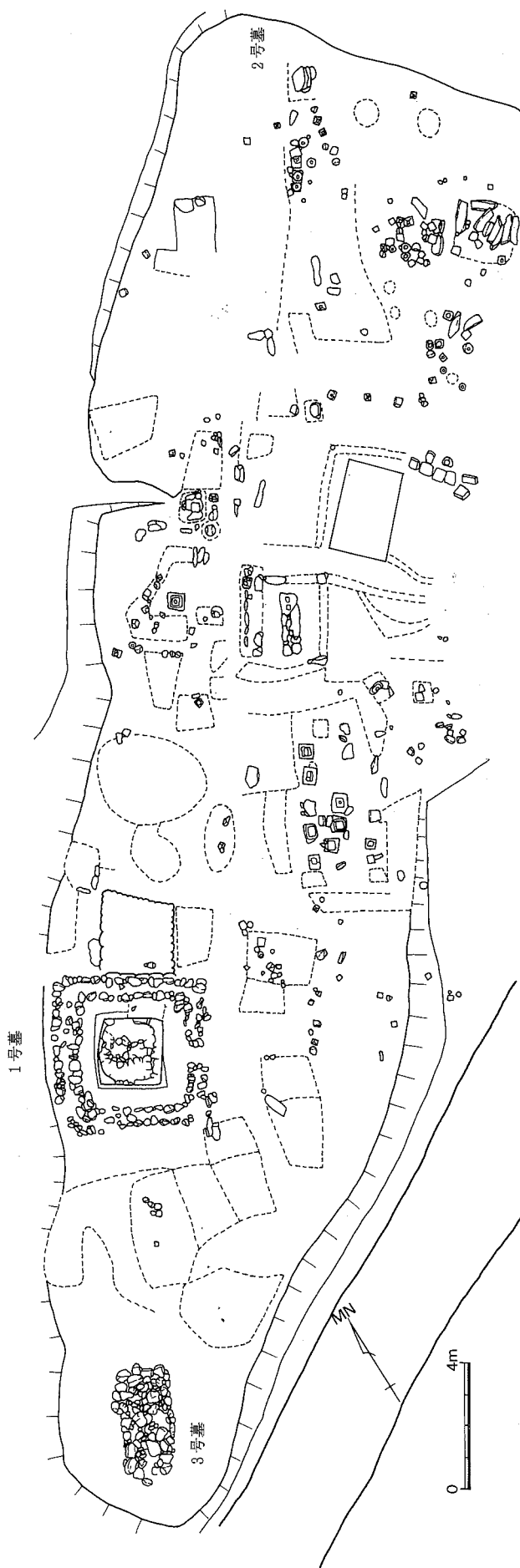
調査は先ず現況図の作成から始めた。トランシットで区画割りをし杭を打ち込むが、なかなか、礫にはばまれて作業は困難を極めた。平板実例(1/50)で崩壊した状況の把握に努めた。石塔類は、宝篋印塔、五輪塔、相輪をもつ五輪塔と思われるもの、自然の板石を利用したものなどに判別でき、石材については花こう岩や凝灰岩等が利用されている。また墓石を載せる基壇や石垣には砂岩や安山岩で積まれている。

現況図の作成と併行して1号から3号遺構の確認を行った。詳細については遺構の項で記すが、1号遺構は中央部分に基壇を設け、その囲りを石垣で囲んでいる。宝篋印塔が据えられていたと思われる。2号墓は墓地の北端にあたり、2枚の石で覆われている。3号墓は長方形を呈する基壇の遺構で、3基については埋葬施設と思われる下部まで掘り下げた。

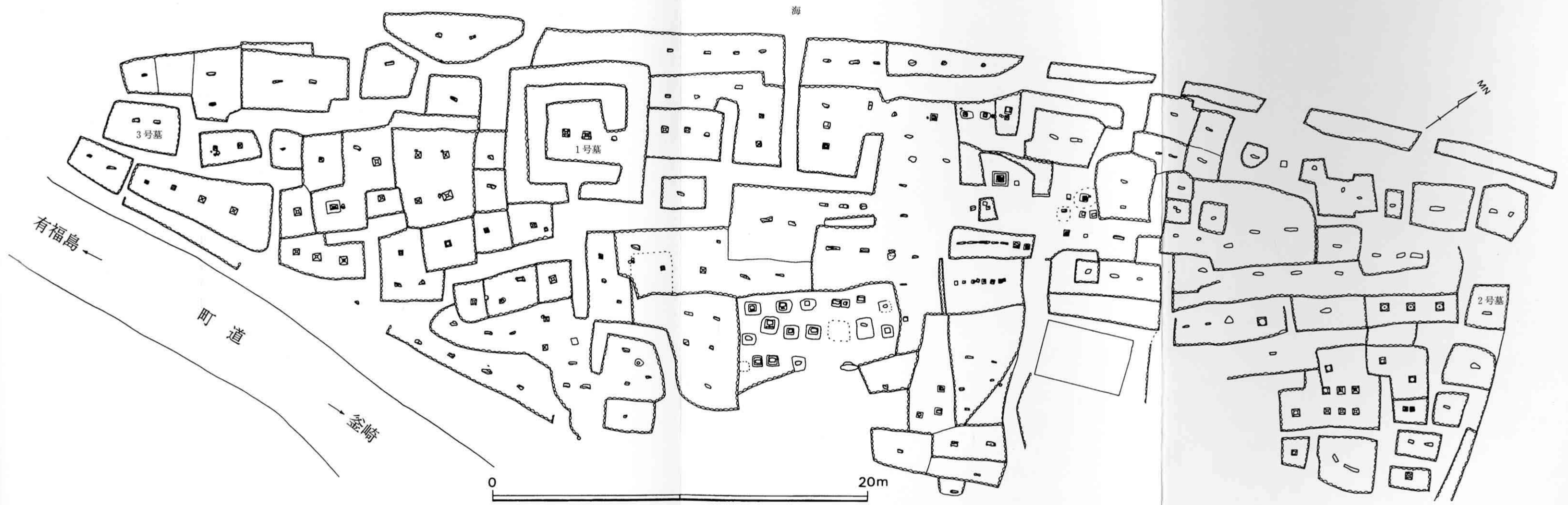
復原作業はまさに石との格闘であった。駐車場に近い下の方から行った。この地点は五輪塔や宝塔が足のふみ場もない程散乱し、復原も困難視されたが、石の形や石質を比較しながらまとめて見た。

また一つ一つ石を除いていくと、区画がわりあいはっきりと残っている部分があり、定位置と思われる部分に復原した。しかし、石垣については崩壊が進んでいることや、大礫を利用していることもあり時間を要したが、根石など基礎になる部分を確認すればスムーズな復原となった。作業は面積が広く、全体に重機等が導入できないため、木のやぐらを組み合わせチェーンブロックを使用した。

復原した石塔は宝篋印塔2基、凝灰岩製五輪塔18基、花こう岩製五輪塔11基、自然石の板碑15基であるが、この他にも石塔の部分掘り起こしたり復原に至らなかったものもある。また、外海側と道路側、それに現代墓の境界部分については石垣を築き保護した。



第2図 調査前の曲古墓群遺構位置図 (1/400)

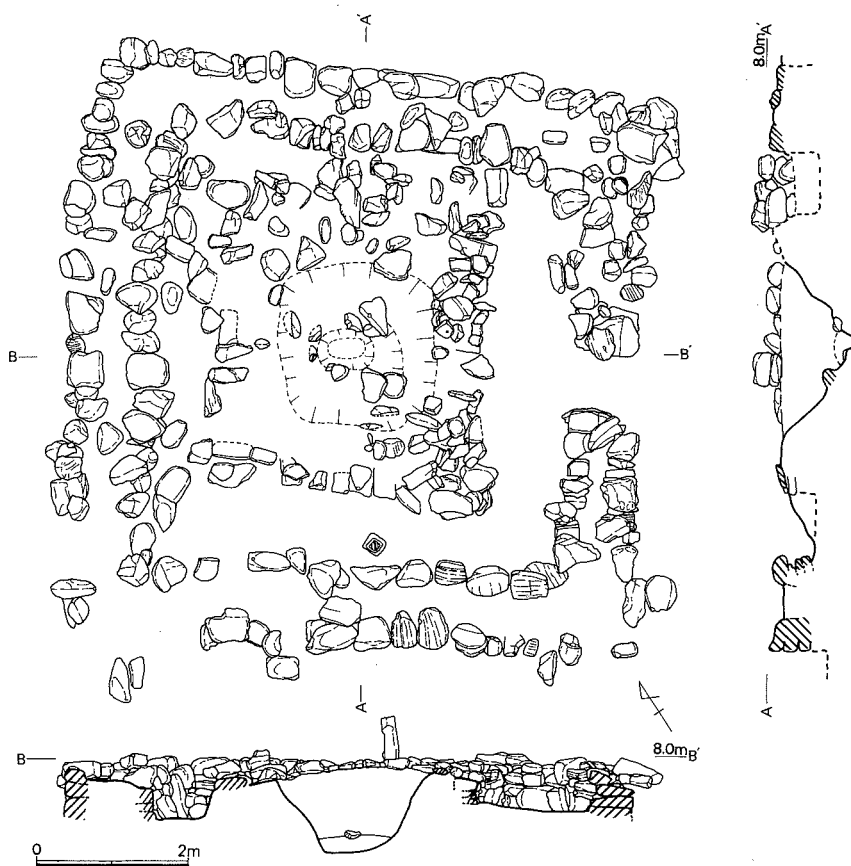


第3図 町道北側整備後の石塔群位置図 (1/200)

(1) 遺 構

① 第1号遺構

礫丘中央部の小高い部分に外海を背にして位置している。中心に縦3.5m、横3.3mのほぼ正方形に近い基壇を設け、外側には縦7.5m、横7.7mのほぼ正方形の石垣を巡らす。基壇は高さ約0.6mで砂岩の扁平角礫を丁寧に積み上げている。西側の方は上部が崩落しているが、下部の基礎の部分が残っている。外側の石垣は幅約1mで比較的大きな円礫が使われている。北西と南西隅が崩落しているがおむね旧状を保っている。南側中央には幅1mの入口が作られて基壇部と石垣の間には約1mの空間が作られている。この空間を利用して東側に幅約2mあたり礫がつめ込まれ、表面には自然の角礫が建てられている。おそらくこれは墓標であり、近世墓が入り込んできたものと思われる。



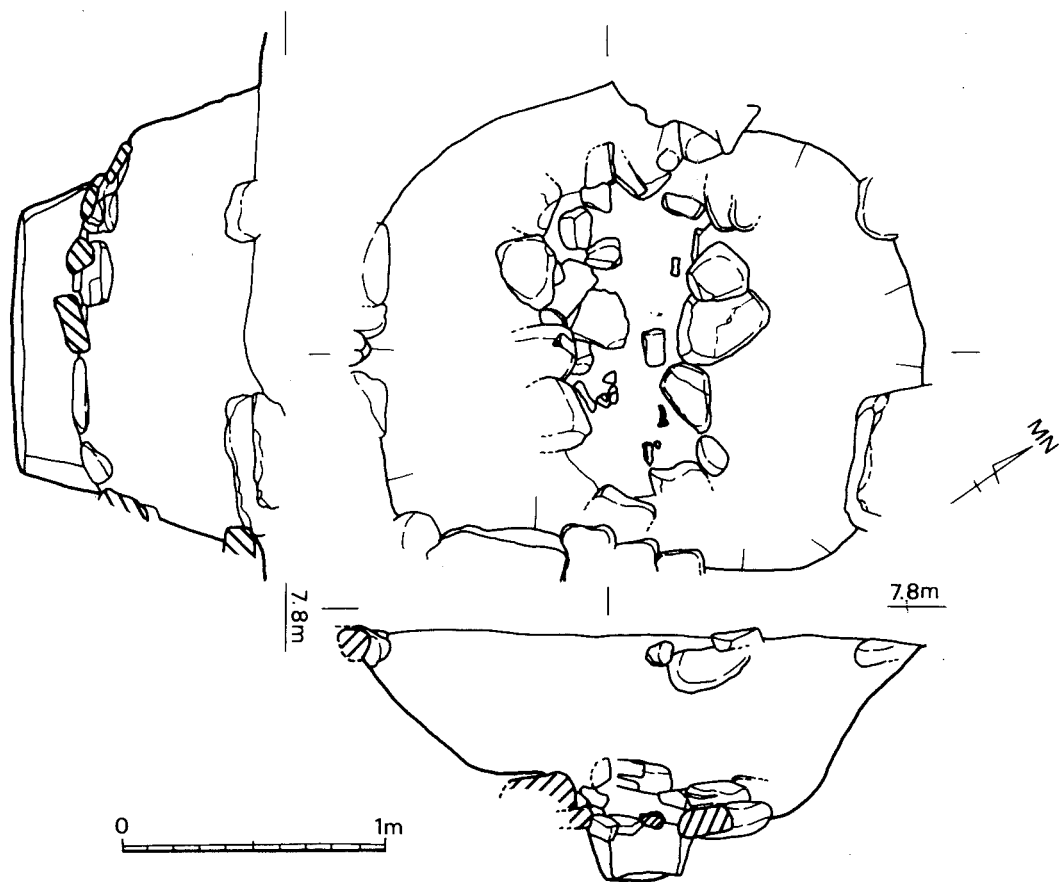
第4図 第1号遺構実測図(1/80)

基壇の中心を約1m掘り下げたが、すべて海岸から持ってきたと思われる表面がツルツルした浜石がぎっしりと充填されている。その下部は長さ1.2m、幅0.4m、深さ0.3mの大礫で囲まれた主体部があり、中から青磁片、土師器片、鉄釘、人骨細片が出土した。青磁片は竜泉窯系で口縁がL字状に内側に張り出す香炉とも考えられるが、外面に雷文が見られる。土師皿はロクロ成形で直径8cm、高さ1.5cmで底部は板目圧痕である。時期的には15世紀代と考えられる。なお鉄釘が出土していることから木棺が置かれていたことが想像される。副葬品の量が少なく、しかも破片だけということからして主体部だけ二次的な破壊を受けたとも考えられるが、浜石がつめ込まれた状態では確認できない。

なお基壇上には関西式の宝篋印塔が据え置かれたと思われる。石垣の中に散乱した状態の部分を集め、後に復原されたものである。一応壇上には2基を復原したが、根拠は以上の状況によるものである。石塔の向きは石垣の入口を正面観とした。人骨については細片であるため部位や性別等についても判別していない。

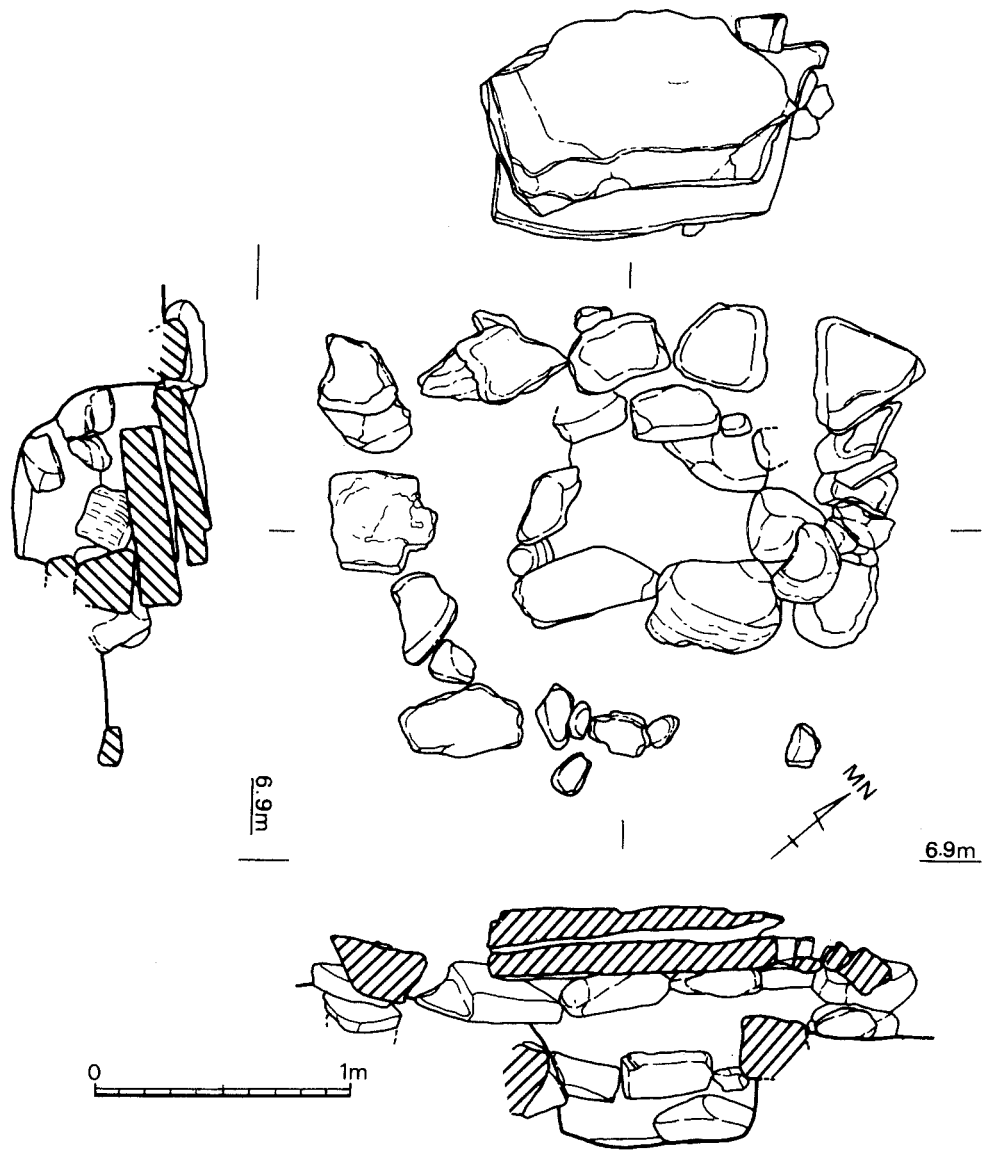
② 第2号遺構

2号墓は墓域の北端にあたり、南側にゆるく傾斜した部分で西側には五輪塔群が崩壊し散乱していた。表面には長さ1.4m、幅0.7m、厚さ0.2m弱の板状の砂岩が2枚重ねたように覆っている。

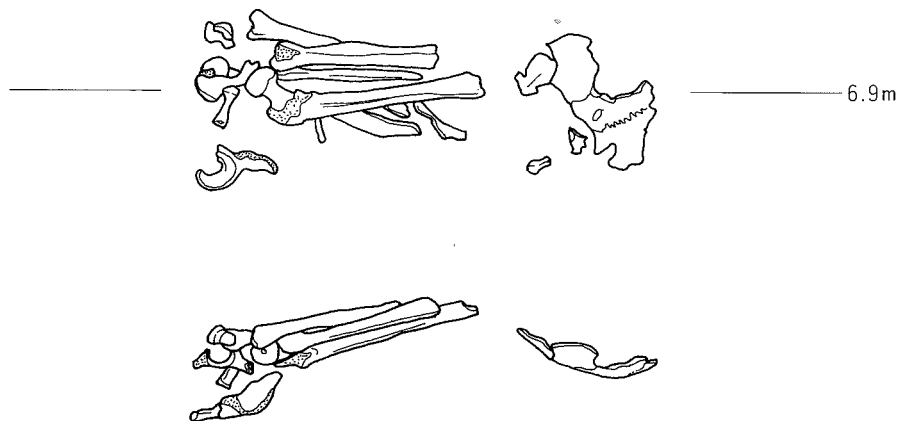


第5図 第1号遺構下部遺構実測図(1/20)

2枚の上石を除く長さ2m、幅1mの、大礫を用いた配石が見られる。そしてさらに下部には長さ0.7m、幅0.5mの土壌が大礫で囲まれている。土壌内からは人骨が一体保存の良い状態で出土している。この土壌内には砂と土が混り合った状態で出土している、なお副葬品は見られない。



第6図 第2号遺構実測図(1/20)



第7図 第2号遺構人骨出土状況実測図(1/10)

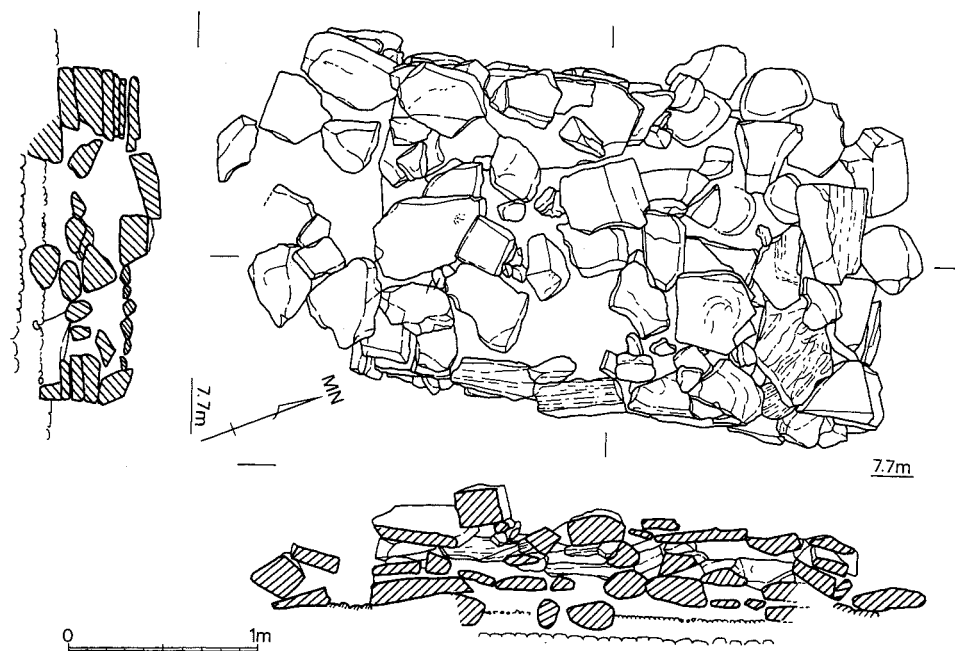
③ 第3号遺構

3号墓は町道北側地区の一番西側に位置している。1号遺構と同様長方形の基壇を持つ。長さ2.5m幅1.8m、高さ0.4mを測り1号遺構より規模の面で劣る。基壇は板状の砂岩を丁寧に積み上げたもので、上部には何も無い。表面の石を取り除くと、海岸から運ばれた玉砂利がびっしりと埋め込まれている。掘り進めて行くと、棺床面と思われる部分からわずかな骨片が出土した以外は何も遺物は出土しなかった。基壇がしっかりしていることからこの上部には宝篋印塔が据えられていた可能性が強い。

④ その他の遺構

曲古墓群では墓地の形態が数列観察される。第1には第1・3号遺構で見られる基壇を設けた墓地である。高い部分に見られ、未調査例を含めると10例程に達すると思われる。そしてこれらの主体部には玉砂利が充填されるようである。第2は階段状に区画割がされる部分で主に海岸から運んだ大礫で積み上げられている。この区域には五輪塔が墓標として建てられているようである。第3には自然の板状の石が建てられているもので、下部遺構は配石や土壌が主体である。おそらくこの種の墓地になると前2者の埋葬よりも年代的には新しくなると思われる。第4には崩壊した礫を整理する行程で人骨が出土したことである。必ずしも深く掘られた状態ではなく浅いことからして、礫だけで覆われた状況ではなかったかという例である。しかも年代も新しい状況が考えられる。

墓標がはっきりしているものは江戸中期以降のものが見られるが、町道北側では現駐車場に面した部分と、町道南側の半島先端付近に密集している。

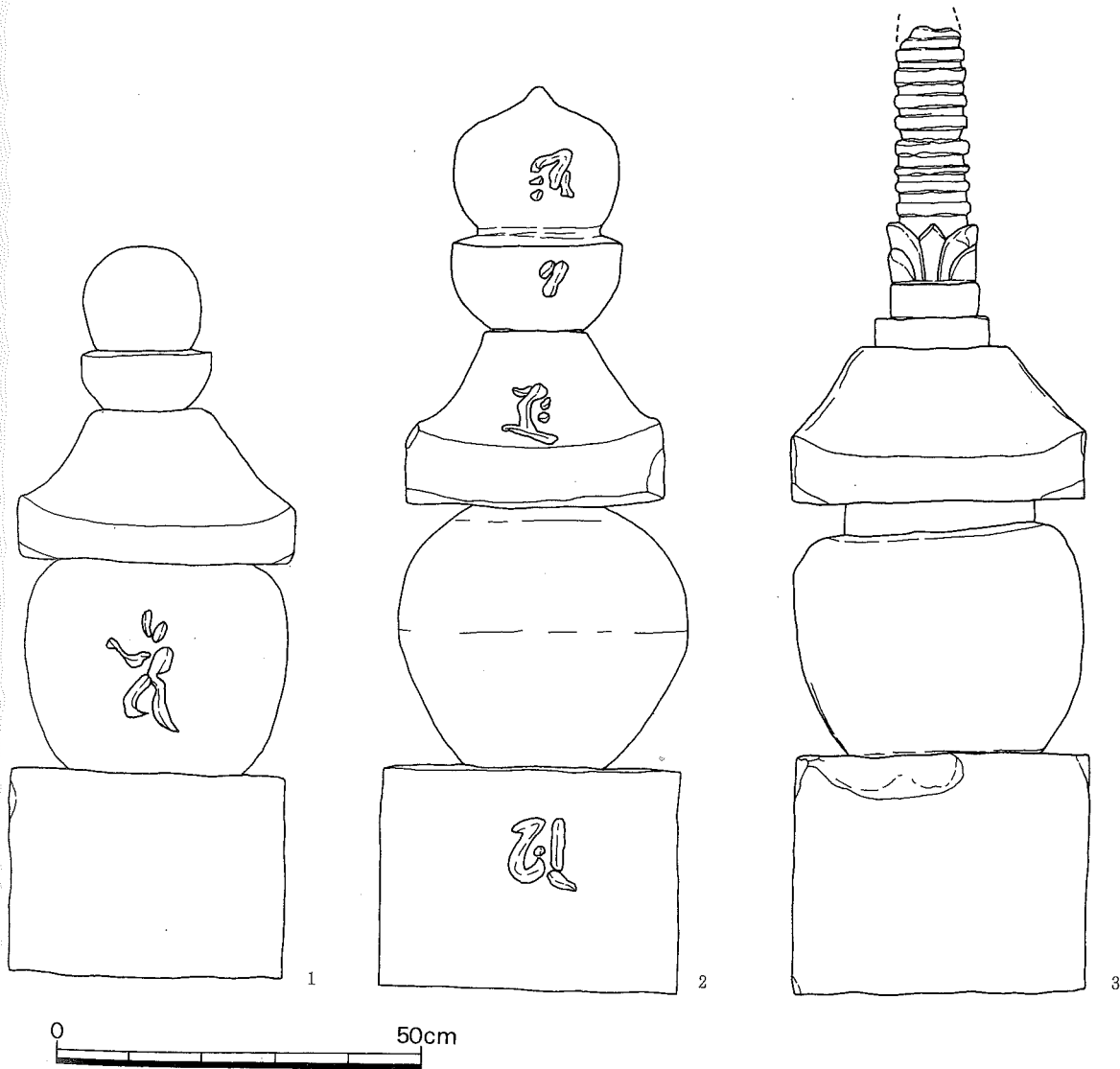


第8図 第3号遺構実測図(1/40)

町道北側の石塔群

墓域に何基の石塔類が存在したのか判然としないが、復原した五輪塔は凝灰岩製18基、花こう岩製11基、各部分を入れると49個を数える。しかしこれらの石塔類はほとんどが崩壊しており、復原についてはゴケ合わせ的要素が強い。また各名所については梵字を有するものと、無いものがある。また第9図3のように火輪の上に相輪をもつものがある。宝珠と請花を欠失するが、水輪は有頸となっている。この種の石塔は県下には例を見ない。第9図2の五輪塔はほぼこの形で埋もれていたものであるが、水輪に種子がないことから他のものと入れ替わっている可能性もある。

宝篋印塔は復原したものは3基であるが、各名所は相輪3，笠8，塔身10，基礎7が確認され、道路南側に1個体分が見られる。復原したものはほぼ1m内で基礎の幅も30cmと小ぶりである。また蓮弁は反花であり格狭間を持たないが、関西形式の特徴を有する。石質は安山岩質凝灰岩で風化が著しい。隅飾り突起は垂直に立ち、対馬峰町円通寺所在の宗家基地の宝篋印塔ともほぼ同類であり、時代



第9図 町道北側五輪塔実測図(1/10)

観は南北朝時代後半から室町時代初期頃に考えられる。

塔身が10個あったことを考えると、少なくともそれだけの個体数が所在していたと思われるが、基壇の数が8~10あったことを考えればうなずける数とも言える。第10図5は花こう岩に楊をもった地藏を彫り込んでいる。高さ65cm、幅24cm、最大厚14cmを測り、頂部は三角形状を呈する。この種のもは1例のみで原位置からかなり移動していると思われる。第10図6は縁泥片岩（青温石）製の宝篋印塔基礎部分である。約35cmの方形で上部に小さな種子が刻まれ、その上は2つの段をもつ。平面中央には8cmの方形の穴が割りぬかれ、塔身部と合わせるようになっている。縁泥片岩製の石塔はこの他に五輪塔水輪の割れたものがあるだけである。

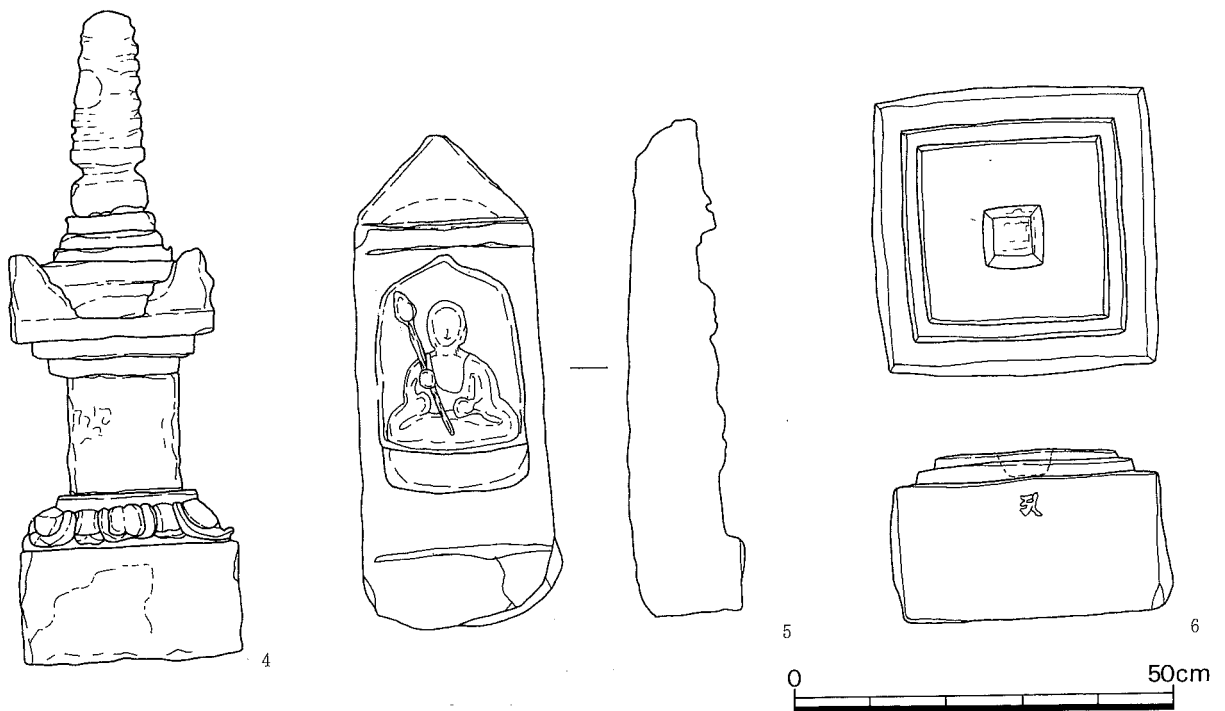
この他大小の自然石を用いた板碑は152基を数えるが、そのほとんどが無銘である。

町道南側の調査

道路から南側は樹木の生えていない礫の多い部分と樹木の繁茂している部分から成り、半島の先端部には江戸時代から現代にかけての墓地が形成されている。

町道に接した南側はやや平坦地で表面は大小の礫で覆われている。この所から東側の内湾部にかけての斜面には階段状に並んでいたと思われる墓石が散乱している。またここには後世に作られた基壇上に宝篋印塔1基と五輪塔数基が置かれていた。なおそこから南側には整然と区画された中に五輪塔群が位置している。石塔群はこのあたりから西側には広がらず、大礫が複雑に組み合わせられ、墓道を思わせるものや、積石塚を思わせるものもある。

調査は先ず調査区全体を5m×5mの方眼に区切り、南北に0~14の基準杭を打った。また地形測



第10図 町道北側宝篋印塔及び石塔実測図（1/10）

量のため、1～12のポイントを設定した。

町道に接した平坦面では弥生時代中期の甕棺片を表採したので2m×4mのトレンチを設定した。土層は円礫の混じる黒褐色砂質土層が主体で、その下層は拳大の円礫層となるが期待された弥生土器の発見には至らなかった。地元の話では町道工事の際に素焼きの土器が出土したということで甕棺の可能性もある。

区画をもった五輪塔群は標高3m～4mの間に位置している。区画は人頭大から拳大までの礫で方形に囲んでいる。五輪塔はすべて凝灰岩で作られ原状を保っているものは見られず崩壊している。そのため復原については同じ区画内に存する各名所を集めて同一個体とした。

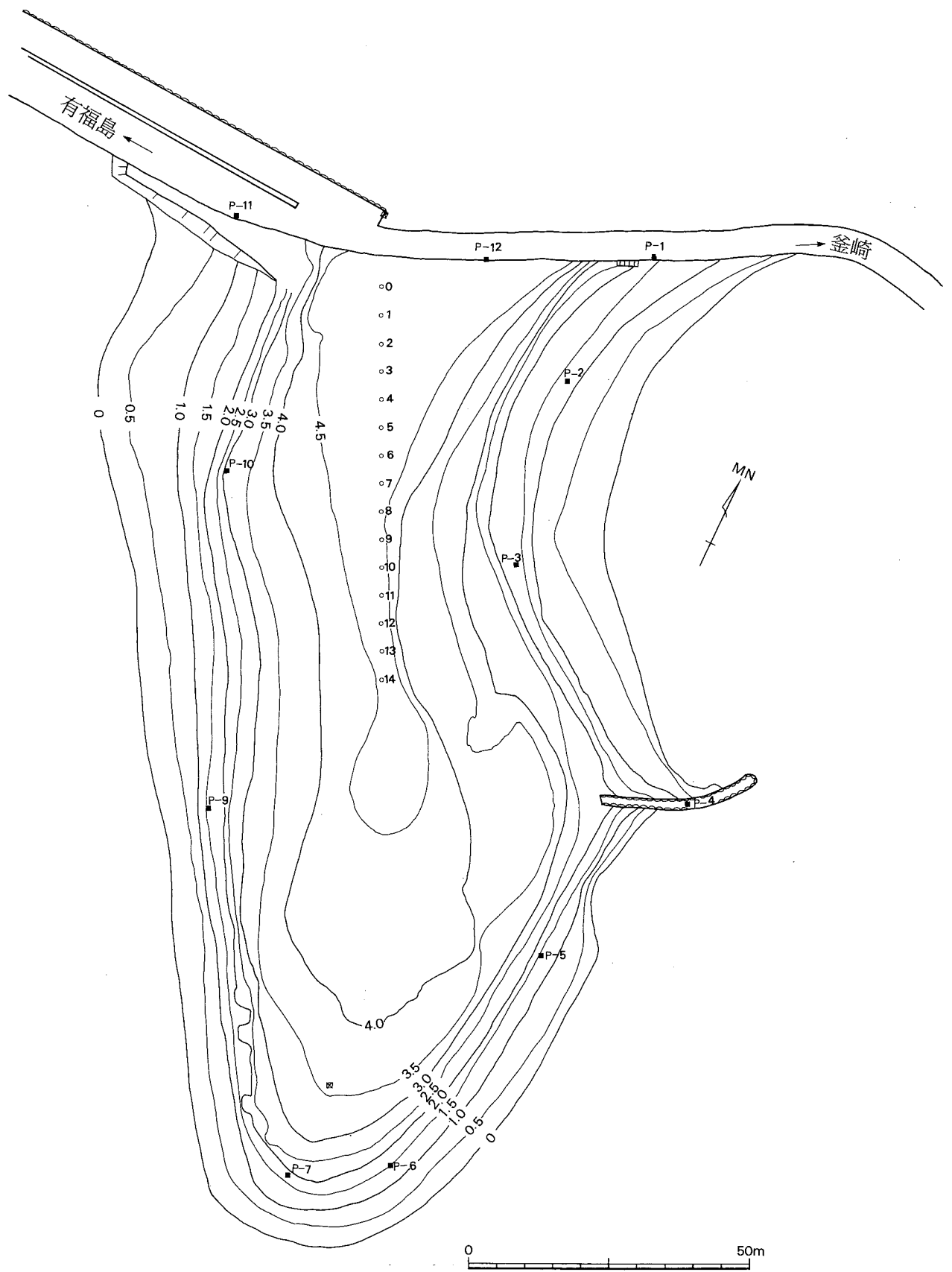
1号五輪塔は一番北側の部分にあたる。南北3.65m、東西3.35mのやや長方形を呈する。水輪からは礫上に散在しているが空風輪は同一ではない。地輪は木の根にからまり礫層中に埋まっていた。取り出してみるとその下にも厚さ15cm程の台座が敷かれていた。さらにその下を少し掘ると土師器片と共に鉄釘と思われるものが出土した。この区画が一番大きいのが、東側にも一段低い所に重なるように区画を設けており花こう岩の五輪塔と宝篋印塔の基礎が散在していた。2号五輪塔は原位置と思われる所からやや西側に崩れている。この区画は約3mの方形を呈し、板岩も使用されている。区画のほぼ中央部を掘り下げてみた。表面には玉砂利が敷かれているが、その下は大礫が不規則に投げ込まれた状態で二次的破壊を受けているようで、棺床面と思われる混礫土層からは小さな土師器片が数点出土しただけであった。3号五輪塔は基礎の部分が区画のほぼ中央に据えられ原位置を保っているものと思われる。区画は約3mの方形を呈する。4号五輪塔は3mのほぼ方形の区画を呈して地輪は中央部に位置する。この中央下部にトレンチを入れた。その結果2層下部の混礫土層から遺物が出土した。いずれも小破片であるが、青磁碗底部、同安窯系碗片、口禿白磁片と土師器片などである。さらに4層の小礫混りの層からは古式土師器片の出土があり、中世以前の古墳時代にも利用されたことが窺えた。なおこの4号墓の年代は陶磁器から推定すると14世紀中頃に比定されよう。5号五輪塔の区画は東西2.8m、南北3.4mで長方形を呈する。地輪はほぼ現位置にあるものと思われ、全体の中で一番まとまりがある。

1号五輪塔と3～5号五輪塔は約2mの空間があり、区画の規模も前者が大きく後者は約3mの区画を保ち0.3m～0.4mの空間が設けてある。このことは1号五輪塔の被葬者が特別の地位を得ていたとの見方もでき、さらに宝篋印塔の基礎が置かれていたことから肯首できよう。

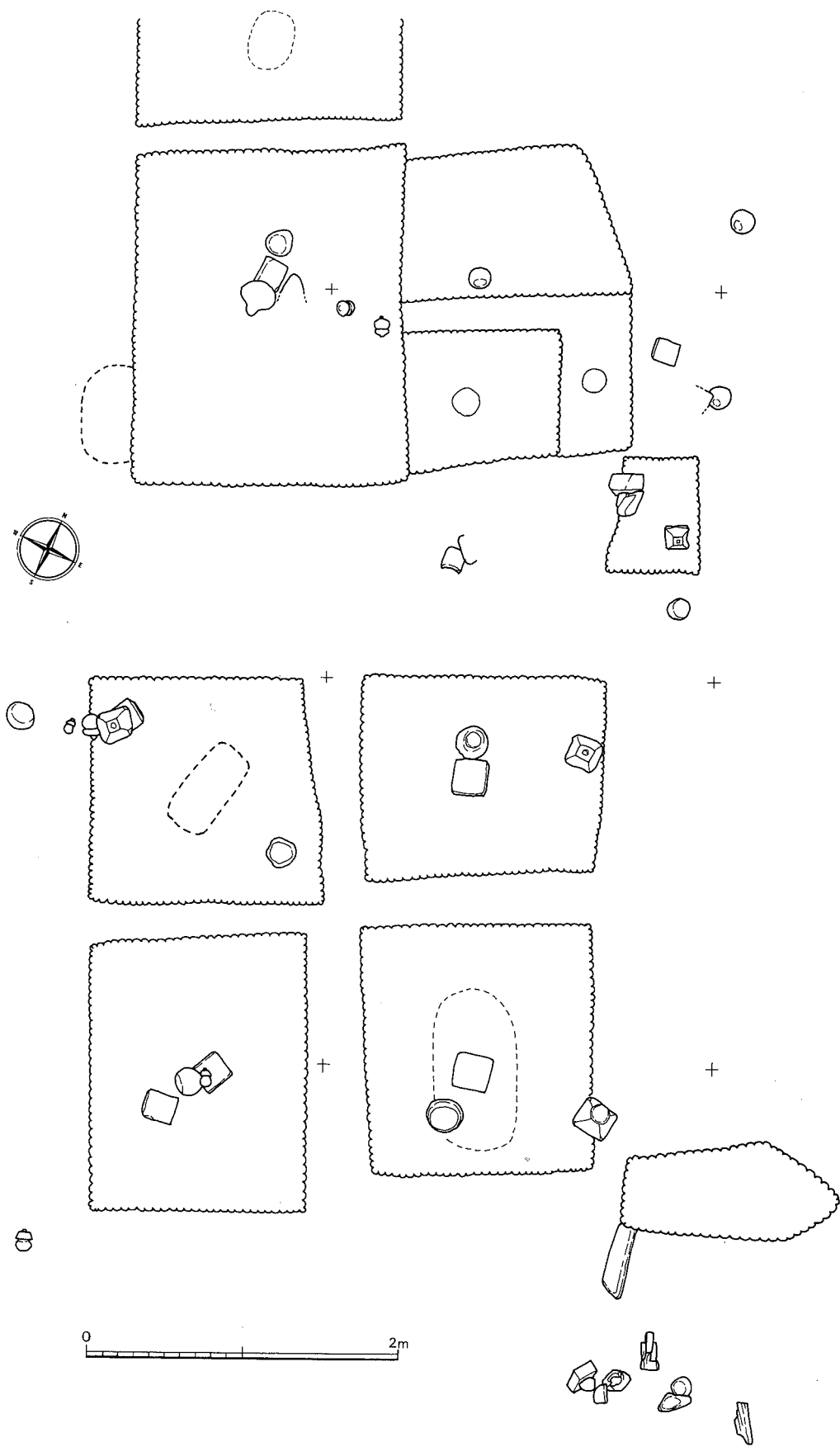
1号五輪塔の東側に段違いの区画が構築されていることについては、少なくとも下段については後世拡張されたと考えられ、時期は花こう岩の五輪塔と同じ室町期であろう。

五輪塔群から若干南側に自然の板状の石を用いた板碑が数基所在する。大きいものは高さ1.5mに達し、やや傾いているものもある。時期的にはいつ頃か判断できないが、五輪塔群から離れていることや区画性を持っていないことなどを考慮すると、若干新しい時期が考えられる。

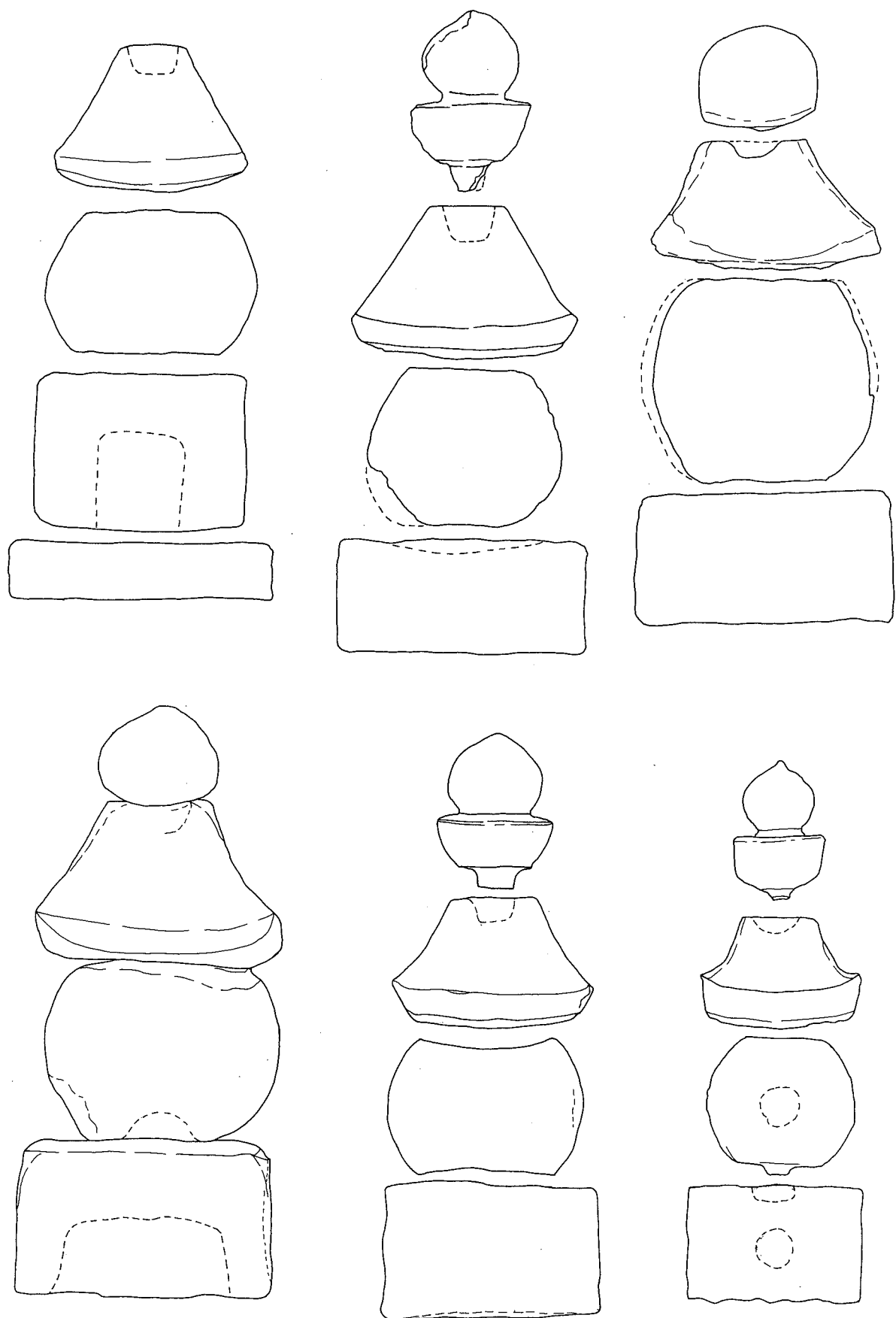
町道に隣接した東側斜面もかなりの崩壊が進んでいた。礫を整理していくと、階段状に板石を積みあげた墓域が現れ、それに従って復原したが、この地区は自然の板石利用のものが多いため崩壊礫を除



第11図 町道南側調査区地形図 (1/1,000)



第12図 町道南側五輪塔群位置図 (1/40)



第13図 町道南側五輪塔実測図 (1/10)

去する課程において表面から人骨も出土したが取り上げず、同地点に埋葬した。整備中に出土した遺物として和鏡1枚と瓦質火鉢が2個体分出土している。

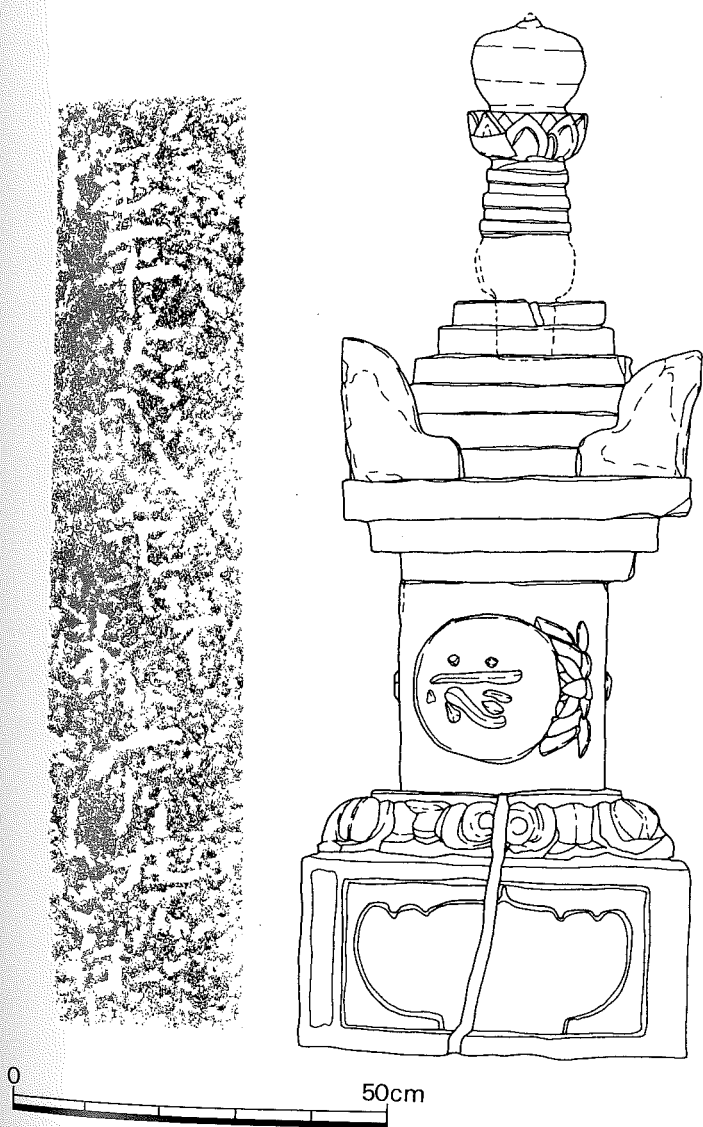
第13図は1号～6号五輪塔である。高さはほぼ1m前後で6号の花こう岩製を除いて、他は凝灰岩製である。1号は空風輪を失っている。火輪はあまり張らず台形状を呈している。地輪は中央部が割りぬかれその下に一枚の板石が見られる。2号は全体的に風化を受けている。地輪中央はや凹んでいる。3号は固い石を含んだ凝灰岩で全体に風化が著しい。空輪の部分しか残っていないが風輪は欠失している。4号も風化著しく先端は空輪だけである。全体にどっしりとした感じで笠の部分がやや張っている。水輪と地輪に割りがあがる。5号は風化を受けず全体的にしっかりしている。水輪は両端が凹んだいわゆる噛み合わせ式になっている。6号は花こう岩製である。火輪の笠は端部がつり上りピンと張っている。水輪は下部に突起を持ち地輪の凹みと合うようになっている。なおこの部分には4面に種子が彫ってあるが、風化で読みとれない。

町道南側における石塔類は五輪塔花こう岩地輪4、水輪3、火輪3、空風輪2、凝灰岩地輪10、水輪8、火輪3、空風輪5となっている。宝篋印塔は基礎1、笠1となっている。

釜崎宝篋印塔

日島は南に漁生浦島と対峙し、中心の釜崎は北側の山を背景に天然の良港となっている。宝篋印塔は東端の岬の一段高い地に位置している。ここからの眺望はすこぶる良く日島湾を一望でき、湾入口の三年ヶ浦、日島東側の月ノ浦、湾奥の浦内湾なども眼下に治めることができる。

岬の高台には石塔安置のため整地され区画が作られている。その表面には玉砂利が敷かれ扁平な石が基壇として敷かれている。相輪は途中で折れているが、宝珠と請花、九輪の一部が残っている。笠は上に6段下に2段に分かれ、隅飾り突起がわずかに外反している。塔身には月輪と種子が彫まれ蓮華



第14図 釜崎宝篋印塔実測図及び紀年銘拓影

座をもつ。地輪は彫りの深い蓮弁の反花があり下に格狭間をもつ。石塔の高さは復原高約150cmを計る基礎の両端には銘が刻まれ「正平廿年丁未十一月二十日敬白」と読め1367年の造立と考えられる。この銘は石塔の造りに反して貧弱であり、この地に運ばれてから陰刻された可能性が強い。なおこの石塔は一度倒壊しており、塔身も横に積まれ、地輪は四分割に割れている。宝篋印塔が地形的にも険しい突出した場所に位置していることは、生活の場としての集落全体、ひいては重要な港湾を見下し擁護する。祭祀的要素を強く持っていたことが窺われるのである。

石塔は風化や損傷が大きく、岬の高台部分も崩落が著しくなっており、斜面の崩落防止と石塔の劣化防止が急務となっている。

(2) 遺物

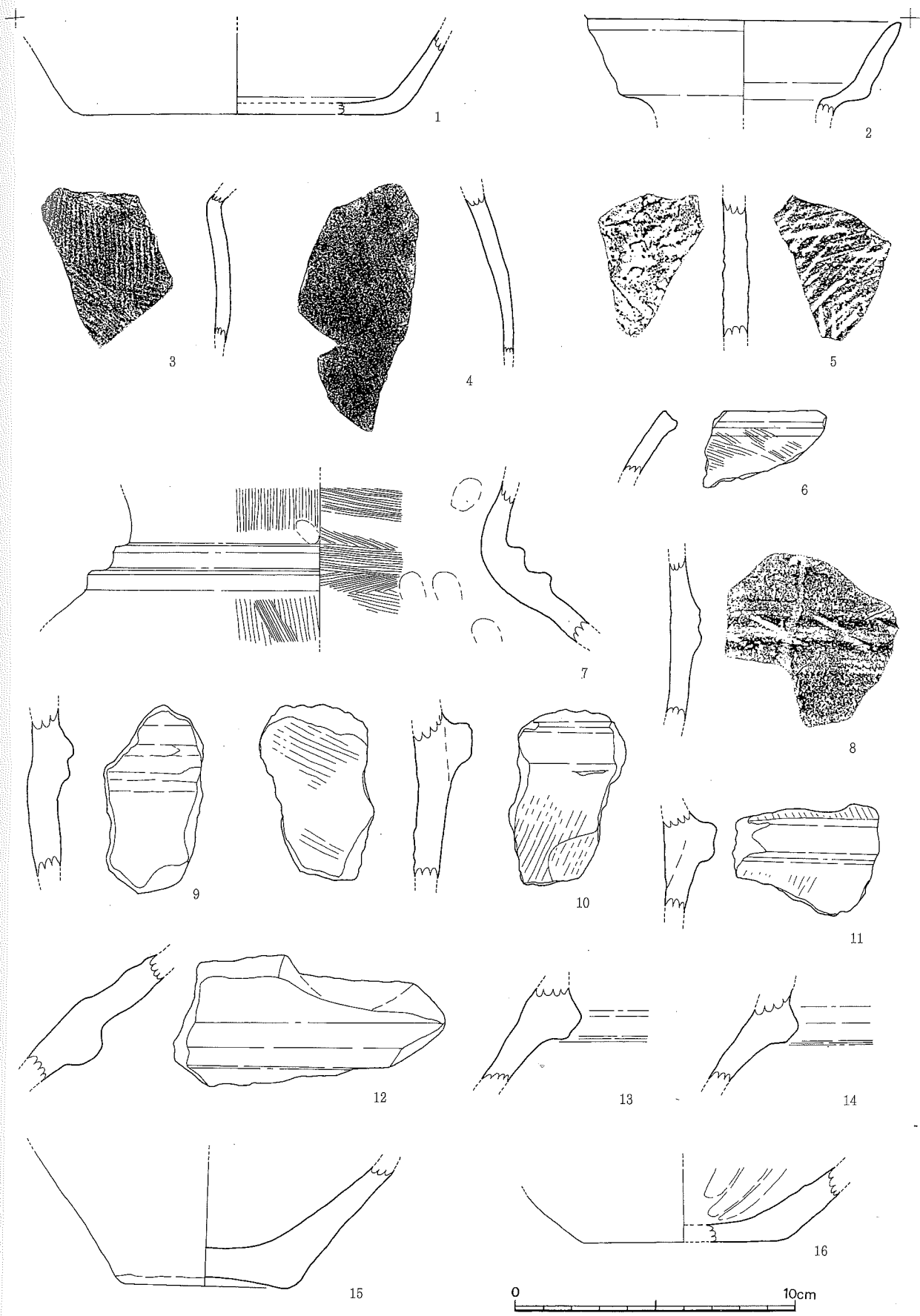
曲古墓群の調査は整備に重点を置いたため、発掘調査は限られたものとなり遺物の量も少ない。

① 弥生・古墳時代の遺物 (第16図 1～16)

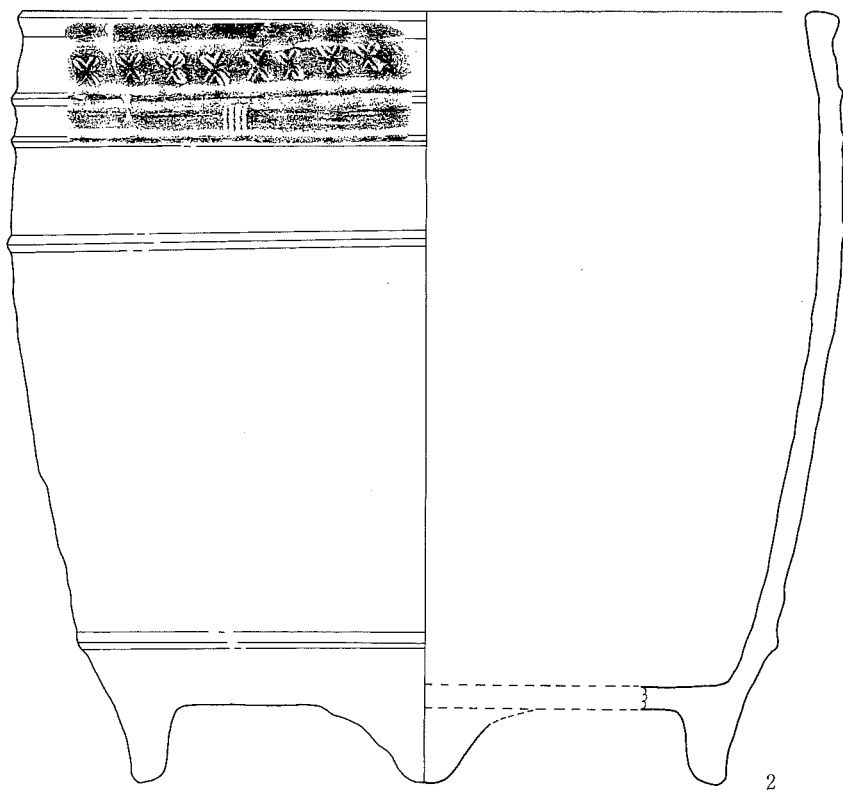
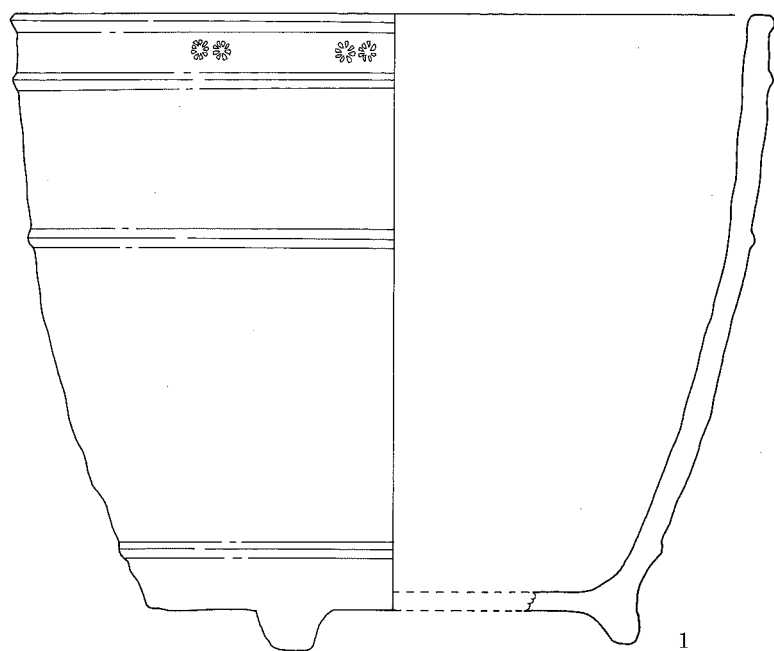
町道南側で表面採集の土器である。ほぼ集中しているが、5～6mの範囲に散布していた。7は壺頸部でくびれ直下に断面三角形の貼り付け突帯が2条巡る。内外ともハケ目調整が行われ、胎土には石英粒を含み焼成も良好である。8は胴部で弱い貼り付け突帯の中央を凹ませ、鋭利なもので片側からだけ刻みを入れている。突帯の上下は5mm巾で押し引きの跡を留めその他はナデている。内面には弱いハケ目が観察できる。胎土、焼成は良好である。9～14は甕の破片で断面台形状の貼り付け突帯を有する。胎土には石英粒や白い砂粒を含み焼成は良好である。同一個体で甕棺としての性格を有すると思われる。15は甕底部で直径6cm、上げ底を呈する。外面は研磨され丁寧に仕上げされている。胎土には石英など粗い粒子を含み焼成は良好。16は内面に指による調整痕が見られ、外面はナデ仕上げである。胎土は良好であるが焼成が甘い。時期的には8が後期に属すると思われるが、ほかは中期に比定できよう。6は土師器の甕口縁で口唇部がわずかに凹む。内外はハケ目が弱く付く。1トレンチからの出土である。1～5は2号五輪塔の棺床より下部からの出土である。1は土師器皿である。底部はヘラ切りである。2は二重口縁の壺になると思われる。胎土、焼成も良好で横ナデされている。3・4は古式古師で小破片は多く出土した。甕頸部で内外面に繊細なハケ目を有する。5は4号五輪塔棺床面下層から出土の須恵器で内外面に粗い叩きを有する。古墳時代の遺物は町道両側に限って混雑土層中より出土するようである。

② 中世の遺物 (第15図 1～2)

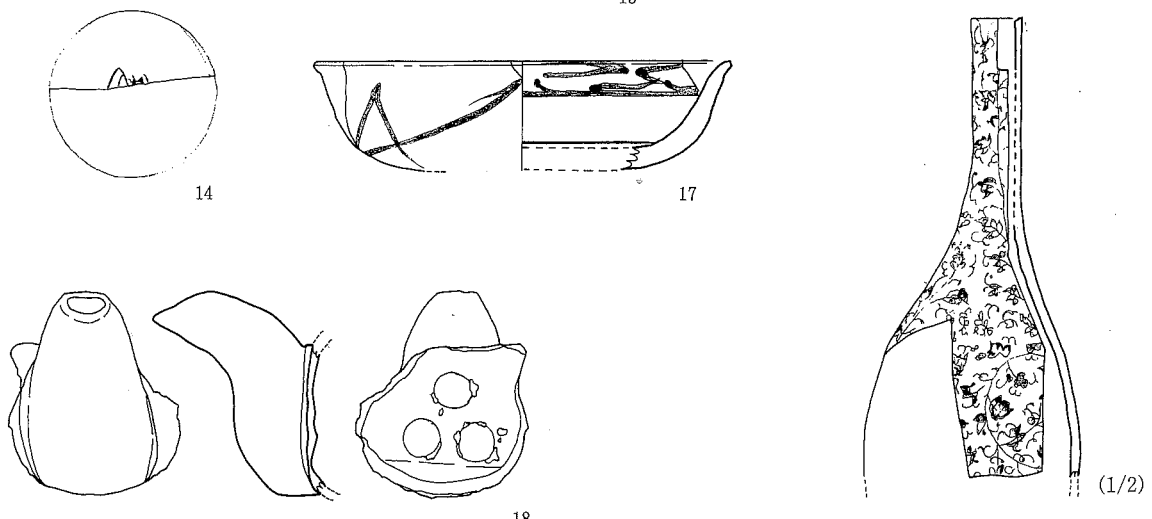
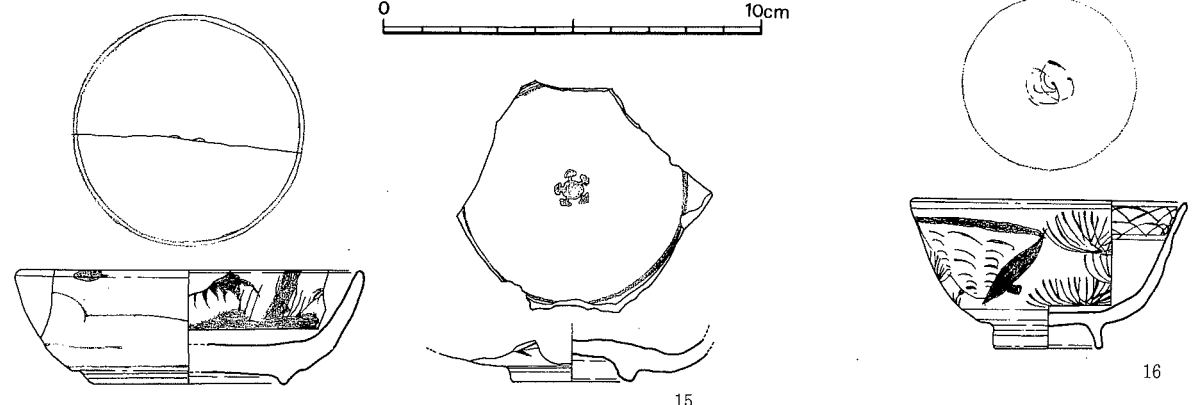
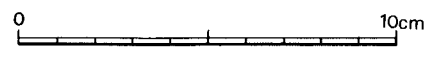
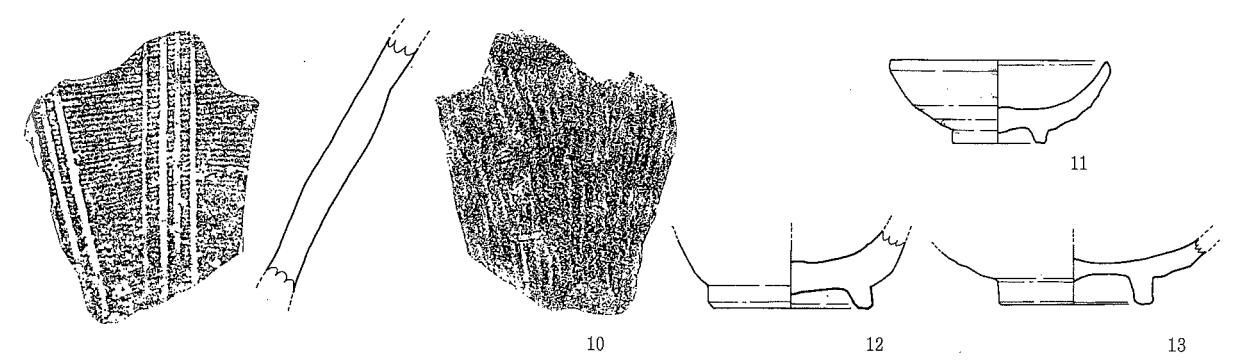
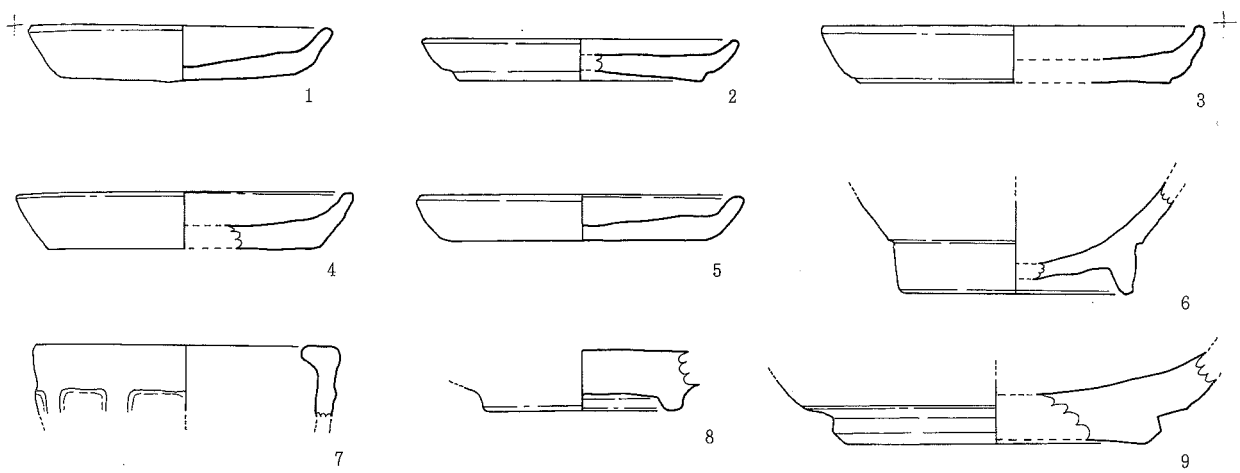
1号五輪塔西側から出土したこの2個体の火鉢は、出土したというより表面にのぞいていた。ほとんどバラバラの状態であったが完形に近い形に復原することができた。1は口径径30cm、高さ25.5cmを測り貼り付けの足を4本もつ。体部は内湾ぎみに立ち上がり口縁は開く。口縁部、口縁直下、胴部、底部直上の4本の貼り付け突帯を巡らせ、口縁直下には花卉のスタンプを押捺している。焼成はやや甘く暗褐色を呈している。2は1よりもひと回り大きく、口径32.7cm、高さ30.6cmを測り4本の足をもつ。体部はやや内湾ぎみに立ち上がり口縁は内側にすぼまる器形である。貼り付け突帯は5本見ら



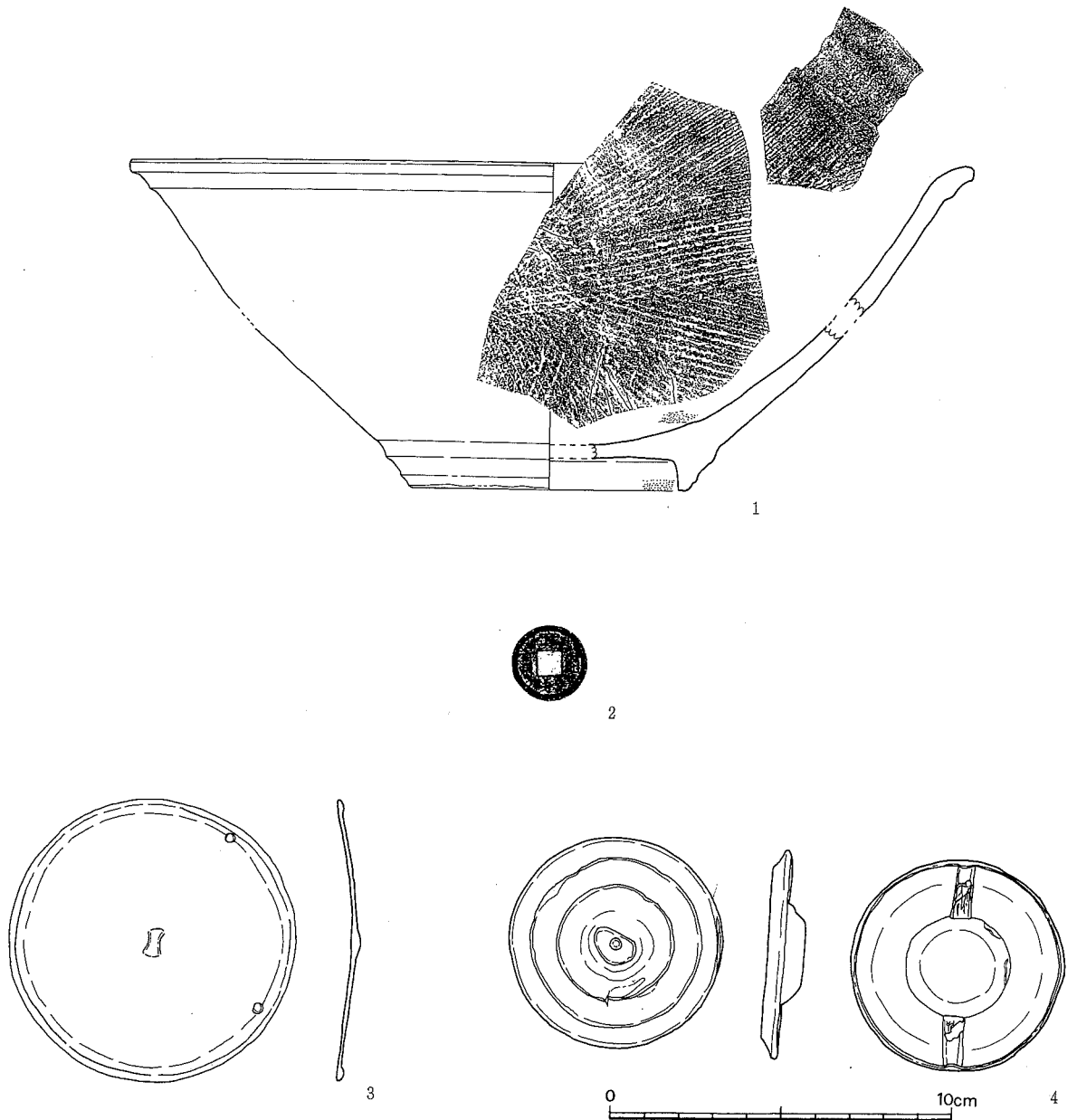
第15图 出土遺物実測図(1)



第16図 出土遺物実測図(2)



第17図 出土遺物実測図(3)



第18図 出土遺物実測図(4)

れ、1本と2本目の間に花菱文が巡る。さらにその下には縦3本の短線を入れ区切っている。外面色調は暗灰色を呈し焼成は良好である。

2個体の火鉢が墓地から出土したことについては、本来の目的からはずれて転用されたものと考えざるを得ない。出土状況はバラバラに壊れた状況ではあったがほぼ完形品として復原されたことは、原状でこの地点にあったということであり、第1に考えられるのは骨蔵器として利用された点である。ただ人骨等は認められていないが、2号、4号五輪塔下部からも人骨が検出できなかったのは、残りにくい土壌体質であると考えられ、骨蔵器とし転用された火鉢に残らなかったのも当然であろう。時期的には供伴関係から困難な点もあるが、15世紀頃が考えられるのではないだろうか。

第17図1～7は町道北側第1号遺構出土の遺物である。1～4は土師皿で口径は8.5cm～9cm内外で

ロクロ成形である。4・5は底部に板目圧痕を有する。6は白磁の高台付碗である。内外に貫入が見られ底部からの立ち上がりの所が細い線で区切られている。7は青磁の香炉破片である。口縁部が逆L字状になり外面に雷文がわずかに残る。時期的には供伴関係から14世紀後半から15世紀頃に比定できると思われる。8・9は4号五輪下部からの出土である。8は龍泉窯系青磁碗底部である。高台には厚く釉がかけられぼつりしている。13は底部であるが釉がかけられていない。壺状の容器になるものと思われる。この他図示しなかったが内面に櫛目をもつ同安窯系Ⅲ類の碗破片や、口禿の白磁Ⅸ類一1の破片も出土しており、4号五輪塔の被葬者の年代は13世紀から14世紀中頃までの時期と考えられる。10は1号五輪塔区画から表採された瓦質擂鉢片である。胎土には石英粒を含み粗いが外面は縦にハケ目が粗く施され、内面には横に丁寧なハケ目が付されている。その上から1単位4本のタテ沈線が走る。体部はやや外反しており周防型瓦器擂鉢に属すると思われる。時期的には14世紀後半から15世紀であろうか。

③ 近世の遺物（第17図 11～19、第18図 1）

整備中に採集されたものでほとんどが18世紀以降の肥前系陶磁器である。11～12は猪口、13は茶碗である。14は厚手の皿で全体がアメ色を呈している。内面には笹を外面には唐草を描いている。15は底部で内面見込部がカキ落とされ、コンニャク判が押されている。16は碗で内面に網目文、外面に松葉様のものと編籠状の文様が配されている。17は皿でつる草文が描かれている。18はアメ色の釉をかけた土瓶の注ぎ口の部分で内側に3個の孔をもつ。19は長頸の瓶で牡丹唐草文が全体に描かれている。頸はゆるく曲がっており口唇部に釉溜まりがある。第18図1は擂鉢で内外とも暗褐色を呈する。見込部には重ね焼の跡が残る。

④ 金属器（第18図 2～4）

2は寛永通宝で表採品3は直径12.4cmの素文鏡で中央に紐を有する。縁はわずかに高くなり内側に2個の穿孔がある。おそらく懸仏の類と同じように転用されたと考えられる。表には何も書かれていない。整備の途中に表採されたが墓前に拱えられたとも考えられる。4は直径6cm、内側は銅張りで同心円状に三重に突出している。外は鉄で中央に直径2.4cmの低い突起が付き中央に鉄線がサビついている。何かのフタとも考えられるが用途不明表採品である。

IV ま と め

五島列島の辺境の地ともいえる小島に文献にも一切出ず、埋もれたままの状態で行われた曲古墓群の調査は、数少ない中世墓研究に大きな成果をもたらすこととなった。

墓地に佇む時、なぜこの石塔群がこの地に林立しているのか素朴な疑問を抱く。当然地形的な要因が先ず考えられる。曲という地名は、おそらく礫丘が細長く突出したところから付けられたと考えられるが、そういう目で見ると同じような地形で同じ地名が多いのに気付く。最も考古学的に知られているのが長崎市近郊の牧島である。ここも小島でありながら礫丘が形成され、古墳時代の墓地となっ

ている。石室をもつものやタコツボ状にくぼんだものが多い。また的場大島の板ノ浦の先端部も的場湾に礫丘が突出し、曲り鼻と呼ばれ古墳が位置している。鹿児島県の長島や、佐賀県の神集島、島根県の見島にも同様の事例が報告されている。いずれも海に面した立地が特長となっている。

県下の中世墳墓の調査事例は、対馬美津島町の塚塔崎墳墓があげられる。34基が調査され数基の自然の板石墓標を立てた積石墓や石棺内から中国青磁や李朝青磁とオニアサリが副葬されていた。年代は15世紀代で宗氏第7代貞茂から第11代材盛の頃であり、地理的には浅茅湾の奥深い所に立地しており弥生、古墳時代以来の伝統を受け継いだ海人集団墓と考えられている。松浦市桜階田遺跡は火力発電所建設に伴って調査され、中世集落や道路状遺構、集石土壌が検出された。集石土壌墓からは完形の鎬連弁文を有する中国輸入陶磁が副葬され、13世紀後半から14世紀前半の年代が与えられている。この集落は松浦党に関係する遺跡と考えられている。なおこの地区は最近まで関西形式の宝篋印塔の存在は知られていなかったが、調川の白龍山護国寺門前に基礎1基が確認され他地域との交流が裏付けられることとなった。

長崎県下における石造物は大石氏の項で詳しく述べられているが、日島における曲古墓群の造立背景はどのようなことが考えられるだろうか。日島は周囲3km足らずで標高243mのバンヤノ峠を中心として平坦地は現集落地のほかはほとんどが見られない。中世の時期も現在の地形と変っていないと思われるので日島だけの集団は考えにくい。おそらく日島湾を中心とする三年ヶ浦や榊浦などの浦々の拠点集落が連合していたものと思われる。そのことは宝篋印塔や五輪塔が点散することからも明らかである。

文献的に確実に日島が出てくるのは永仁6年(1297)に「樋島(ひのしま)在津百姓等が船7艘でもって難破唐船から砂金などの御物類を運びとった」ことが青方文書に見られ倭寇まがいの行動が想起される。また観応3年(1352)の足利直冬充行状写には「五島日島浦の代として同国西浦30町以下の地頭職が伊藤祐武という人物に充行(あてがわ)されている。」「南朝遺文」1428)15世紀後半の朝鮮の書「海東諸国記」肥前州には「温泉二所あり。郡十一。水田一万四千四百三十三町。州に上下松浦有り。海賊の居る所なり。前朝の季、我が辺に寇する者は松浦と一岐・対馬島の人おおむね多し。又五島(或いは五多島と称す。)日本人の中国に往く者、風を待つ地なり。」と倭寇の根拠地や五島列島の風待ちの港が描かれている。さらに、「己丑年遣使来朝す。書に五島日島太守藤原朝臣と利す。宗貞国の請を以て接待す。源勝管下の微者なり。(己丑年1469)という記述が見え五島宇久守源勝の管下にあった藤原盛が対馬の宗貞国の口添で朝鮮貿易を行っていた様子が見てとれる。

海東諸国記の記述年と曲古墓群には年代差があるものの、貿易を主体とした海人集団が東シナ海域を中心に活動していたことは間違いないと思われる。その象徴的なものが釜崎宝篋印塔である。正平22年銘に記される14世紀前後が最も盛えた時期であったことが中央形式の宝篋印塔や五輪塔の多さから端的に物語っている。

中央形式石塔は対馬、平戸、五島列島に及び倭寇との関係もぬきにしてはかんがえられないが、この海域は対馬暖流の影響下にあることも見落とされない。

いずれにしても曲古墓群は浦々とかけ離れたいわば聖地にあたり、海に生きた海人集団の終焉の地としてふさわしい環境といえる。

圖 版



釜崎宝篋印塔



釜崎宝篋印塔遠景



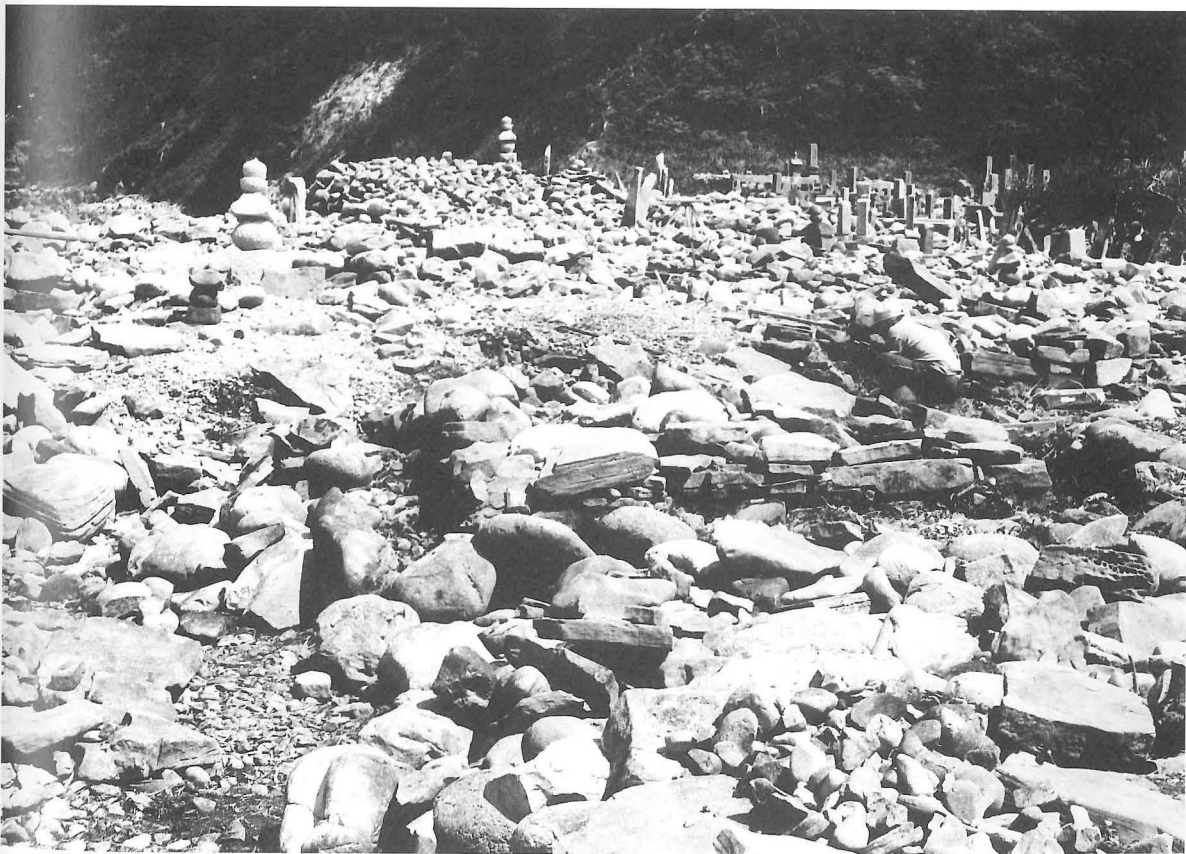
町道北側の整備前の状況



町道北側の整備後の状況



町道北側中央部整備後の状況（西から）



町道北側整備前の状況（西から）



崩壊した石塔群



整備された石塔群



石垣部分の復原状況



整備された五輪塔群



宝塔と五輪塔群



孔が穿たれた五輪塔水輪



五輪塔群

崩壊した石塔群



町道北側整備後の石塔群



整備前の中央部宝篋印塔



整備後の中央部宝篋印塔



石組の状況



棺床面の遺物出土状況



土師器皿の出土状況

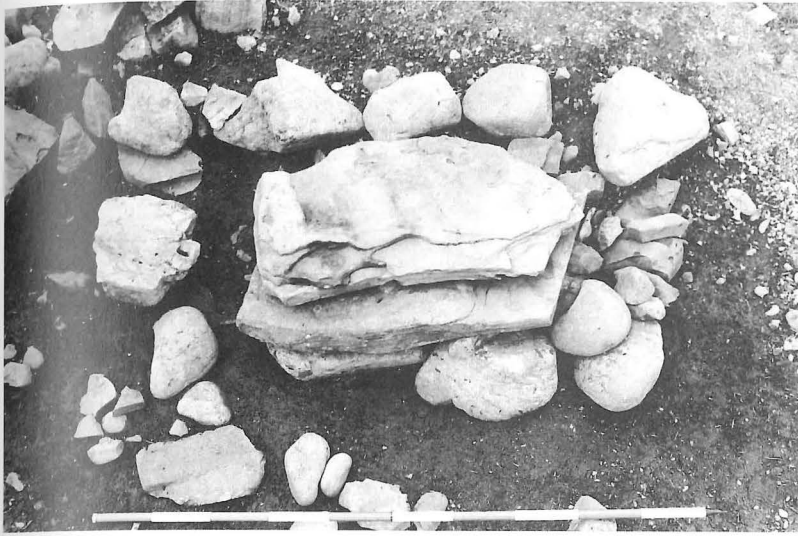
中央部宝篋印塔下部の状況



整備前の第3号遺構

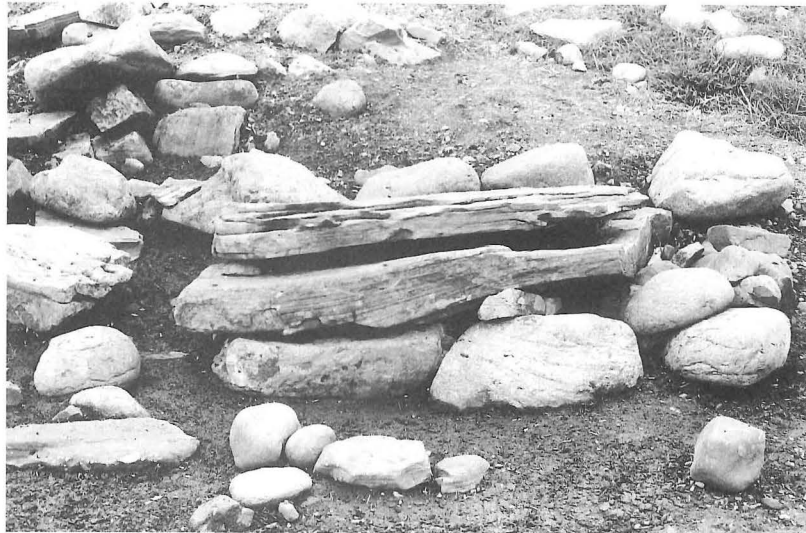


調査中の第3号遺構



全 景

南側から



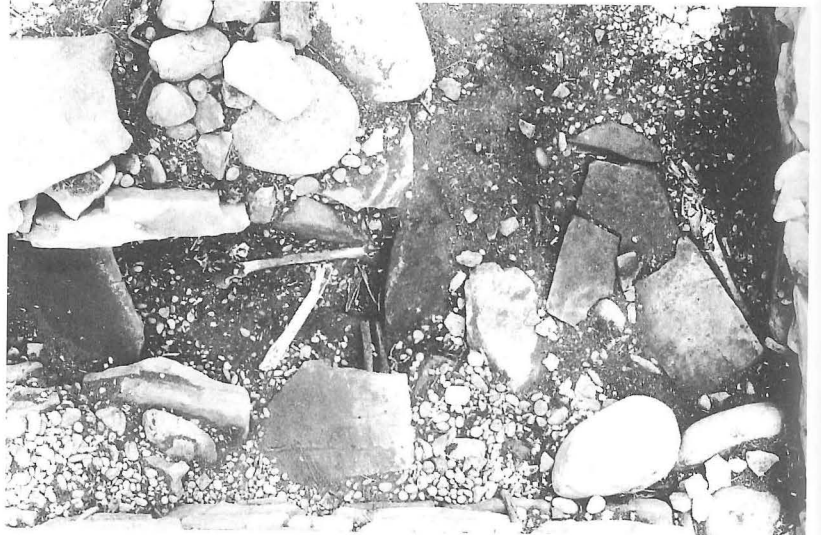
上石を取り除いた
石組遺構

調査中の第2号遺構



人骨取上げ

人骨出土状況



人骨出土状況

第2号遺構調査状況



中央高台付近の石塔群



供養塔横の自然石の板碑



町道南側の自然石利用の板碑



町道北側中央部付近の石塔群



調査前の供養



同 上

石垣の整備状況



町道北側調査風景



調査復原作業風景



町道南側調査区近景



町道南側調査区東側を望む



町道南側整備前の状況



町道南側整備後の状況



町道南側の調査風景

整備前の状況



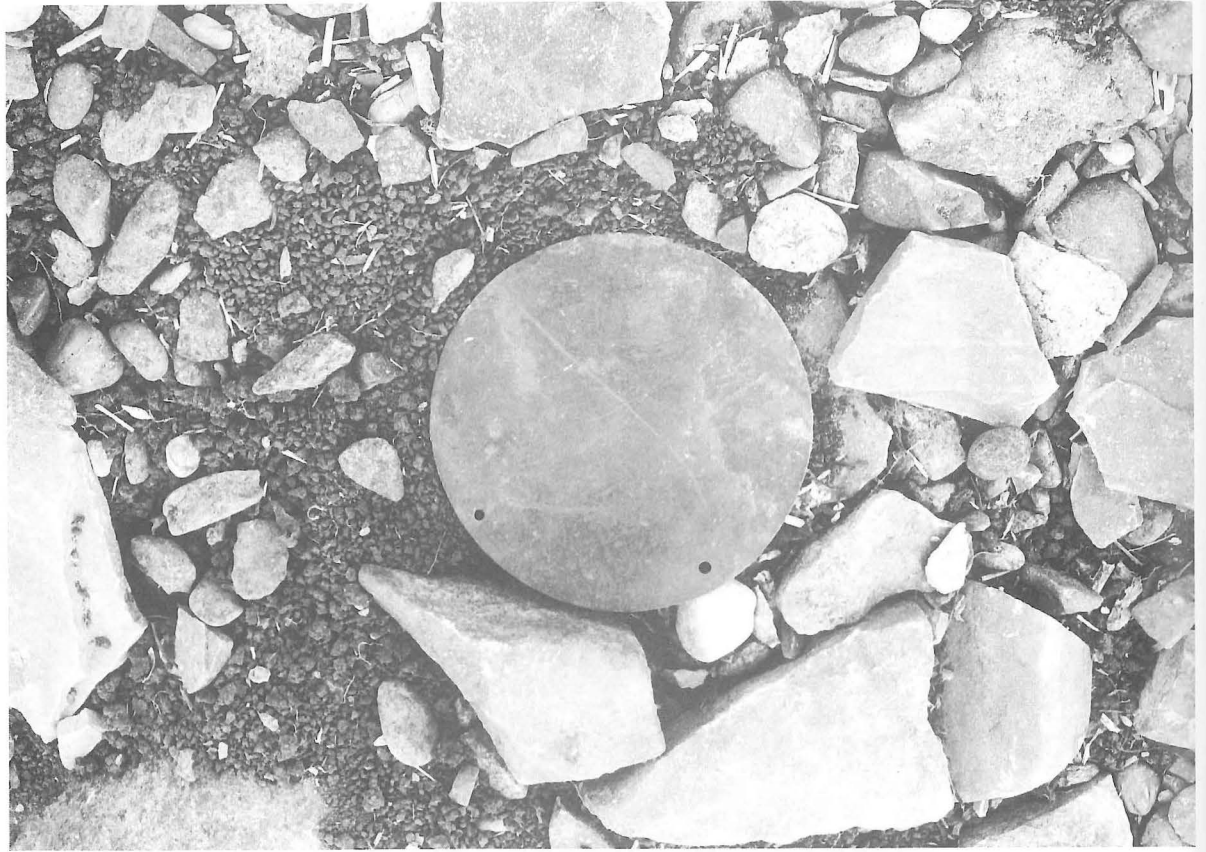
石垣検出状況



町道南側の整備状況



町道南側五輪塔群地区瓦質土器出土状況



鏡出土状況

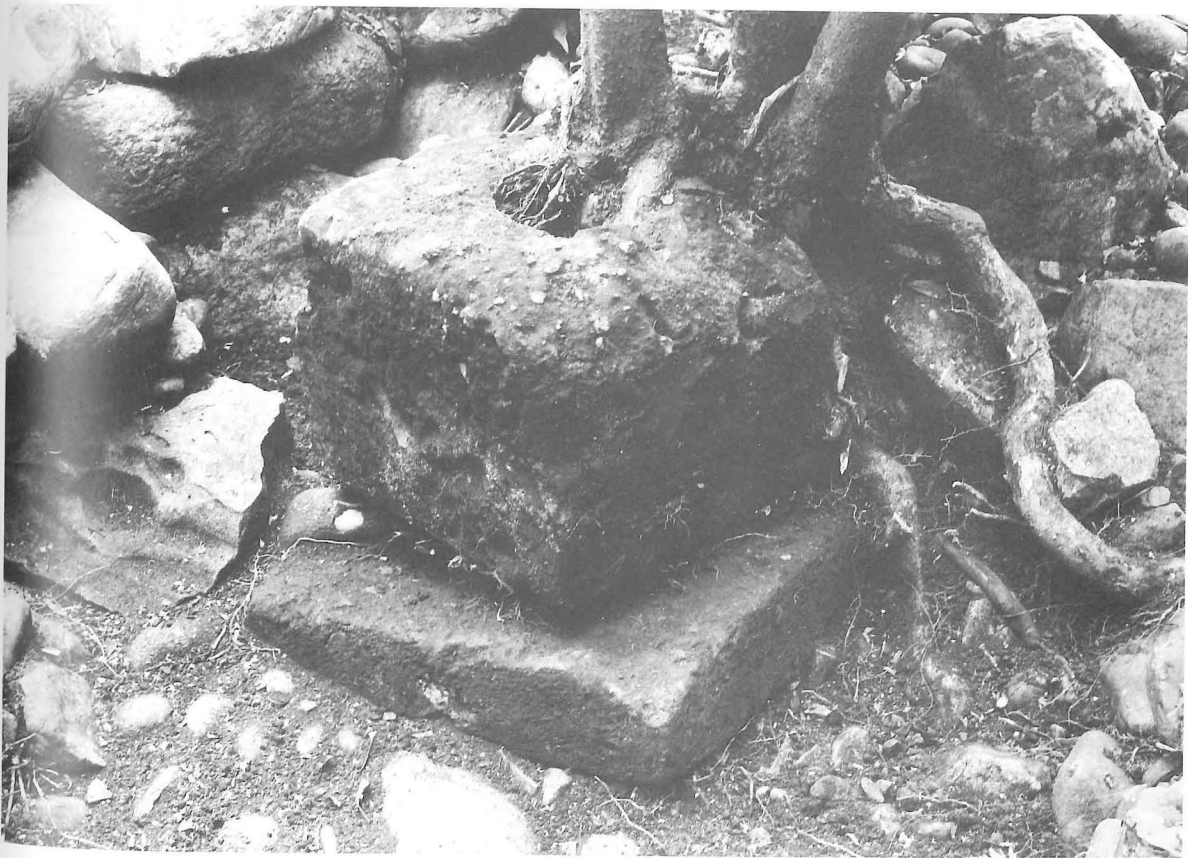


人骨出土状況

町道南側遺物出土状況



整備された五輪塔群



埋もれた1号五輪塔水輪と地輪



崩壊した1号五輪塔



整備された1号五輪塔

1号五輪塔

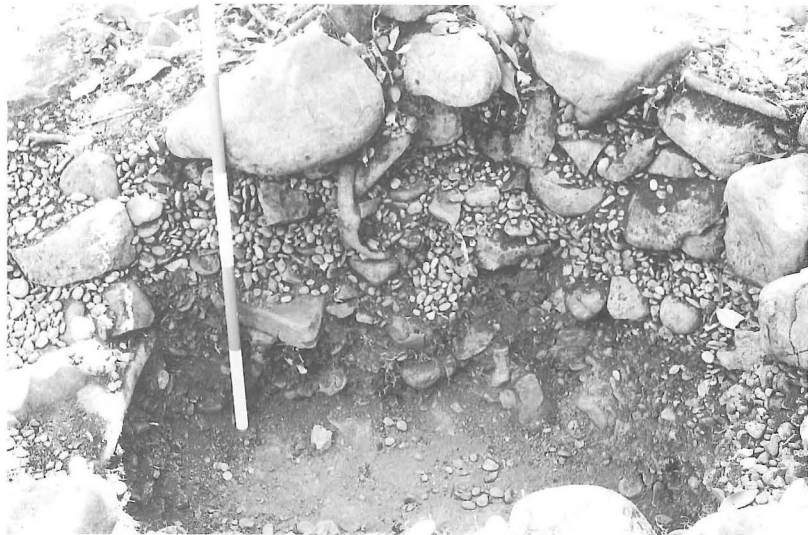


2号五輪塔火輪と地輪

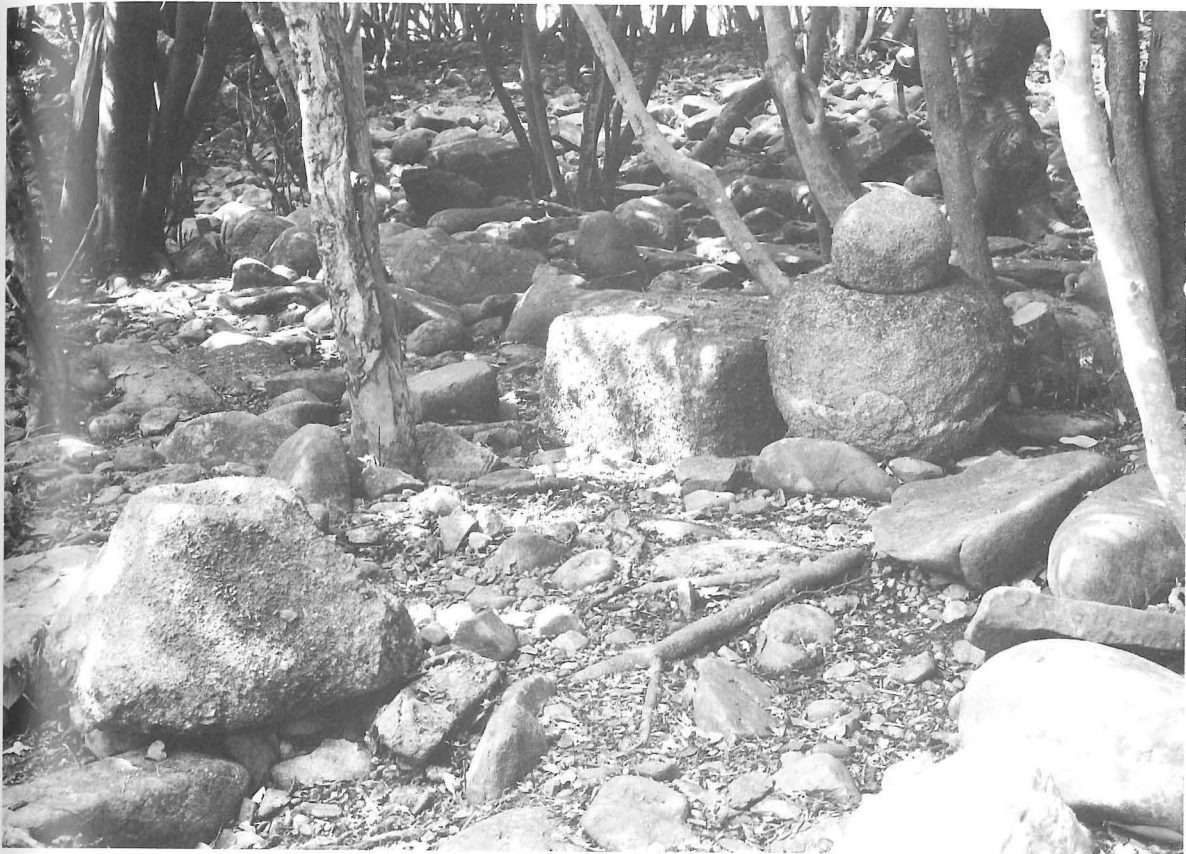


整備後の状況

2号五輪塔



2号五輪塔下部の遺物出土状況



散乱した3号五輪塔



整備後の状況

3号五輪塔



崩壊した状況



整備後の状況

4号五輪塔



5号五輪塔地輪



整備後の状況

5号五輪塔



崩壊した6号五輪塔



整備後の状況

6号五輪塔



町道南側石垣検出の状況



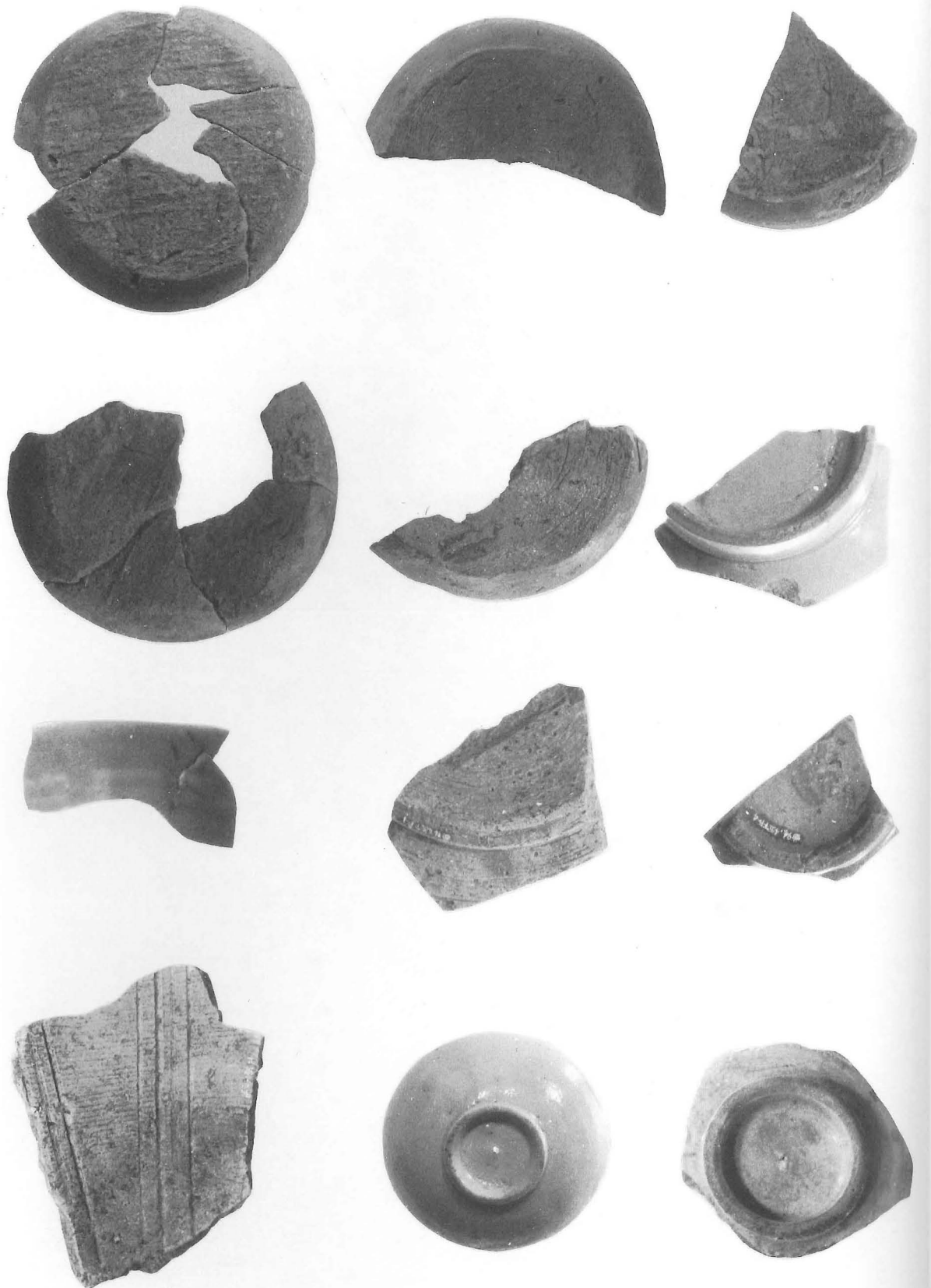
町道南側1号トレンチ東土層



町道南側出土の遺物



町道南側五輪塔群地区出土の瓦質土器



町道北側遺構出土の遺物



町道北側出土の遺物



町道北側・南側出土の遺物



一獣一龍鏡
径8.5cm



八稜湖州鏡
径15.8cm



洲浜柳松群雀鏡
径11.5cm



洲浜双鶴双離鏡
径11cm



松樹双雀鏡
径11.5cm



双千鶴鏡
径11.5cm

山王山二宮岩穴出土の鏡(1)



秋草群虫鏡
径10.6cm



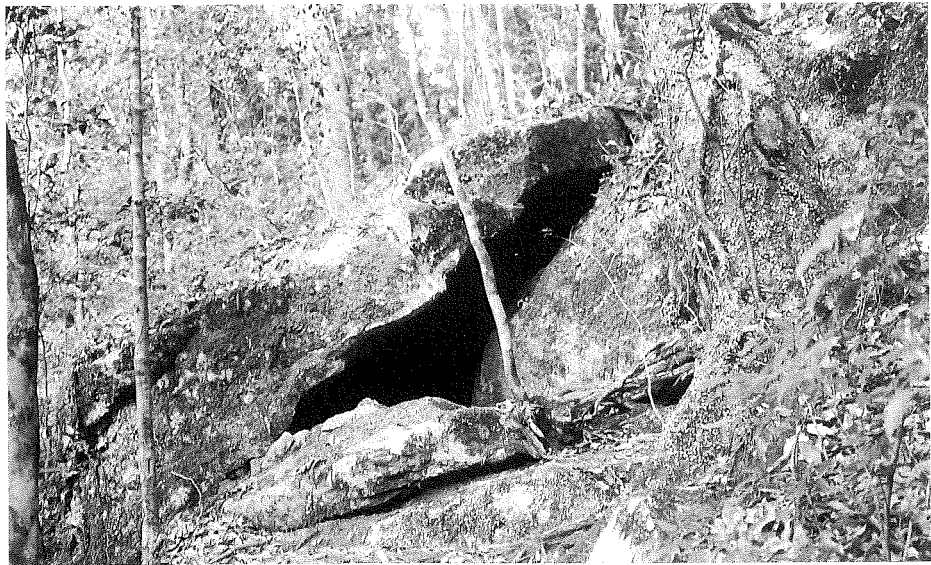
松筏双飛魚鏡
径11.0cm



洲浜秋草松樹双雀鏡
径11.4cm



亀甲菊双雀鏡
径11.4cm



鏡が出土した山王山岩穴

山王山二宮岩穴出土の鏡(2)



臼杵市日吉宝篋印塔



同左近影（奥は臼杵石仏群）



宮崎県国富町義門寺宝篋印塔



大分県大田村財前家墓地石塔群



対馬巖原町内院宝篋印塔



同左近影



対馬峰町円通寺宗家墓地宝篋印塔



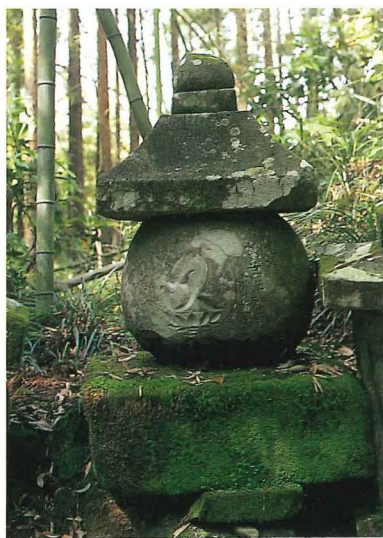
対馬上対馬町西福寺宝篋印塔



長崎県国見町大坪家墓所宝篋印塔



臼杵市中尾五輪塔 嘉応2年(1170)



宮崎市生目小村薬師堂五輪塔 寛喜4年(1232)



臼杵市ホキ石仏群前五輪塔

長崎県若松町日島曲古墓群出土の中世人骨

分部 哲秋*，佐伯 和信*，長島 聖司*

はじめに

長崎県南松浦郡若松町大字日島に所在する曲古墓群は、遺跡整備事業のために1993年（平成5年）の8月から9月と1994年（平成6年）の8月から9月の2度にわたり若松町教育委員会と長崎県教育庁文化課によって発掘調査され、1993年の調査においては中世に所属すると推測される人骨4体が検出された。

中世人骨については、神奈川県鎌倉材木座遺跡¹⁾および山口県下関市吉母浜遺跡²⁾から多数の人骨が出土し、長頭、扁平な鼻根部、歯槽性の突顎傾向などの中世人特有の形態を備えていることが指摘されている。熊本県尾窪遺跡³⁾、大分県立石遺跡⁴⁾、鹿児島県松之尾遺跡⁵⁾等の九州から出土している人骨についても本州の中世人骨とほぼ同様の特徴がうかがわれるが、各遺跡ごとの出土人骨は少なく資料が不足しているのが現状である。

本遺跡出土の人骨は頭蓋はほとんど遺存していないが、四肢骨の観察および計測の結果、興味ある所見が得られたので報告する。

資料・方法

本遺跡は、図19に示しているように日島の最南端の礫丘上に立地し、南北朝から室町時代後期にかけてつくられた古墓群である。人骨は表1のとおり4体で、1号人骨は2号墓から検出された人骨で埋葬時の姿勢を留めていた。2号、3号および4号人骨は石塔、五輪石等を発掘中に検出され、別個体の混入はほとんど無く、一定の範囲内に個体ごとに散乱していたものである。人骨の所属時代については人骨に供伴された土器は検出されていないが、人骨層からは中世の土器のみが発掘されていることから、人骨も当時のものと推測されている。

計測はMARTIN-SALLER⁶⁾の方法で行ったが、脛骨の横径についてはVALLOIS⁷⁾の方法を用いた。

表1 出土人骨資料

人骨番号	性別	年齢	遺構
1号人骨	女性	熟年	2号墓
2号人骨	男性	壮年	—
3号人骨	男性	熟年	—
4号人骨	女性	成人	—

*長崎大学医学部解剖学第二教室

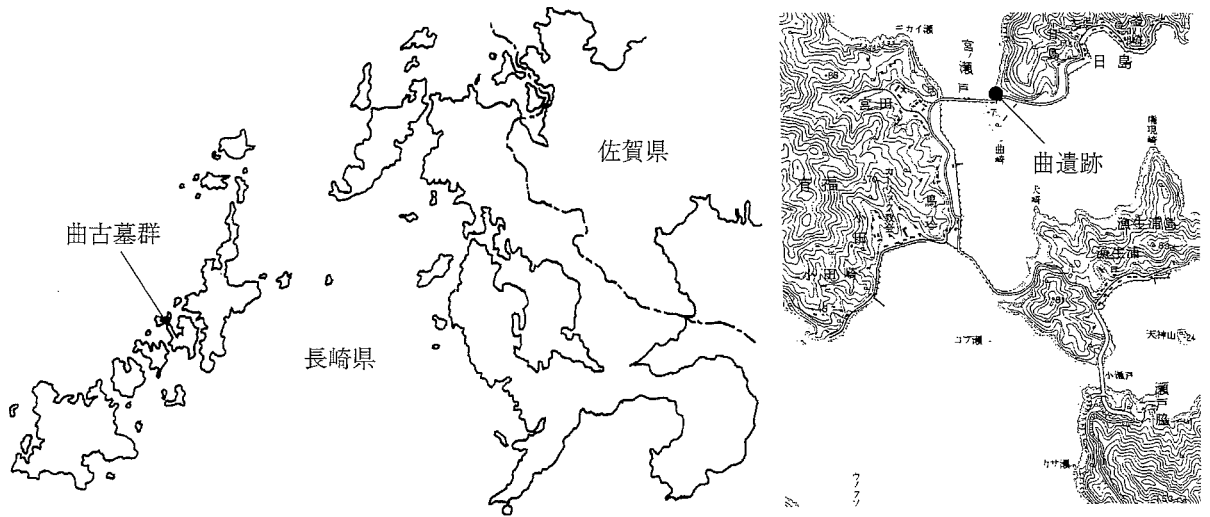


図19 遺跡の位置

所 見

1. 人骨の遺存状態と性、年齢

各人骨の遺存部は、図20に示している。

1号人骨

埋葬姿勢は、脊柱が残存していないので正確にはわからないが、股関節と膝関節を強く屈曲した側臥の状態で葬られたものと考えられる。

遺存している骨は、頭蓋、左右の寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨および足の骨である。頭蓋は左側の前頭部から頭頂部、右側の側頭部と骨片が残っているが、全体を復元することはできない。残存する歯は次の歯式に示すとおりで、すべて遊離歯である。また、咬耗度はすべて Broca の2度であるが、大臼歯は強く咬耗している。

大腿骨は遠位端、脛骨および腓骨は近位端を欠損している。大腿骨の粗線、脛骨および腓骨の骨間縁は鋭い。

性別および年齢については、寛骨の大坐骨切痕が広く、下肢長骨は細くきゃしゃである。前頭部の

M ₃ M ₂ M ₁ / / C / /	/ / / / / / / / / /	(/ : 不明)
/ M ₂ / P ₂ P ₁ C / /	/ / C P ₁ / / / / /	

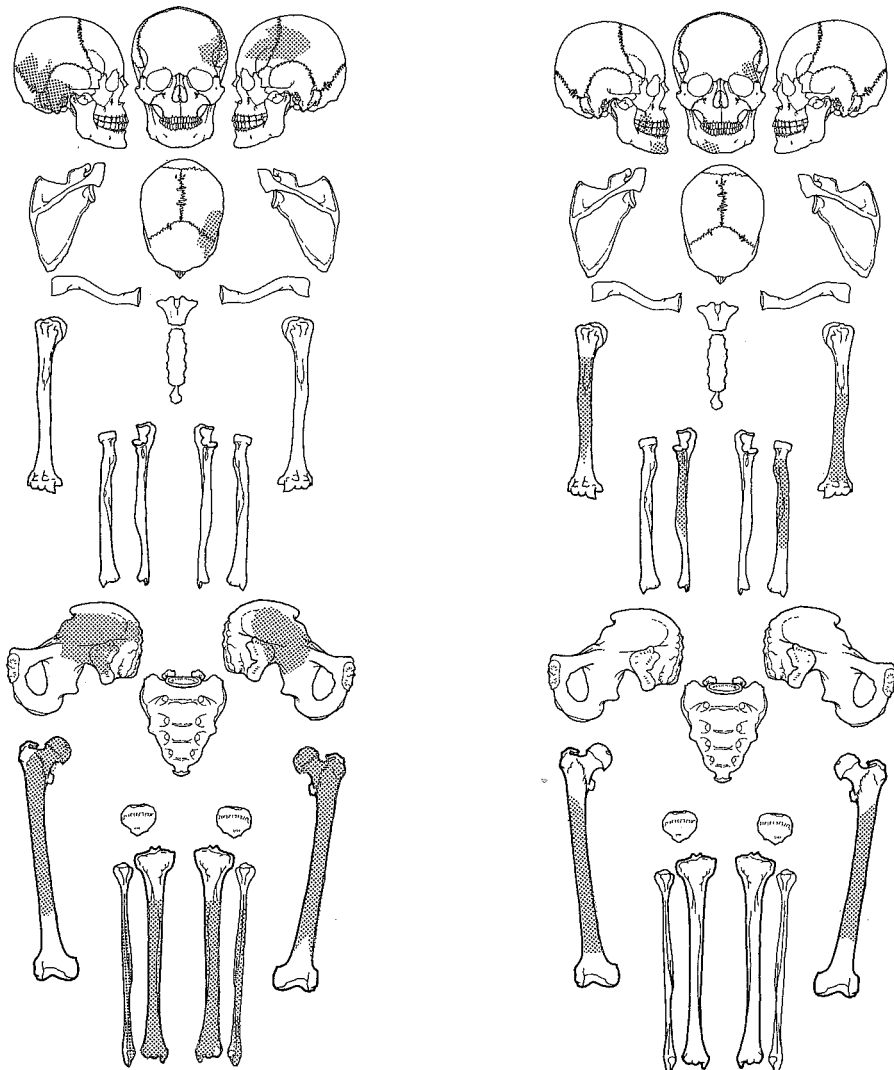
縫合については、内板がすでに閉鎖して外板も閉鎖している範囲が大きく、歯の咬耗も強い。以上から、本人骨の性別は女性で、年齢は熟年と推定される。

2号人骨

頭蓋の破片，左右の上腕骨，左側の橈骨，右側の尺骨および左右の大腿骨の骨体が残存している。頭蓋は前頭骨の左側頬骨突起部，右側上顎骨の一部，下顎体の右前下部と歯である。歯を歯式で示すと次のとおりであるが，右側の上顎第一および第二大臼歯は釘植し，他は遊離歯である。また，咬耗度は Broca 1～2度で，咬耗の程度は弱い。

／ M ₂ M ₁ P ₂ ／	／ I ₂ ／	／ ／ ／	／ P ₂ M ₁ M ₂ ／	(／ : 不明)
／ M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ C ／	／ ／	／ ／ ／	／ M ₁ M ₂ ／	

寛骨が残存していないので，その形状から性別を判断できないが，上肢骨，下肢骨とも著しく太く筋の付着部も発達していることから性別は男性で，年齢については脳頭蓋の縫合の閉鎖状態は不明であるが，歯の咬耗が著しく弱いので壮年と推定される。



1号人骨

2号人骨

図20 人骨の残存部

閉鎖し、また、下顎の第一小白歯もある程度の咬耗が認められることから熟年と推測される。

4号人骨

左上腕骨、右寛骨、左右大腿骨および左脛骨が遺存している。四肢長骨は著しく短くて細い。また、筋の付着部の発達も悪い。

性別は、寛骨の大坐骨切痕は広く女性と推定される。頭蓋、歯、長骨の骨端が残存していないので、これらからの年齢推定はできないが、寛骨の寛骨臼がすでに骨癒合して完成⁹⁾しているので成人に近い年齢と推測される。

2. 人骨の形態的特徴

頭蓋の保存状態が悪く、計測に堪える資料は四肢骨のみである。各個体別の計測値は、文末の表4～9に一括して掲げている。

四肢骨のうち上腕骨、大腿骨および脛骨の主要計測結果を岡山県津雲縄文人⁹⁾、山口県吉母浜中世人²⁾および畿内現代人¹⁰⁾と男女別に比較し、曲古墓群出土の中世人の特徴について検討してみた(表2, 3)。

男性の骨幹の周径に関しては、曲中世人の上腕骨最小周と大腿骨中央周が同時代の吉母浜中世人や畿内現代人よりもかなり大きく、元来骨幹の頑丈な津雲縄文人よりも太い。しかし、脛骨については最小周が畿内現代人とほぼ同じで、津雲縄文人よりも骨幹は細い。

骨幹の横断面の形状を表す各断面示数は、上腕骨では畿内現代人および吉母浜中世人と同様に津雲縄文人よりは大きく、骨体に扁平性は認められない。大腿骨の中央断面示数は津雲縄文人よりは小さいが、骨幹そのものの形状が横広ろであるため、数値で表われている以上に粗線は発達して縄文人ほどではないものの柱状性が認められる。上骨体断面示数は津雲縄文人とほぼ同じで、骨体上部はやや扁平である。脛骨では、中央断面示数が吉母浜中世人および畿内現代人よりもかなり小さく、津雲藻縄文人と同様にかなり扁平である。

これらの傾向を津雲縄文人を基準とした曲、吉母浜中世人および畿内現代人の偏差折線(図21)からみると、曲中世人は吉母浜中世人および畿内現代人と同一方向にしかも大きく振れており、基本的には新しい時代の形質を備えているものと考えられる。しかし、脛骨骨幹の断面示数については吉母浜中世人および畿内現代人とは異なり縄文人に近い。

女性に関しては、表3の計測値表と図22の偏差折線図において男性と同様の3集団と比較してみると、骨幹の周径は津雲縄文人よりも小さく、また、大腿骨の上骨体断面示数を除いては骨幹に扁平傾向は認められない。偏差折線も吉母浜中世人および畿内現代人と同一方向にしかも大きく振れて縄文人の四肢骨の形質とは大きく異なっている。

表2 四肢骨計面值比較 (男性, 右) (mm)

			曲中世人		津雲繩文人		吉母浜中世人		畿内現代人	
			n	M	n	M	n	M	n	M
上腕骨	7.	骨体最小周	1	68(L)	20	65.2	20	62.6	30	64.4
	7(a).	中央周	2	72.5(L)		-	20	66.4		-
	6/5	骨体断面示数	2	76.6(L)	20	72.7	20	75.6	30	78.1
大腿骨	8.	骨体中央周	2	91.5	19	86.8	19	87.5	30	83.1
	6/7	骨体中央断面示数	2	105.3	19	114.6	19	100.6	30	107.8
	10/9	上骨体断面示数	2	76.2	22	76.5	19	76.5	30	79.7
脛骨	10.	骨体周	1	82		-	20	80.2		-
	10b.	最小周	1	72	15	77.4	20	74.2	30	71.9
	9/8	中央断面示数	1	62.5	19	61.5	20	73.3	30	74.2
	9 a/ 8 b	栄養孔位断面示数	1	67.6		-	20	70.1		-

表3 四肢骨計測値比較 (女性, 右) (mm)

			曲中世人		津雲繩文人		吉母浜中世人		畿内現代人	
			n	M	n	M	n	M	n	M
上腕骨	7.	骨体最小周	1	54 (L)	23	55.3	28	54.0	20	54.9
	7(a).	中央周	1	58 (L)		-	28	57.4		-
	6/5	骨体断面示数	1	75.0(L)	26	69.0	28	73.0	20	75.3
大腿骨	8.	骨体中央周	2	73.0(L)	26	77.4	28	76.2	20	74.7
	6/7	骨体中央断面示数	2	90.2(L)	26	103.9	28	94.5	20	101.4
	10/9	上骨体断面示数	2	71.6(L)	26	73.5	27	73.3	20	75.0
脛骨	10.	骨体周	1	67		-	25	69.6		-
	10b.	最小周	1	65	19	67.1	24	64.3	20	61.7
	9/8	中央断面示数	1	79.2	23	65.4	25	69.8	20	78.0
	9 a/ 8 b	栄養孔位断面示数	1	71.4(L)		-	25	67.5		-

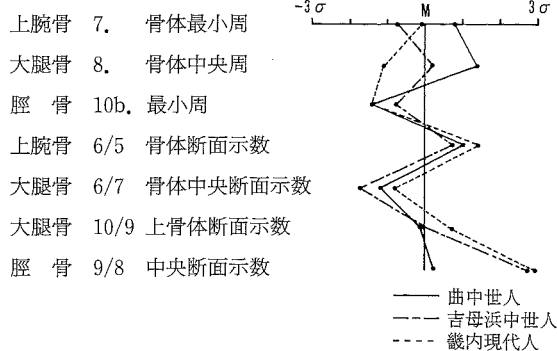


図22 津雲繩文人男性を基準とした偏差折線

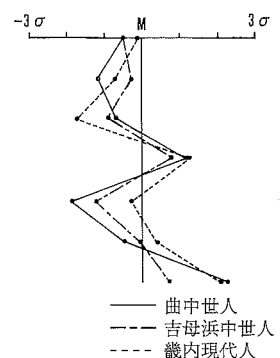


図23 津雲繩文人女性を基準とした偏差折線

以上、中世人四肢骨の特徴としては、大腿骨の骨体上部が扁平であること¹¹⁾、大腿骨の柱状形成と脛骨の扁平性が弱いこと¹²⁾が報告されている。曲古墓群出土の中世人骨は、女性人骨について従来の中世人と類似傾向を示した。しかし、男性四肢骨については骨幹が太くて、大腿骨の柱状性と脛骨の扁平性が中世人や現代人よりも顕著であり、従来の中世人とは異なる傾向を示す。

要 約

長崎県南松浦郡若松町大字日島に所在する曲古墓群は、1993年および1994年に発掘調査され、1993年の調査において中世に所属すると推測される人骨4体が検出された。出土人骨に関する形質人類学的調査結果は、次のように要約される。

1. 人骨の性別は、2体が男性、2体が女性である。
2. 女性の四肢骨は、骨幹が細く、大腿骨の骨体上部以外には扁平性や柱状性は認められず、これまでに報告されている中世人と類似傾向を示す。
3. 男性の四肢骨は、骨幹が太くて、大腿骨の柱状性と脛骨の扁平性が認められ、骨体は頑丈である。

[稿を終えるにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた長崎県若松町教育委員会並びに考古学的事項についてご教示頂いた長崎県教育庁文化課の諸先生方に深謝いたします。]

参 考 文 献

1. 鈴木尚, 都志夫, 田辺義一, 佐倉朔 1956: 頭骨の形質, 鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨, 岩波書店, 75-148.
2. 中橋孝博, 永井昌文 1985: 山口県下関市吉母浜遺跡出土の弥生・中世人骨, 吉母浜遺跡, 154-225.
3. 内藤芳篤 1973: 人骨, 尾窪一熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査, 62-78.
4. 内藤芳篤 1974: 人骨一立石貝塚, 大分県文化財調査報告書, 31: 33-49.
5. 松下孝幸 1981: 鹿児島県松之尾遺跡出土の人骨, 松之尾遺跡, 215-228.
6. MARTIN-SALLER 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart: 429-597.
7. VALLOIS, H. V. 1938: Les methodes de mensuration de la platycnemie; Etude critique. Bull. Soc. Anthropol. 8 ser. 97-108.
8. 分部哲秋 1992: 近代日本人の骨端癒合年齢 2. 下肢骨, 解剖学雑誌, 67: 508.
9. 清野謙次, 平井隆 1928: 津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第四部 下肢骨の研究, 人類学雑誌, 43(4附, 5附).
10. 平井隆, 田畑丈夫 1928: 現代日本人人骨の人類学的研究 第四部 下肢骨の研究 其一 大腿骨・膝蓋骨・脛骨及腓骨に就いて, 人類学雑誌, 43, 附録: 1-82.
11. 香原志勢 1956: 四肢骨特に大腿骨の形質, 鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨, 岩波書店, 149-154.
12. 内藤芳篤, 松下孝幸, 分部哲秋, 田代和則 1979: 九州の中世人骨について (会), 人類学雑誌, 87: 171.

表 4 上腕骨計測値 (mm)

		2号		3号		4号	
		(男性)		(男性)		(女性)	
		(右)	(左)	(右)	(左)	(右)	(左)
1.	上腕骨最大長	-	-	-	-	-	-
5.	中央最大径	28	26	-	25	-	20
6.	中央最小径	19	19	-	20	-	15
7.	骨体最小周	-	68	-	-	-	54
8 (a).	中央周	78	74	-	71	-	58
6/5	骨体断面示数	67.9	73.1	-	80.0	-	75.0

表 5 橈骨計測値 (mm)

		2号	
		(男性)	
		(右)	(左)
1.	最大長	-	-
3.	最小周	-	-
4.	骨体横径	-	19
4 a.	骨体中央横径	-	18
5.	骨体矢状径	-	14
5 a.	骨体中央矢状径	-	14
5 (5).	骨体中央周	-	49
5/4	骨体断面示数	-	73.7
5 a/4 a	中央断面示数	-	77.8

表 6 尺骨計測値 (mm)

		2号	
		(男性)	
		(右)	(左)
1.	最大長	-	-
3.	最小周	-	-
11.	尺骨矢状径	15	-
12.	尺骨横径	21	-
S.	中央最小径	14	-
L.	中央最大径	21	-
C.	中央周	58	-
11/12	骨体断面示数	71.4	-
S/L	中央断面示数	66.7	-

表7 大腿骨計測値 (mm)

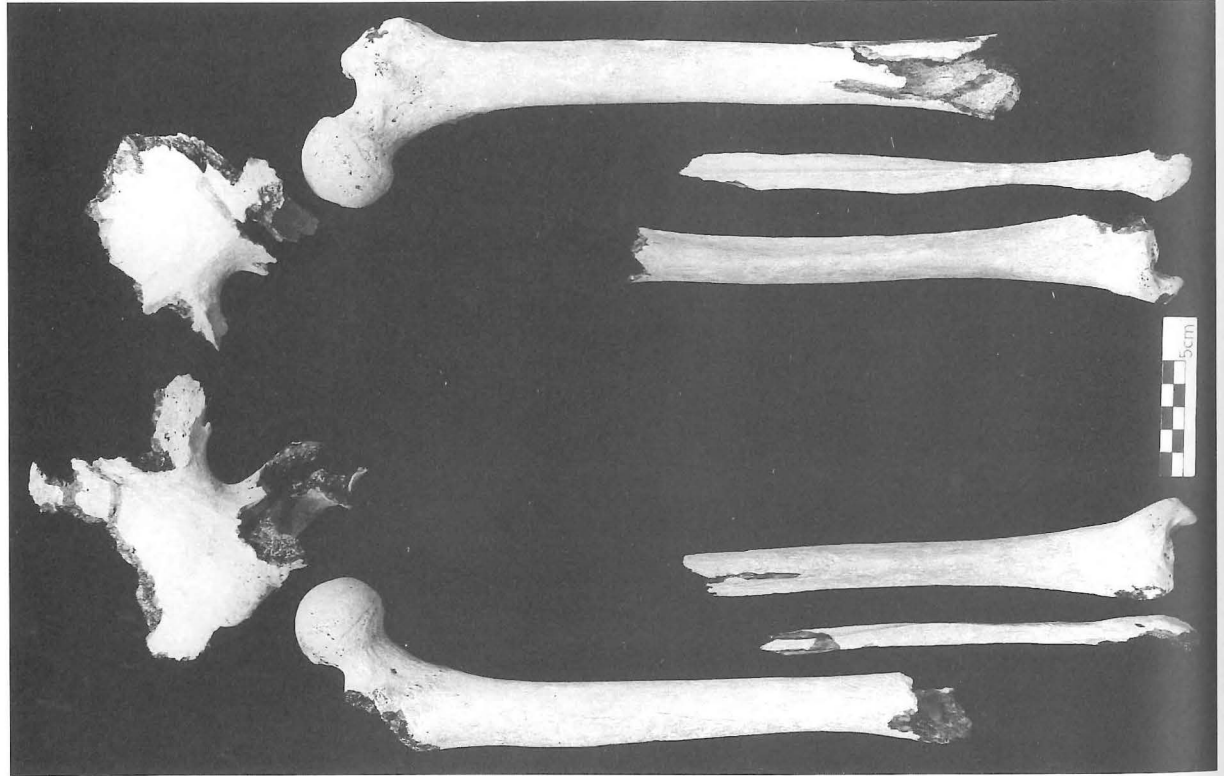
		1号 (女性)		2号 (男性)		3号 (男性)		4号 (女性)	
		(右)	(左)	(右)	(左)	(右)	(左)	(右)	(左)
		1.	最大長	-	-	-	-	-	-
6.	骨体中央矢状径	22	22	30	30	30	30	-	22
7.	骨体中央横径	25	26	29	30	28	27	-	23
8.	骨体中央周	73	75	92	94	91	89	-	71
9.	骨体上横径	28	29	33	-	34	34	-	27
10.	骨体上矢状径	20	20	26	-	25	25	-	20
15.	頸垂直径	25	27	-	-	-	-	-	-
16.	頸矢状径	20	22	-	-	-	-	-	-
18.	頭垂直径	40	41	-	-	-	-	-	-
19.	頭矢状径	40	40	-	-	-	-	-	-
6/7	骨体中央断面示教	88.0	84.6	103.4	100.0	107.1	111.1	-	95.7
10/9	上骨体断面示教	71.4	69.0	78.8	-	73.5	73.5	-	74.1

表8 脛骨計測値 (mm)

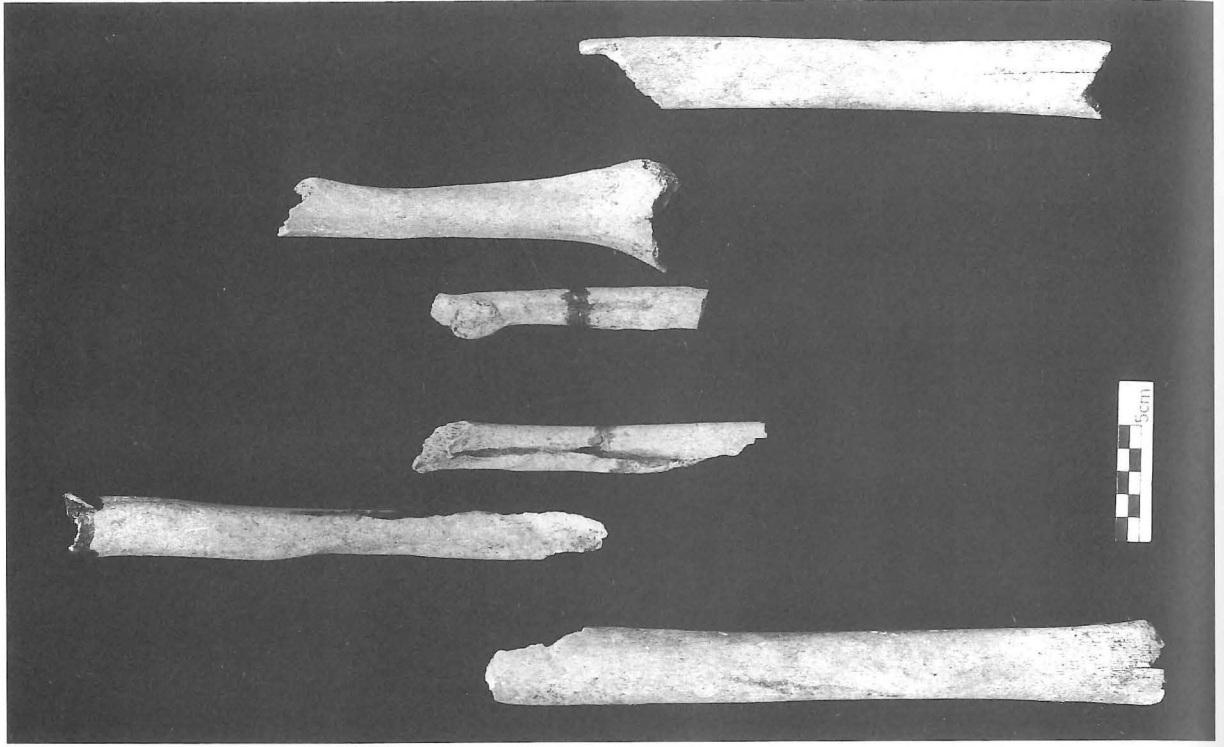
		1号 (女性)		3号 (男性)	
		(右)	(左)	(右)	(左)
		1 a.	脛骨最大長	-	-
8.	中央最大径	24	25	32	32
8 a.	栄養孔位最大径	-	28	34	-
9.	中央横径	19	20	20	20
9 a.	栄養孔位横径	-	20	23	-
10.	骨体周	67	70	82	82
10a.	栄養孔位周	-	74	91	-
10b.	最小周	65	66	72	73
9/8	中央断面示数	79.2	80.0	62.5	62.5
9a/8a	栄養孔位断面示数	-	71.4	67.6	-

表9 腓骨計測値 (mm)

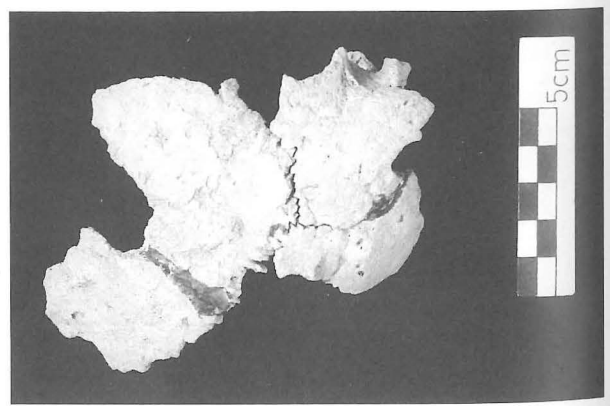
		1号 (女性)		3号 (男性)	
		(右)	(左)	(右)	(左)
		1.	最大長	-	-
2.	中央最大径	16	17	-	16
3.	中央最小径	10	11	-	12
4.	中央周	41	45	-	47
4a.	最小周	-	-	-	-
3/2	中央断面示数	62.5	64.7	-	75.0



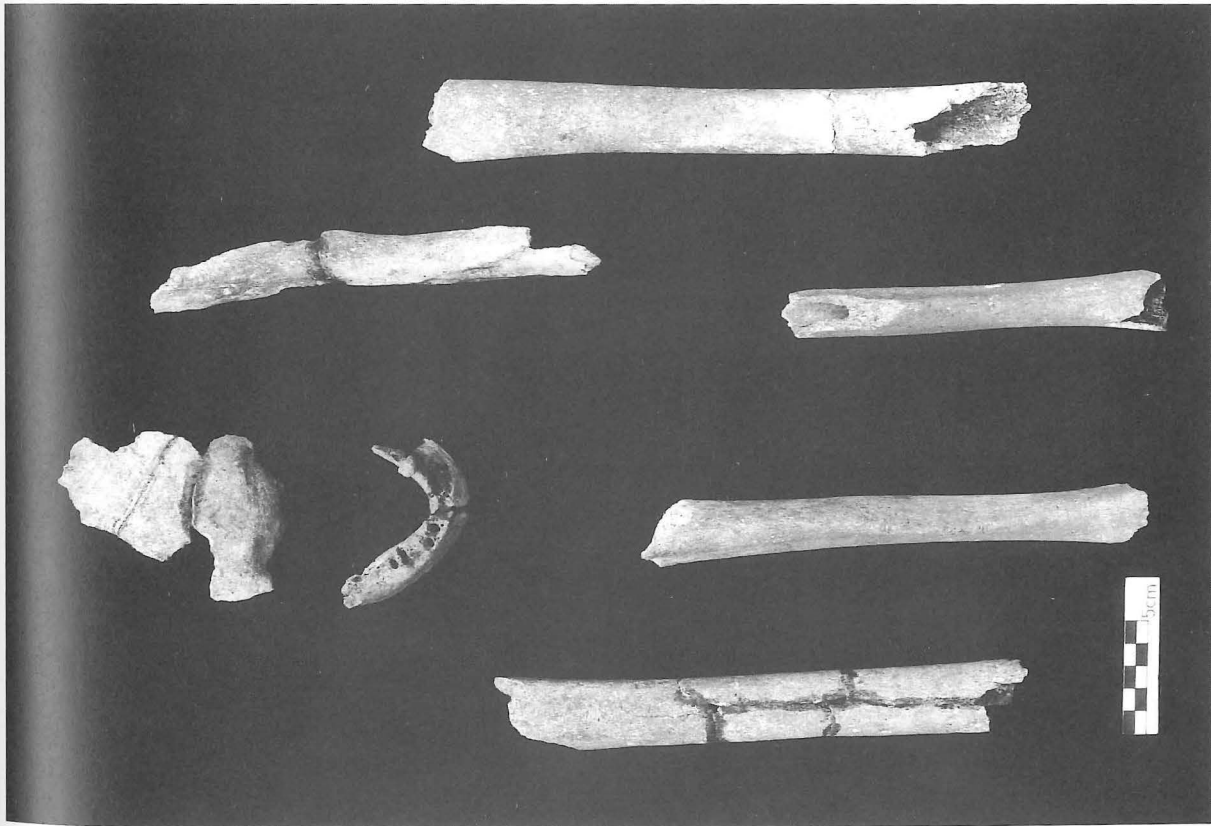
1号人骨 (下肢骨)



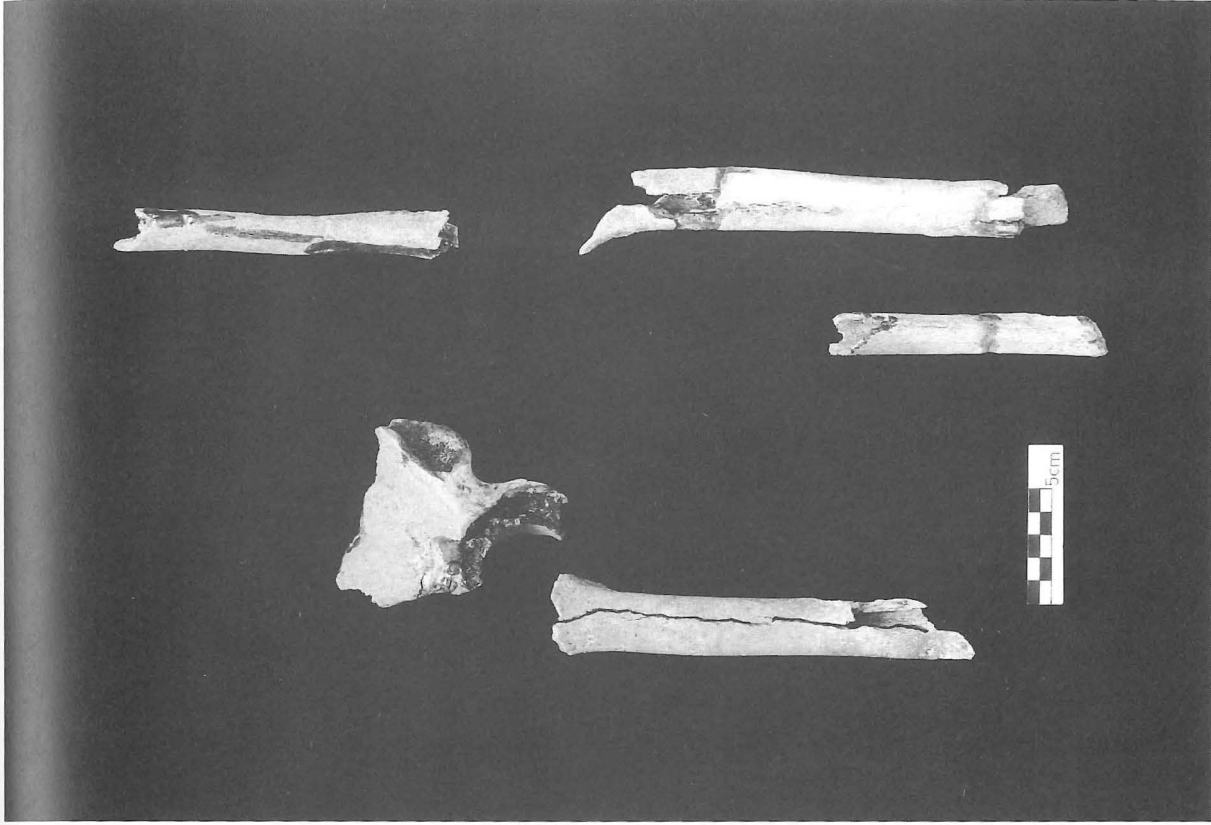
2号人骨 (四肢骨)



1号人骨 (頭蓋右側面)



3号人骨（頭蓋及び四肢骨）



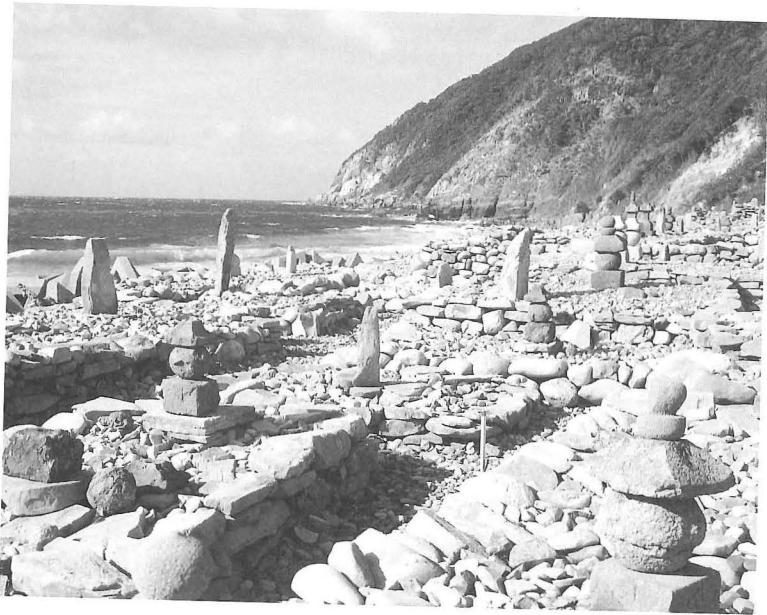
4号人骨（四肢骨）

日島の中世・石造美術

……とくに中央形式塔の分布とその問題点について……

1) 日島概観……………序にかえて

日島は、五島・若松町に属する小島であり、現在は有福島をへて若松島と橋でつながっている。主島・若松島は統一新羅時代の渡来仏・銅造如来立像（国指定・極楽寺）のある島としても有名であるが、そのU字型の地形をなす若松島の内海を外海としきる位置に浮かぶ小島が日島である。



日島曲石塔群（一部）

ところでこの日島の曲と呼ばれる所には、海に向かってのびる礫丘部分全域にわたって中世

以来の石塔類が林立している。圧巻である。最初目にした者は、多分にその迫力に驚かされるであろう。

この石塔群は、製作年代から大きく2つのグループに分類される（資料1「紀年銘・形態による製作年代分類表」日島の項参照）。まず第1は、形態から1300年代前後つまり鎌倉時代末から南北朝時代の前期に製作されたと考えられる石塔群（約13基分）である。基数は少ないが、製作地は、その形態と石材（凝灰岩など）から、多分に長崎県を除く九州内と思われる。中世日島の初期の活動を物語る石塔と考えられる（写真1）。

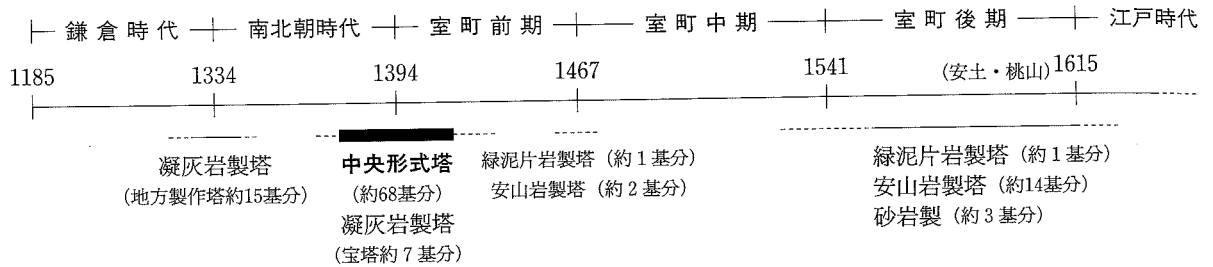
第2のグループは、日島石塔群の中心をなす中央形式をもった石塔群である（写真2）。現在までに確認された中央形式塔は、日島釜崎の1基を加えて約45基分、若松町全域では約68基分である（資料2「県下にみられる中央形式塔一覧」参照）。製作年代は、後述するように形態と紀年銘から主に1300年代後半（南北朝時代後半）頃で、1400年代前半の室町時代初期までの範囲に入ると考えられる。このグループに属する一つ一つは見事で、石造文化の進んだ関西地方で製作されたことは、その残片からでも推察される。日島が、一番活気に満ちあふれた時代の石塔群と考えられる。

ところで、同じ日島の釜崎には、その丘の頂上に大型の宝篋印塔が1基だけぽつんと立っている（写真3）。基礎と笠は半壊し相輪も宝珠部分だけの残欠であるが、笠の段数（下端2段上端6段）や基礎

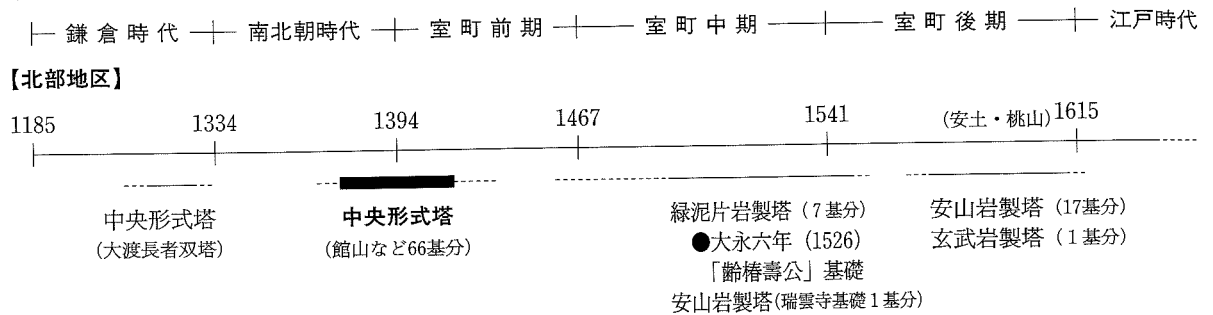
資料1 紀年銘・形態による製作年代分類表

[時代区分は、田岡香逸著「仏教考古学講座」(第3巻, 雄山閣)などによる]

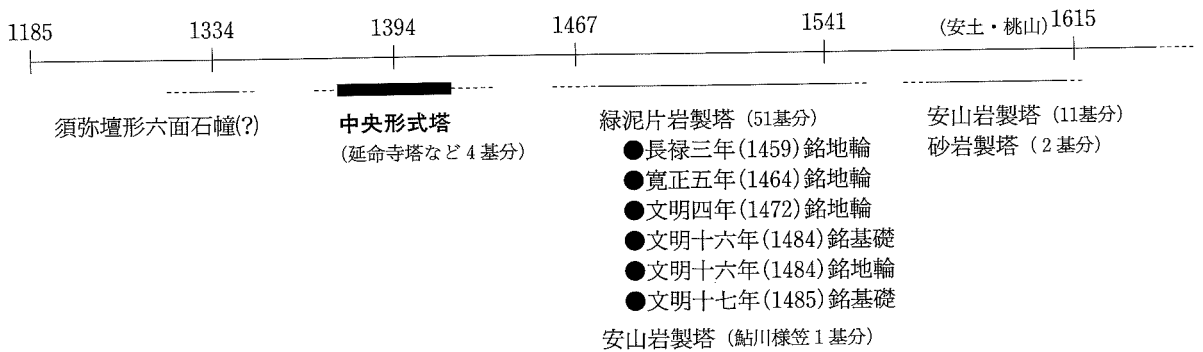
〔日島とその周辺〕



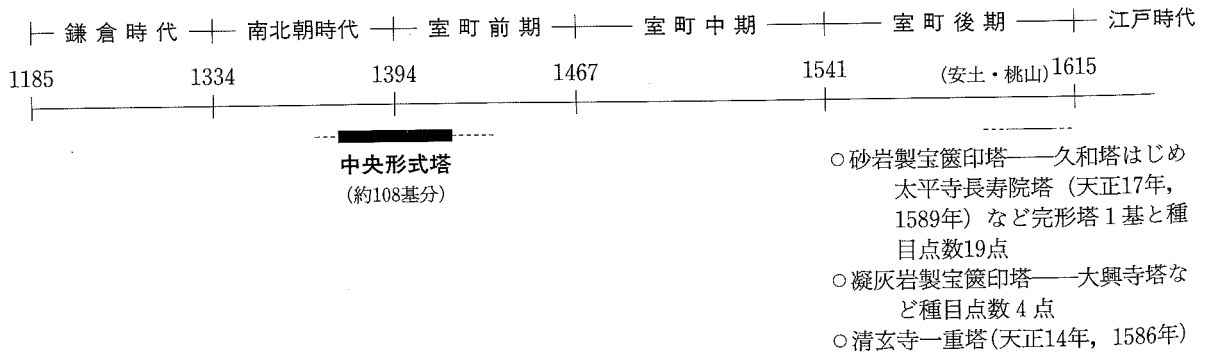
〔平戸島〕



〔南部地区〕



〔対馬〕



資料2-1 県下にみられる中央形式塔一覧

地域	遺 跡	石 材	種 目	基数 (点数)	備 考	
平 戸 島	最教寺全域	花 崗 岩	五 輪 塔	3基分	2基は、鎌倉末の大渡長者双塔。	
		安山岩質凝灰岩	宝 篋 印 塔	2基分		
	館山・是興寺跡とその 周辺【46基分】	花 崗 岩	五 輪 塔	9基分		
		安山岩質凝灰岩	五 輪 塔	24基分		
			宝 篋 印 塔	13基分		
	安満岳	花 崗 岩	五 輪 塔	1基	完形塔	
		安山岩質凝灰岩	五 輪 塔	5基分		
			宝 篋 印 塔	9基分		
	大川原・大師堂跡	安山岩質凝灰岩	五 輪 塔	2基分		
	津吉・延命寺	安山岩質凝灰岩	宝 篋 印 塔	2基分		
【合計70基分】 (花崗岩製五輪塔13基分, 安山岩質凝灰岩製五輪塔31基分, 安山岩質凝灰岩製宝篋印塔26基分)						
度 島	ヤクシ (薬師)	安山岩質凝灰岩	五 輪 塔	1基分		
生 月 島	山田免小学校横墓地	安山岩質凝灰岩	五 輪 塔	2基分		
	山田免修善寺跡 (?)	安山岩質凝灰岩	五 輪 塔	8基分		
			宝 篋 印 塔	1基分		
	一部里免墓地	花 崗 岩	五 輪 塔	1基分		
	松寿山法善寺 (館浦)	安山岩質凝灰岩	五 輪 塔	4基分		
【合計18基分】						
鷹 島	阿翁浦・堂様	安山岩質凝灰岩	五 輪 塔	1基分		
	舟唐津・堂様	安山岩質凝灰岩	五 輪 塔	3基分		
宝 篋 印 塔			1基分			
的 山 大 島	五乗寺石塔群など	安山岩質凝灰岩	五 輪 塔	3基分		
松浦市 宇久島	調川・白龍山護舜寺 山本墓地	安山岩質凝灰岩	宝 篋 印 塔	1基分		
			五 輪 塔	1基分		
小値賀 島	キヨンタケ墓地など	安山岩質凝灰岩	五 輪 塔	2基分		
			宝 篋 印 塔	1基分		
		花 崗 岩	五 輪 塔	1基分		
野崎島	ダントウ山	安山岩質凝灰岩	宝 篋 印 塔	4基分		
若 松 町 (五 島)	日 島 【45基分】	曲	安山岩質凝灰岩	五 輪 塔	22基分	
			宝 篋 印 塔	9基分		
			花 崗 岩	五 輪 塔	13基分	
	釜 崎	安山岩質凝灰岩	宝 篋 印 塔	1基分	正平廿二年銘	
			モエン様塔 (有川郷)	安山岩質凝灰岩	宝 篋 印 塔	1基分
	薬師堂 (宿ノ浦) 【6基分】	安山岩質凝灰岩	五 輪 塔	4基分		
			宝 篋 印 塔	2基分		
	白魚千人塚 (宿ノ浦) 【8基分】	安山岩質凝灰岩	五 輪 塔	5基分		
			宝 篋 印 塔	2基分		
			花 崗 岩	五 輪 塔	1基分	
	間伏郷字光石	安山岩質凝灰岩	五 輪 塔	3基分		
	榊ノ浦 (寺屋敷など)	安山岩質凝灰岩	宝 篋 印 塔	3基分		
神部経崎	安山岩質凝灰岩	宝 篋 印 塔	1基分			
極楽寺	安山岩質凝灰岩	五 輪 塔	1基分	水輪・火輪各1点		
【合計68基分】 (花崗岩製五輪塔14基分, 安山岩質凝灰岩製五輪塔35基分, 安山岩質凝灰岩製宝篋印塔19基分)						

地域	遺跡	石材	種目	基数(点数)	備考
上五島町	奈摩・殿様墓	安山岩質凝灰岩	五輪塔	1基分	水輪1点
	※小島田「井手神」石祠横と浜ノ浦天満神社で数基分の中央形式塔が確認されるが、実見していないので、ここでは紹介だけにとどめておく。				
玉之浦町(五島)	大宝寺	安山岩質凝灰岩	五重層塔(へそ神様)	1基	ほぼ完形。「正平二十四年」銘。中央製作層塔として九州全域においても貴重。
			五輪塔	2基分	水輪・火輪・風空輪各2点
			宝篋印塔	2基分	基礎2点
玉之浦町(五島)	島山島(浅切湾奥)	安山岩質凝灰岩	宝塔	1基	ほぼ完形。「正平十二年」銘。銘入り関西製作宝塔としては九州唯一の塔と思われる。
対馬	厳原町【22基分】	花崗岩	宝篋印塔	1基	完形塔。総高235センチ。
		安山岩質凝灰岩	五輪塔	13基分	応安7年銘塔あり
			宝篋印塔	8基分	
	美津島町【13基分】	花崗岩	五輪塔	1基分	
		安山岩質凝灰岩	五輪塔	10基分	
	宝篋印塔		2基分		
	豊玉町【8基分】	安山岩質凝灰岩	五輪塔	7基分	
			宝篋印塔	1基分	
	峰町【30基分】	安山岩質凝灰岩	五輪塔	8基分	応永年号銘塔あり
			宝篋印塔	22基分	主に円通寺石塔群
	上県町【8基分】	花崗岩	五輪塔	3基分	
		安山岩質凝灰岩	五輪塔	5基分	
	上対馬町【27基分】	花崗岩	五輪塔	9基分	
			宝篋印塔	3基分	
安山岩質凝灰岩			五輪塔	14基分	
	宝篋印塔	1基分			
【合計108基分】 (花崗岩製五輪塔13基分, 花崗岩製宝篋印塔4基分) (安山岩質凝灰岩製五輪塔57基分, 安山岩質凝灰岩製宝篋印塔34基分)					
西海町	面高唐人墓	花崗岩	五輪塔	1基分	やや疑問も残るが南北朝後半頃の製作と思われる。

(註)・石材の一部に石英閃緑岩製と思われるものがあるが、石質の断定ができないため、ここでは割愛する。
・最近の調査で、松浦市今福などでも数基分確認された(追加資料参照)。

資料2-2 県下にみられる中央形式塔合計基数

石材	種目	基数
安山岩質凝灰岩	五輪塔	152基分
	宝篋印塔	90基分
	宝塔	1基分
	五重層塔	1基分
花崗岩	五輪塔	45基分
	宝篋印塔	4基分
中央形式塔合計基数		293基分

上端の反花などから、形式は明らかに関西形式である。基礎の両端に銘が陰刻され、「正平廿貳年」(1367)となっている。形態からみて妥当な年号である。と同時にこの年号は、日島など「国境をまたぐ島々」で大量に確認される中央形式塔の製作時期がほぼ1300年代後半頃であることも示唆している。

文献的に確実に日島が出てくるのは、永仁六年(1298)に桶島(ひのしま)在津百姓等が船七艘でもって難破唐船から砂金などの御物類を運び取ったことが「青方文書」にみえる(註1)。

観応三年(1352)の足利直冬充行状写には、五島日島内日島浦の代として同国西浦三〇町以下の地頭職が、伊東祐武という人物に充行されている(「南北朝遺文」三四二八)。

また申叔舟の「海東諸国紀」(1471年)には、「己丑年遣使来朝書称五島日島大守藤原朝臣盛以宗貞國請接待居五島源勝管下徴者」とあり、日島に関係する人物として「藤原盛(さかり)」の名が登場している。この文面によれば、藤原盛なる人物は15世紀後半に日島の太守としてあり、また歳遣船を送つて朝鮮半島と交易していたことがわかる。ただこれが書かれたのが15世紀後半であり、日島石塔群の建塔時期より約100年後の記述である。

これらの記述内容からは、石塔群を建塔した直接の背景を探ることはできない。ただほぼ同じ時期の内容として、観応三年の件は注目すべきものと思う。

現在の段階では、日島はまさしく謎の島である。文献的にはわからないが、1300年の前後頃と思われる九州内での製作塔から始まり、1300年代の後半頃には見事な関西形式塔が集中的に建塔されている。それだけに日島石塔群の主体をなす関西(中央)形式塔のあり方は、九州全域からみた石造美術史上はもちろんのこと、時期的に想定される「倭寇」の問題を考える上において重要な示唆を与えてくれるものと思われる。

なお日島では、上記の2グループの石塔群以外に、第3のグループとして1500年代後半から江戸時代を通じての石塔類があげられる。とくに1500年代後半から1600年代初期にかけての石塔類は数点確認されるが、それらは西彼杵半島産の緑泥片岩製塔や安山岩製の佐賀型塔などの地方製作塔であり、激しい変形と簡略化が見られる。ただ建塔基数から判断すれば、基本的には南北朝後半から室町時代初期の中央形式塔の大量建塔後は江戸時代までほとんど建塔されておらず、中世の石塔類としてはいわば空白の期間が読み取れる。

ところで日島が属する五島列島は、その地理的条件のもとに周辺の対馬や平戸・壱岐の各島と同じように日本歴史形成の上で重要な役割を果たしてきたことは言うまでもない。とくに中国・朝鮮半島と日本列島間の交渉史を考える上で五島列島を含めた国境をまたぐ地域(島々)の果たした役割は大きく、それだけに中央(大和・山城)の動静が時には直接的に影響を及ぼす環境の中にもあった。

五島列島の中世・石造美術は、その島のもつ豊かな歴史性を裏付けるように、鎌倉時代から南北朝時代にかけて中央(大和・山城)で製作されたと考えられる五輪塔などが多数確認され、九州全域からみても特異な石造文化を展開している。



写真1 日島曲凝灰岩製五輪塔



写真2 日島曲中央形式五輪塔



写真3 日島釜崎正平二十二年銘宝篋印塔



写真4 島山島正平十二年銘宝塔



写真5 大宝寺正平二十四年銘五重層塔



写真6 川棚・永仁五年銘録泥五輪塔

資料3-1 「若松町内の主な種目と点数一覧表」

所 在	石 材	種 目	点 数	備 考
日島・曲	安山岩質凝灰岩	五輪塔		<ul style="list-style-type: none"> ●中央形式塔で、主に14世紀後半頃を中心に15世紀前半頃までの製作。 ●各輪に「五輪塔四方種字」を彫出。 ●地輪は、上面をやや盛り上げて丸味を帯び、その中央に浅い柄穴を彫出。 ●水輪は下端がしばむ壺型。下面には柄を付け、上面はやや荒削りで内部に薄く彫り下げ火輪を受ける。 ●火輪の軒は厚く、真反りに近い反りを示し、軒端四隅はほとんど垂直に切られている ●風・空輪は、その先端がわずかに突出しているが、完好の風輪にふっくらとした楕円形の空輪がのり、両者の調和はすっきりしている。
		地輪	16点	
	水輪	22点		
	火輪	16点		
		風・空輪	12点	
		宝篋印塔		<ul style="list-style-type: none"> ●関西形式塔で、主に14世紀後半頃を中心に15世紀前半頃までの製作。 ●基礎は、その上端に複弁八葉の反花を彫出した蓮弁式。基礎側面には方郭の縁取りの中に格狭間を彫出。ただし4側面全てに格狭間彫出はなく、正面と両側面の3面に彫出したものが大部分であるが、小型のものは正面の1面のみに彫出している場合もある。 ●塔身4面には、月輪内に「金剛界四仏」種字を彫出。 ●笠は、すべて下端2段上端6段の定形式。隅飾4辺にはすべて縁取りがあり、外に開く角度である斜角は12度前後を示す。また反花部分を除く基礎の縦幅に対する横幅の比率は平均で2,0を示す。 ●相輪の下部請花は複弁八葉、上部請花は単弁の八葉。九輪は上すぼみとなり、宝珠頂上には突起をもつ。
基礎	9点			
塔身	4点			
笠	7点			
		相輪	4点	
	花崗岩	五輪塔		<ul style="list-style-type: none"> ●石材ならびに形態（彫出内容）より中央形式の塔と考えられる。 ●全体に地輪の背は高く、この花崗岩製五輪塔が14世紀後半頃の製作であることを示している。 ●水輪は下端がしばむ壺型とほぼ球形2種類がある。 ●火輪は軒厚くて屋根勾配は真反りに近い反りを示し、軒端四隅はほぼ垂直に切られている。とくに火輪底面が水平に削られている点は中央形式塔の特徴であり、地方製作塔と基本的に異なるところである。 ●風・空輪は、安山岩質凝灰岩製五輪塔のものと同じように、半月形の風輪に楕円形の空輪がのり、両者の調和はすっきりしている。 ●全体に摩滅・風化が激しいが、中型の五輪塔各輪には「五輪塔四方種字」が陰刻されている。
		地輪	8点	
		水輪	13点	
		火輪	8点	
		風・空輪	7点	
	凝灰岩	五輪塔		<ul style="list-style-type: none"> ●形態より地方製作塔であり、石材は多分に九州内産出の凝灰岩と考えられる。 ●製作年代は、背の低い地輪や両隅を平行に切った団形の水輪、軒底面がゆるやかに弧を描き軒端をほぼ垂直に切った火輪、また全体に押しつぶした形態をもつ風・空輪のあり方からみて、鎌倉時代末から南北朝初期（1300年前後から1300年前期頃）の製作と考えられる。 ●日島釜崎で一番製作時期が古い石塔であるところから、日島の初期の活動を物語る石塔と考えられる。
			地輪	
		水輪	8点	
		火輪	13点	
		風・空輪	5点	
		宝塔		<ul style="list-style-type: none"> ●基礎は背の高い四面無地、塔身は有頸の茶壺型。上端に露盤をもった笠は軒厚も薄く、全体にむくり型の笠となっている。軒反りもゆるい。相輪は佐賀型宝篋印塔にみられる枡型伏鉢になっており、請花の蓮弁意匠は佐賀型にみられる特徴を示している。九輪は円筒形で、相輪の形式からみて、その製作年代は多分に南北朝時代後半（14世紀後半）頃と思われる。 ●相輪7点は残欠含む。
		基礎	3点	
		塔身	3点	
		笠	3点	
		相輪	7点	
	緑泥片岩	五輪塔		<ul style="list-style-type: none"> ●上端1段。 ●西彼杵半島産で、室町時代の一般的な緑泥片岩製塔。
			地輪	
		宝篋印塔		<ul style="list-style-type: none"> ●上端2段。正面側面に「ア」の種字陰刻。 ●石質はあまり良い方ではないが、室町前期頃までは廻るものと思われる。
		基礎	1点	

資料 3 - 2

所 在	石 材	種 目	点 数	備 考
	安 山 岩	地藏塔婆 (板碑)	1 点	●形態より16世紀後半頃の製作と思われる。
日島・釜崎	安山岩質凝灰岩	宝篋印塔	1 基	<ul style="list-style-type: none"> ●基礎と笠は半壊。相輪は九輪（上部2輪）・上部請花・宝珠部分だけの残欠。現総高は残欠相輪を除いて98.5センチ。 ●基礎は、3面に格狭間を彫り、上端の反花は複弁の八葉。基礎正面両端に銘文を陰刻。右端の銘は風化・摩滅が激しく、拓本での判読不可能。左端には「正平廿貳年丁未十一月二十日敬白」（正平22年（1367））と陰刻。 ●塔身は、現在横倒しに積まれているが、本来の法量は縦27センチ、横26.8センチ。塔身4面には月輪・蓮座内に「金剛界四仏」の種字が陰刻されている。塔身両端には柄を彫出。 ●笠は、下端2段上端6段の定形式で、上端3段までが隅飾内におさまる。隅飾の斜角は12度前後であり、同石材・同形態の塔の斜角とほぼ同じ値を示している。摩滅・風化が激しいが、隅飾4辺にはすべて縁取りがなされており、有郭2弧式となっている。 ●相輪の上部請花は縁取りを施した単弁の八葉となっており、同石材の塔としては基礎反花同様に丁寧な造りとなっている。このことは、九輪が単なる線彫りとは違い各輪の間を彫り下げて造り出していることから理解される。
モエン様塔 (有川郷割子) (藤原与左衛門宅)	安山岩質凝灰岩	宝篋印塔	1 基	<ul style="list-style-type: none"> ●塔身のみ欠。現在残る基礎・笠・相輪は、その形態・法量から1基分をなす。 ●製作年代は、他の同石材塔と同じく14世紀後半頃と考えられる。
薬師堂 (宿ノ浦)	安山岩質凝灰岩	五輪塔 地 輪 水 輪 風・空輪	4 点 2 点 3 点	<ul style="list-style-type: none"> ●日島曲崎で確認される中央形式の五輪塔と同形態。 ●製作年代は、14世紀後半頃と考えられる。
		宝篋印塔 基 礎 塔 身 笠 相 輪	2 点 1 点 1 点 1 点	<ul style="list-style-type: none"> ●日島釜崎塔や曲崎で確認される中央形式の蓮弁式塔と同形態。 ●製作年代は、日島塔と同じく14世紀後半頃の製作と考えられる。
	安 山 岩	五輪塔 火 輪	1 点	●佐賀形式塔。火輪の高い背高にあわせて軒が厚く、4隅がほぼ垂直に切られている形態から、室町前期頃までは廻れるものと思われる。
		宝篋印塔 基 礎 塔 身 笠 相 輪	2 点 1 点 1 点 1 点	<ul style="list-style-type: none"> ●佐賀形式塔 ●ほぼ完形の宝篋印塔は、基礎下端を弧状に彫った簡単な猫足状に造り出し上端が細くなる台形状をなす。上端には、2段の階段を造る。塔身はやや縦長となり、その上にのる笠は馬耳型をなす。相輪の上下請花はともに拵型をなし、九輪部分はやや隅丸方柱の簡略化されたものとなっている。以上の形態上の特徴から室町後期の16世紀以降の塔と思われる。
	砂 岩	五輪塔 水 輪	2 点	●石材とその粗雑な形態から1500年代後半から1600年代頃のものと思われる。
白魚千人塚 (宿ノ浦郷白魚)	安山岩質凝灰岩	五輪塔 地 輪 水 輪 火 輪 風・空輪	3 点 5 点 3 点 2 点	<ul style="list-style-type: none"> ●日島曲崎で確認される中央形式の五輪塔と同形態。 ●製作年代は、14世紀後半頃と考えられる。
		宝篋印塔 基 礎 塔 身 笠 相 輪	2 点 1 点 1 点 1 点	<ul style="list-style-type: none"> ●日島釜崎や曲崎で確認される中央形式の蓮弁式宝篋印塔と同形態。 ●製作年代は、14世紀後半頃と考えられる。
	花 崗 岩	五輪塔	1 基	<ul style="list-style-type: none"> ●日島釜崎で確認される中央形式の五輪塔と同形態。 ●石質にやや疑問もあるが、14世紀後半頃の製作と考えられる。
	凝 灰 岩	五輪塔 地 輪 水 輪	1 点 2 点	<ul style="list-style-type: none"> ●日島釜崎で最初に出てくる凝灰岩製塔と同形態・同形式の塔で、九州内での地方製作塔と考えられる。 ●製作時期は、鎌倉時代末から南北朝初期頃と考えられる。
	緑 泥 片 岩	五輪塔 地 輪 火 輪 風・空輪	1 点 1 点 1 点	<ul style="list-style-type: none"> ●地輪は上端1段。風・空輪は鑿面を残したままで、背の低い風輪部分の上に空輪部分が太く造り出されている。 ●火輪は背高があり、軒反りのゆるやかな地方色を示している。 ●形態・石質より、室町時代中期から後半頃の製作と考えられる。
宝篋印塔 基 礎		1 点	<ul style="list-style-type: none"> ●上端2段の基礎で、非常に小型に造られている。 ●製作時期は、形態・石質より多分に室町時代後半頃と思われる。 	

資料 3 - 3

所 在	石 材	種 目	点 数	備 考
	安 山 岩	五輪塔 地 輪 水 輪 火 輪 風・空輪	4 点 3 点 3 点 1 点	●各部粗雑な造りで、その形態もいびつなものとなっている。 ●製作時期は、多分に室町時代後期頃と考えられる。 ●石材にやや疑問があるが、ここでは一応安山岩とする。
		宝篋印塔 基 礎 笠 相 輪	2 点 1 点 1 点	●明らかに佐賀形式の宝篋印塔であり、馬耳型に移行している 隅飾に特徴がある。 ●製作時期は、その特徴から1500年前後以降（室町中期後半か ら室町後期）と考えられる。
竜音竜尊堂 (榑ノ浦)	安 山 岩	五輪塔 風・空輪	1 点	●簡略化された形態から室町後期頃の製作と考えられる。
間伏郷字光石	安山岩質凝灰岩	五輪塔 火 輪 風・空輪	3 点 2 点	●日島曲崎で出てくる中央形式の五輪塔と同じものである。 ●製作時期は、14世紀後半頃と考えられる。
榑ノ浦寺屋敷 (浜原巧宅付近)	安山岩質凝灰岩	宝篋印塔 基 礎	1 点	●日島釜崎や曲崎で確認される関西形式（蓮弁式）塔と同じも の。 ●前面のみに格狭間を彫出。製作時期は、14世紀後半頃と考え られる。
	砂 岩	宝篋印塔 基 礎 塔 身 笠	1 点 1 点 1 点	●基礎の上端は2段。塔身は素面で何も彫出なし。笠は、下端 2段上端3段で、1段目は隅飾とのべ造り。 ●形式は佐賀型で、製作時期は1500年代前半頃と考えられる。
	安 山 岩	五輪塔 風・空輪	1 点	●佐賀形式の五輪塔で、製作時期は室町時代後半（1500年代中 頃）と考えられる。
坂本組作業所上	安山岩質凝灰岩	宝篋印塔	2 基	●1基は基礎・塔身・笠・相輪がそろい、塔身4面には月輪な しの金剛界四仏種字が陰刻され、笠は3段までが隅飾内にお さまる。他の1基は基礎・塔身・笠それに伏鉢のみの相輪か らなる。基礎は3片に壊れ、塔身の4面には月輪内に金剛界四 仏種字が陰刻されている。笠は3段までが隅飾内におさまる。 ●日島釜崎や曲崎の中央形式（蓮弁式）の宝篋印塔であり、製 作年代は14世紀後半頃と考えられる。
榑ノ浦 (浜原善一宅)	安 山 岩	宝篋印塔	2 基	●1基はほぼ完形で、基礎上端2段で下端は浅い猫足を造り出 す。笠は下端1段上端4段。他の1基は基礎と笠のみで、基 礎は上端2段で下端は浅い猫足を造り出す。笠は下端1段上 端4段。 ●形式は佐賀型で、馬耳型をなしている。形態より製作時期は 1500年前後以降（室町中期後半から室町後期）と考えられる。
		五輪塔 火 輪 風・空輪	1 点 1 点	●形式化した形態から、製作時期は室町時代後期頃と考えられ る。
※同所で確認される阿弥陀如来碑は、室町時代後半頃のものと思われる。				
神部・キョウザキ (経 崎)	安山岩質凝灰岩	宝篋印塔	1 基	●基礎・塔身・笠それに残欠の相輪からなる。塔身の4面には、 月輪・蓮座をもった金剛界四仏を陰刻。笠の隅飾は、裏面の 2面には縁取りなし。 ●日島釜崎や曲崎で確認される中央形式（蓮弁式）の宝篋印塔 で、製作時期は、14世紀後半頃と考えられる。
		安 山 岩	宝篋印塔 基 礎 相 輪	2 点 1 点
		五輪塔 水 輪 風・空輪	1 点 1 点	●室町時代後半頃の製作と考えられる。
極楽寺	安山岩質凝灰岩	五輪塔 水 輪 火 輪	1 点 1 点	●日島曲崎に出てくる中央形式の五輪塔と同じものである。 ●製作時期は、14世紀後半頃と考えられる。
元蔵寺屋敷 (荒川郷)	●凝灰岩製の五輪塔が数基分確認される。製作時期は、日島曲崎の鎌倉時代末から南北朝初期の五輪塔 と同じ頃のものと考えられる。 ●宝篋印塔（安山岩）は佐賀型で、基礎の上端は2段、笠は下端2段上端4段をなし、製作時期は室町 時代の前期頃と考えられる。 ●砂岩製塔は室町時代の後半頃と考えられる。 ※調査が不十分であるため、同所の具体的な報告は別の機会にしたいと思う。			

※若松町内には、ほかに中世・石造美術の遺跡・遺品があるが、現在の段階では調査が不十分であるため他の遺跡・遺品等につ
いては別の機会に詳述する予定である。

※中央形式塔の石材として石英閃緑岩製と思われるものが数基分確認されるが、石材の断定ができないため、ここでは割愛する。

現在までに五島列島で中央形式塔が確認されている所は、先述した日島や若松島をはじめ宇久島・小値賀島・野崎島それに福江島の玉之浦で確認されている。とくに玉之浦町の島山島で確認される宝塔(写真4)は、その塔身正面の扉型内に「正平十二年」(1357)と陰刻されており、またその形態は明らかに関西で製作されたものである。九州全域からみて、関西で製作された宝塔は、管見の限りではこの島山島の1基のみと思われる。日島など長崎県下の中央形式塔の問題を考える上で重要な示唆を与える宝塔と思われる。

なお同じ玉之浦の大宝寺には、これも明らかに中央形式をもった五重層塔(写真5)が確認され、基礎に「正平廿二年」(正平24年, 1369)と陰刻されており、形態上の編年(南北朝後半)と一致する。長崎県内における中世の層塔はこの1基だけであるが、中央形式の層塔とした場合、九州内でも熊本県熊本市野田町の大慈寺十三重層塔(花崗岩)とこの大宝寺層塔だけではないかと思われる。当地と中央との密接な関係が想定される。

さて本稿の主旨は、この日島をはじめ県下の島々で大量に確認される中央形式塔の分布地とその特徴さらに造立背景等を述べることにある。そのため、中央形式塔を除く若松町内の中世・石造美術については別の機会に詳述したいと思う。ただ主な遺品等については、資料3「若松町内の主な種目と点数一覧表」を参考としてあげておく。

なお、中央形式塔の県内におけるあり方をより具体的に位置づけるため、最初に県内の中世・石造美術の特徴を簡単に述べることにする。

2) 長崎県全域における中世・石造美術の特徴

石造美術の研究において、その使用石材が何であるかを知ることが極めて重要である。基本的には、その地域で産出される石材を使用するのが一般的である。しかし、石造文化の進んだ中央(大和・山城)から遠く離れた地方にあつては、石造文化の波及時期や、それにとまなう石工技術の問題等から、最初からその地方の石材が使用されることは希と思われ、初期にあつては石造文化先進地域からのわずかな搬入塔が建塔されたのではないかと思われる。つまり、そのわずかな搬入塔が刺激となって、この石造文化をささえる宗教理念の浸透を背景に、その地域の石材を使用した地方色豊かな石造文化の華が徐々に開いていったものと思われる(註2)。

さて、長崎県下の中世・石造美術とくに石塔類は、使用石材と塔形態・様式から大きく3グループに分類できる(「第1図」参照)。

まず第1が、緑泥片岩製グループである。その分布範囲は、島原半島・諫早地区を除く長崎県本土部、さらに五島列島や平戸島などである。なお、平戸島の場合、最初に建塔されてくるのは中央形式の関西方面製作の石塔類であるが、この中央形式塔は一時期の搬入塔であり、その後続く石塔類が緑泥片岩製であるため、ここでは緑泥片岩製グループに入れておく(資料1「紀年銘・形態による製作年代分類表」平戸島の項参照)。

緑泥片岩は地元・西彼杵半島産であるが、その最終製作地は確定できない。緑泥片岩製塔としては永仁五年（1297）銘の川棚出土五輪塔（写真6）が最古であるが、地輪が二段造りになっているなど、その形態には初期から地方色が濃厚に表れている（資料4「県下の鎌倉・南北朝銘石塔類一覧」参照、註3）。同じことは、緑泥宝篋印塔についても言える。

緑泥片岩製塔のピークは室町前期から中期であり、1520年代から40年代にかけて最高の石工技術が展開されている（註4）。

鎌倉時代から室町前期までの緑泥片岩製塔には、全体に良質の石材を使用した好塔が確認され、またその大きさは、緑泥片岩製塔の中では大型塔が製作されている。これは多分に西彼杵半島における緑泥片岩石材の供給が比較的まだ安定しており、また造立階層が有力な宗教関係者や伝統的な有力名主層など一部に限定されていて製作基数そのものが少なかったためと思われる。日島曲遺跡で確認される緑泥片岩製宝篋印塔基礎は、その大きさと石材の質・形態などから1400年代の前半頃まで遡れるものと思われる。

これに対して室町中期以降とくに後期の緑泥片岩製塔には、一部に上位階層者による造立塔を除いて全体に劣悪な石材が使用されており、その塔形は小型でいびつなものとなっている。緑泥片岩製塔最大の遺跡である小佐々町永徳寺墓地では120基分の緑泥塔が確認されるが、その中の約100基分の緑泥塔は非常に小型で劣悪な石材が使用されており、室町後期の製作と考えられる。

このような室町中期とくに後期の小型化・簡略化の傾向は、階層分化の進展にともなう造立階層の拡大が石塔類の製作需要を増加させる一方、この傾向とは対照的に西彼杵半島における原石材供給が乏しくなり、その需要に追いつけない状況があったためではないかと思われる。室町後期以降、この緑泥塔地域への佐賀型塔（主に安山岩製）の流入が急に目立つようになる現象は、そのことを裏付けているように思われる。

なお西彼杵半島は、平安末から鎌倉時代を中心に製作されたと言われる滑石製石鍋や延久三年（1071）銘の滑石製石仏（弥勒如来座像）の製作地と考えられており、その伝統的な石工技術が鎌倉後期以降の緑泥片岩製塔の製作に関与した可能性を高くしている（註5）。

次に第2のグループとして、とくに佐賀県下で集中的に確認される安山岩や凝灰岩のもの（ここでは、その特徴ある塔形を佐賀型とする）があげられる。この分布は、県本土部では島原半島と諫早地区が入り、離島部では壱岐島や福島などが含まれる。

これらの地区では、ほぼすべての石塔類が佐賀型塔で占められており、緑泥片岩製塔はほとんど確認されない。西有家町茸山では、1300年代前半頃と思われる大型の佐賀型宝篋印塔（写真7）が確認され、佐賀型塔の原型ではないかと思われる。また北高来郡小長井町では至徳二年（1385）銘の佐賀型宝篋印塔（遠嶽氏塔）が確認され、佐賀県東脊振山霊仙寺跡宝篋印塔（南北朝）と同形態をなしている（註6）。また南有馬町古藪の石田氏宅や有馬町の四面宮にも遠嶽氏塔と同形態のものが確認され、南北朝時代の製作と思われる。これらのことから、当地方では鎌倉時代末頃から周囲の緑泥塔文化とは異質な石造文化が展開されていたと考えられ、注目すべき問題と思われる。

また壱岐島にあっても、石材・塔形から佐賀型塔が搬入されており、平戸・松浦地方とは基本的にその石造文化は異質である。ただこの壱岐島では、主に江戸時代初期以降、当地で産出する玄武岩を使用した壱岐島独自の変形宝篋印塔が多数確認される(註7)。この一部は平戸島や対馬にも搬入されており、変形は極みに達している(註8)。

なお、一般に緑泥片岩製塔が建塔されている現・佐世保市と北松・田平町で、南北朝時代から室町時代前期頃の佐賀型塔が数基分確認されることから、これらの地区でも、緑泥片岩製塔と同時代かまたはそれより先行する形で佐賀型塔がわずかながら建塔されていたと思われる。

以上の2つのグループは現・長崎県と佐賀県両県で製作された地方製作塔であり、その彫出内容は、中央形式塔と比較した場合、初期から変形塔として製作されており、その編年は緑泥片岩製塔ならびに佐賀型塔独自の編年基準によらなければならない。

これに対し、第3のグループとして五島若松町日島や平戸島(御館周辺・安満岳など)、対馬全域などで大量に確認される石塔類(南北朝後半～室町前期)が挙げられる。これらの石塔類は明らかに中央形式塔であり、その石材は主に島外産の安山岩質凝灰岩と花崗岩である。この第3のグループの編年は、当然中央での編年基準にもとづかなければならず、その彫出内容は基本的に地元製作塔より高度である。

この中央形式塔を代表する石塔として、現在平戸市最教寺に移管されている花崗岩製の大渡長者五輪双塔(写真8)がある。この2基の五輪塔は、その形態等より鎌倉時代末頃の製作と考えられ、対馬・内院宝篋印塔同様、県内では最高の彫出技術をもった好塔である。

また日島などで確認される宝篋印塔は島外産の安山岩質凝灰岩製で、その塔形式は基礎上端に反花を造り出す関西形式の蓮弁式塔である。これらの塔は、対馬や平戸など県下の国境をまたぐ島々で大量に確認されるものと同じもので、南北朝後半から室町前期にかけて関西方面より搬入されたものと考えられる。

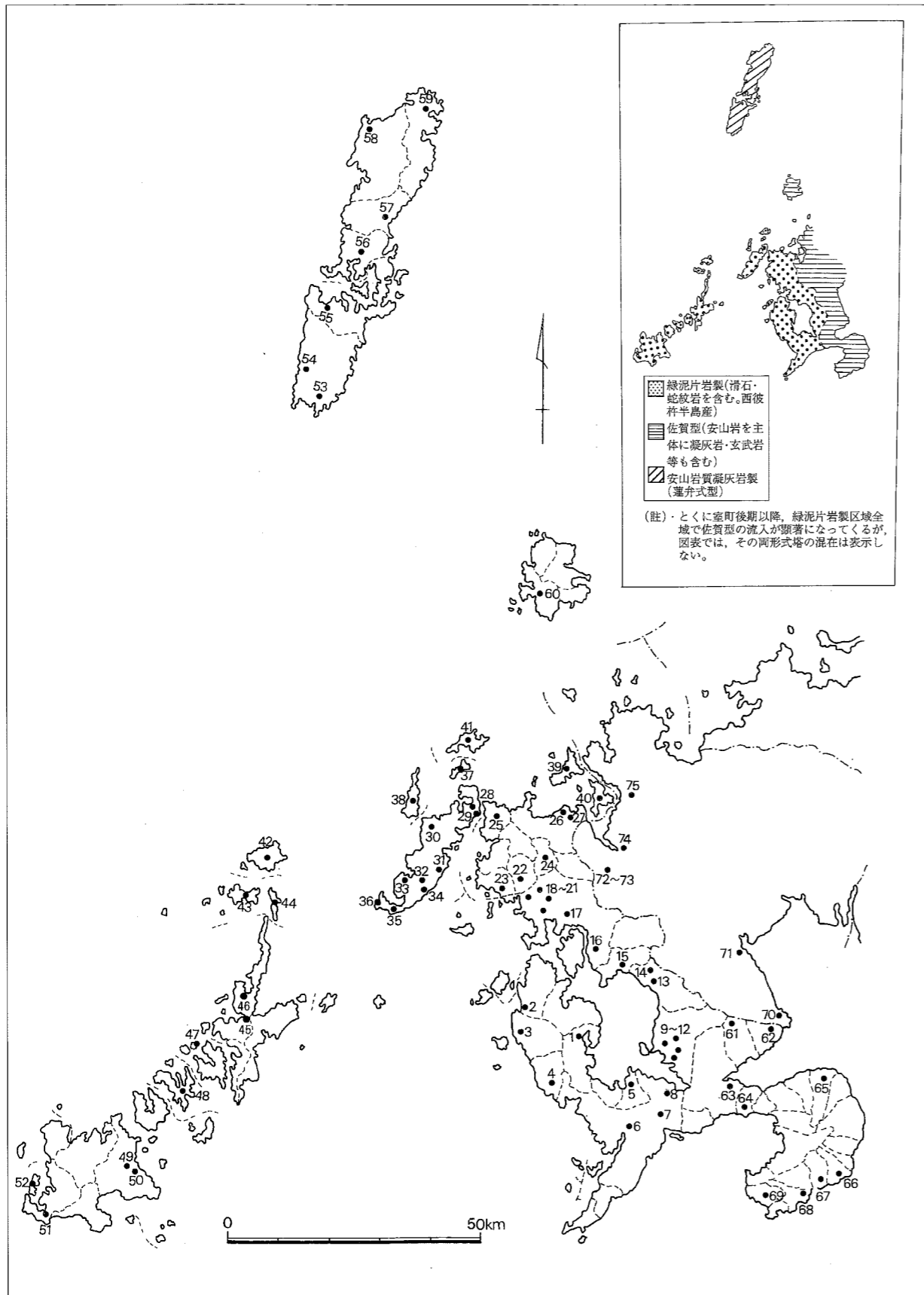
これら中央形式塔が、壱岐島をのぞく県下の国境をまたぐ島々で大量に確認されることは九州全域からみても特異なことであり、そこに中世・石造文化における長崎県の特徴が示されていると考えられる。

以上、長崎県における中世・石造美術の特徴を、その使用石材と塔形式に絞って略述してきたが、そのあり方は、関西方面での製作と考えられる中央形式塔と地元・西彼杵半島産の緑泥片岩を石材とする地方形式塔が混在する五島列島や平戸島などの石造文化に象徴されているように思われる。

3) 中央形式塔の分布とその問題点……日島などにみられる中央形式塔の建塔背景

(1) 中央形式塔の特徴

先述したように県下の中世・石造美術を主な使用石材で分類すると大きく3種類に分類できるが、中央形式か地元製作・地方形式かで分けると2グループに分類できる。



第1図 長崎県下の主な使用石材（塔形式）と代表的遺品遺跡名

第1図 長崎県下の主な使用石材（塔形式）と代表的遺品遺跡名

- | | | | |
|-------------------|--------|--------------------|--------|
| 1. 西彼町泉浄寺跡石塔群 | 緑 | 41. 的山大島石塔群 | 安凝・緑 |
| 2. 西海町江河内石塔群 | 緑 | 42. 宇久東光寺石塔群 | 緑 |
| 3. 大瀬戸町東楽寺跡石塔群 | 緑 | 43. 小値賀キョウタク墓地石塔群 | 安凝・緑 |
| 4. 外海町下里サンシ山石塔群 | 緑 | 44. 野崎島ダントウ山石塔群 | 安凝 |
| 5. 長与町寺屋敷石塔群 | 緑 | 45. 上五島町青方長福寺石塔群 | 緑 |
| 6. 長崎市興善町異形五輪塔 | 安凝 | 46. 上五島町奈麻殿石塔群 | 緑 |
| 7. 長崎市古賀町福瑞寺石塔群 | 緑 | 47. 若松町日島石塔群 | 安凝・花・緑 |
| 8. 西彼多良見町円通寺跡石塔群 | 緑 | 48. 奈留町大串寺屋敷石塔群 | 緑 |
| 9. 大村市三浦五十寺跡石塔群 | 緑 | 49. 福江市大円寺一重塔 | 緑 |
| 10. 大村市忠霊塔石塔群 | 緑 | 50. 福江市観音寺六地藏塔 | 緑 |
| 11. 大村市東光寺跡石塔群 | 緑 | 51. 玉之浦町大宝寺五重層塔 | 安凝 |
| 12. 大村市延命寺跡石塔群 | 緑 | 52. 玉之浦町島山島宝塔 | 安凝 |
| 13. 東彼杵町法音寺跡石塔群 | 緑 | 53. 厳原町内院石塔群 | 花・安凝 |
| 14. 東彼杵町岡遺跡出土宝篋印塔 | 緑 | 54. 厳原町大興寺石塔群 | 安凝 |
| 15. 川棚町永仁五年銘五輪塔 | 緑 | 55. 美津島町加志浦宝篋印塔 | 安凝 |
| 16. 佐世保市広田石塔群 | 緑 | 56. 豊玉町仁位清安寺石塔群 | 安凝 |
| 17. 佐世保市福石観音石塔群 | 緑・安 | 57. 峰町佐賀門通寺石塔群 | 安凝 |
| 18. 佐世保市大智庵城石塔群 | 緑 | 58. 上県町佐護伝福寺跡五輪塔 | 安凝 |
| 19. 佐世保市妙観寺跡石塔群 | 緑 | 59. 上対馬町西福寺石塔群 | 安凝・花 |
| 20. 佐世保市東漸寺松浦盛石塔群 | 緑 | 60. 壱岐郷ノ浦町高山華溪塔 | 安 |
| 21. 佐世保市新豊寺跡石塔群 | 緑 | 61. 高来町金泉寺石塔群 | 安 |
| 22. 佐々町正興寺跡石塔群 | 緑 | 62. 小長井町遠嶽石塔群 | 安 |
| 23. 小佐々町永徳寺石塔群 | 緑 | 63. 諫早市小野石塔群 | 安 |
| 24. 吉井町文殊堂石塔群 | 緑・安 | 64. 森山町唐比権現裏石塔群 | 安 |
| 25. 田平町長寿寺跡石塔群 | 緑・安 | 65. 国見町神代墓地 | 安 |
| 26. 松浦市今福町北免石塔群 | 緑・安 | 66. 有家町四面宮石塔群 | 安 |
| 27. 今福町観音寺跡石塔群 | 緑 | 67. 西有家町葺山宝篋印塔 | 安 |
| 28. 平戸市是興寺跡石塔群 | 安凝・花・緑 | 68. 南有馬町古園石塔群 | 安 |
| 29. 平戸市大渡長者双塔 | 花 | 69. 加津佐町円通寺跡石塔群 | 安 |
| 30. 平戸市安満岳石塔群 | 安凝・花 | 70. 佐賀県竹崎観世寺石塔群 | 安 |
| 31. 大川原・大師堂跡石塔群 | 緑・安凝 | 71. 佐賀県鹿島光厳寺石塔群 | 安 |
| 32. 平戸市延命寺石塔 | 安凝 | 72. 佐賀県西有田山木石塔群 | 緑・安 |
| 33. 平戸市鮎川町鮎川石塔群 | 緑 | 73. 佐賀県西有田町阿弥陀堂石塔群 | 安 |
| 34. 平戸市前津吉町峰殿石塔群 | 緑 | 74. 佐賀県伊万里市白蛇山石塔群 | 安 |
| 35. 平戸市志々岐山石塔群 | 緑 | 75. 佐賀県北波多瑞厳寺石塔群 | 安 |
| 36. 平戸市沖ノ宮塔 | 安凝 | | |
| 37. 度島・ヤクシ石塔群 | 安凝 | | |
| 38. 生月町修善寺跡石塔群 | 安凝・花 | | |
| 39. 鷹島阿翁浦堂様石塔群 | 安・安凝 | | |
| 40. 福島大山百人塚石塔群 | 安 | | |
- 【凡例】
 緑……………緑泥片岩
 安……………安山岩
 安凝……………安山岩質凝灰岩
 花……………花崗岩

資料4 「県下の鎌倉・南北朝銘石塔類一覧」

所在地	時代	紀年銘	種目名	石材	主な銘文内容
川棚	鎌倉末	永仁五年(1297)	五輪塔(地輪)	緑泥片岩	源後家尼為逆修立之
佐世保・宮村	鎌倉末	正和二年(1313)	五輪塔(地輪)	緑泥片岩	為沙旃完
大村・東光寺跡	鎌倉末	正和五年(1316)	宝塔(塔身)	緑泥片岩	東光院阿闍梨性元
大村・延命寺跡	南北朝	建武元年(1334)	五輪塔(地輪?)	緑泥片岩	圓淨法阿
五島・玉之浦	南北朝	正平十二年(1357)	宝塔(塔身)	安山岩質凝灰岩	正平十二年八月廿二日□□理阿
東彼杵	南北朝	正平二一年(1366)	五輪塔(地輪)	緑泥片岩	右造立志者沙旃心阿
東彼杵	南北朝	正平二一年(1366)	宝篋印塔(基礎)	緑泥片岩	素輪大姉
五島若松町日島(釜崎)	南北朝	正平廿貳年(1367)	宝篋印塔(基礎)	安山岩質凝灰岩	正平廿貳年丁未十一月二十日
五島・玉之浦	南北朝	正平廿二年(1369)	五重層塔(基礎)	安山岩質凝灰岩	正平廿二年(24年)
対馬・内院	南北朝	応安七年(1374)	五輪塔(地輪)	安山岩質凝灰岩	壽徳禅尼
北高来郡小長井	南北朝	至徳二年(1385)	宝篋印塔(基礎)	凝灰岩	伊佐早庄遠嶽村住人
東彼杵	南北朝	康応一年(1389)	五輪塔(地輪)	緑泥片岩	林公大姉
大村・石走	南北朝	康応二年(1390)	五輪塔(地輪)	緑泥片岩	三寶弟子尼妙仁
大村・忠霊塔	南北朝	明德二年(1391)	五輪塔(地輪)	緑泥片岩	前信/明純禅門
長与・寺屋敷跡	南北朝	明德二年(1391)	五輪塔(地輪)	緑泥片岩	明德二辛未暮齡六十八逝/禪智禅定尼

両者は、極めて異質な石造文化をもっている。とくに日島や対馬全域・平戸島を中心に大量に確認される中央形式塔は、地元製作塔（緑泥片岩製・佐賀型安山岩製）に比べ、その彫出内容は高度であり、またその編年基準は当然中央での基準にもとづかなければならない。

現在、長崎県下の島々で確認される中央形式塔の種目は主に宝篋印塔と五輪塔であるが、五島・玉之浦町の大宝寺や島山島では五重層塔と宝塔も確認されている。

ところで、県内の島々で確認される中央形式塔の石材は主に安山岩質凝灰岩と花崗岩の2種類であるがこれらの石材は県外のものであり、またその形態は地方製作塔と比較して非常に整備された塔形となっている。

宝篋印塔は、すべて基礎上端に反花を造り出した蓮弁式となっており、立ちの強い複弁八葉が造り出されている。全体に、基礎の背高に対する反花部分の高さ比率はほぼ0.3前後を示しており、やや反花の背高は高い。基礎の側面には輪郭を巻いて1面に一個の格狭間を彫出するが、主に安山岩質凝灰岩製の小型塔の場合には3面または正面のみに格狭間を入れて簡略化したものもある。また塔身4面には素面のまま種字（梵字・金剛界四仏）を陰刻する。笠は下端2段・上端6段の整備された段形を示し、「関東形式」に見られるような露盤は彫出しない。笠4隅の隅飾は基本的に二弧の輪郭を巻き、隅飾の外への傾斜を示す斜角はほぼ10～12度の範囲に収まっている。相輪はすべて円筒形で、その伏鉢上の請花は複弁、九輪上は単弁となっている。

このように、石造宝篋印塔の第二の造立期（鎌倉後期から南北朝末）に大和・山城を中心とする関西において整備されたといわれる「関西形式」の特徴が、日島や対馬・平戸島など長崎県の島々で確認される蓮弁式塔すべてに認められる。全階式（基礎上端を階段状に造る）で簡略化の激しい地元製作塔（緑泥片岩製・安山岩製）と違い、その塔形は整備完成された様式をもったものとなっている。

また、安山岩質凝灰岩や花崗岩を石材とする五輪塔においても、すべて中央形式の特徴が認められる。地輪の上面は、中心に向かってやや盛り上がりをもせて丸味を帯び、その中央に浅い柄穴を彫出する。水輪の下面には短い円形の柄を付け、上面はやや荒削りで内部に少し彫り下げ火輪を受けている。水輪は、鎌倉末の平戸・大渡長者双塔（写真8）はほぼ球形、大部分の南北朝後半期のものになると下端がしばむ壺形となってくる。背の高い火輪の軒はやや厚く、その4隅は真反りに近い反りを示す。また火輪の底面はほぼ水平で、垂直に切られた軒端4隅で真反りとなる。風・空輪は、半球形の風輪にふっくらとした楕円形の空輪がのり、両者の調和はすっきりしている。種字は、ほぼすべての五輪塔で、各輪四方に五輪塔四方種字（キャ・カ・ラ・バ・アの四転）が陰刻されている。

以上のように、日島など県下の島々で確認される安山岩質凝灰岩製や花崗岩製の石塔類は、形態から明らかに中央（大和・山城）形式塔であり、また形態上、その製作年代は南北朝後半から室町前期頃（14世紀後半から15世紀前半）であることが認められる。

(2) 中央形式塔の分布

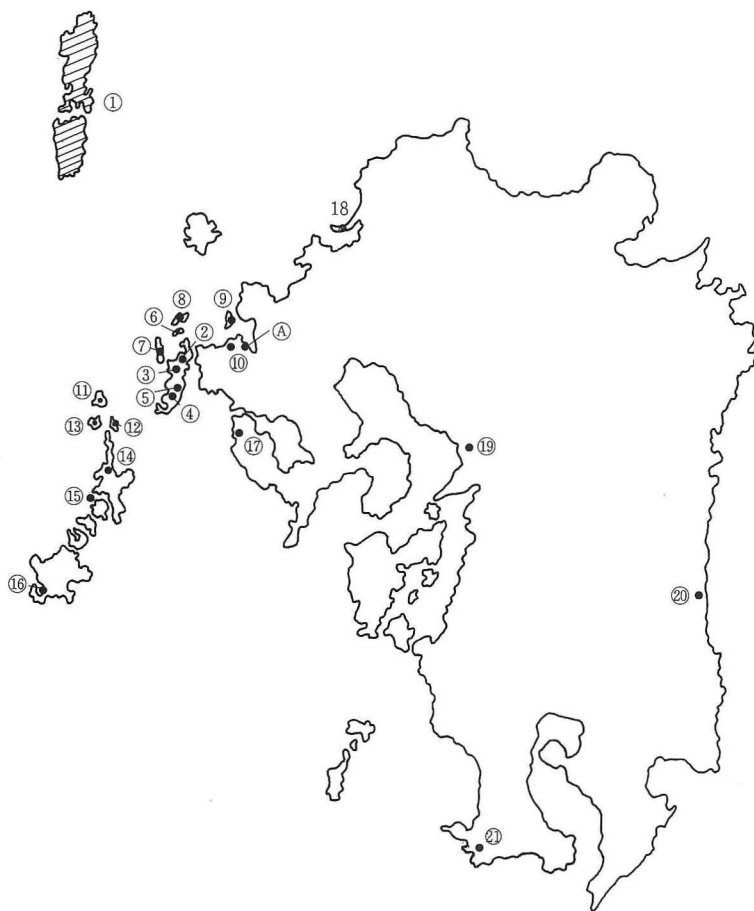
中央形式塔の分布については、資料2「県下にみられる中央形式塔一覧」と第2図「九州全域にお



写真7 西有家町茸山宝篋印塔



写真8 平戸・大渡長者五輪双塔



- ① 対馬全域 (内院塔ほか108基分)
 - ② 是興寺跡とその周辺 [最教寺含む]
(大渡長者双塔ほか51基分)
 - ③ 安満岳石塔群 (15基分)
 - ④ 津吉延命寺塔 (2基分)
 - ⑤ 大川原大師堂跡 (2基分)
 - ⑥ 度島・ヤクシ (1基分)
 - ⑦ 生月島・修善寺跡など (18基分)
 - ⑧ 的山大島 (4基分)
 - ⑨ 鷹島堂様など (4基分)
 - ⑩ 松浦市調川 (1基分)
 - ⑪ 宇久島・山本墓地 (1基分)
 - ⑫ 小値賀町野崎島 (4基分)
 - ⑬ 小値賀島 (4基分)
 - ⑭ 上五島町奈麻殿様墓 (1基分)
 - ⑮ 若松町日島とその周辺 (68基分)
 - ⑯ 玉之浦町大宝寺と島山島 (7基分)
 - ⑰ 西海町唐人墓 (1基分?)
 - 18 福岡市東区志賀海神社
(1基・花崗岩・貞和3年(1347)銘)
 - ⑰ 熊本県野田町大慈寺宝篋印塔など
(3基・花崗岩・鎌倉末)
 - ⑳ 宮崎県国富町義門寺宝篋印塔
(1基・花崗岩・南北朝)
 - ㉑ 鹿児島県坊津町一乗院跡宝篋印塔など
(7基分・安山岩質凝灰岩・南北朝)
 - Ⓐ 松浦市今福 (追加資料参照)
- ※18は中央形式塔であるが、地方製作の可能性あり。
 ※福岡県宗像郡や太宰府・観世音寺でも蓮弁式塔が確認されるが、彫出内容から地方作の可能性あり。

第2図 九州全域における中央形式塔の分布

ける中央形式塔の分布」にまとめているように、日島や対馬全域・平戸島など県下の島々で大量に確認される（註9）。

日島では曲で44基分と釜崎で1基の計45基分、若松町全域では薬師堂（宿ノ浦）で6基分、白魚千人塚（宿ノ浦）で8基分、その他有川郷のモエン様塔や統一新羅時代の渡来仏がある極楽寺などで23基分が確認され、日島を含めた若松町全域で計68基分が現在までに確認されている。また五島福江島の玉ノ浦町でも7基分（宝塔と五重層塔など）が確認されている。

ところで、この中央形式塔の分布状況を見ていくと、その中にいくつか際だった特徴を見い出すことができる。以下、その特徴を簡単に述べてみる。

① 種目別では五輪塔、使用石材では安山岩質凝灰岩製塔が中央形式塔の大半を占める。

資料2-2に示しているように、現在までに確認された中央形式塔は293基分である。そのうち種目別の分類では、五輪塔が197基分で全体の約67%、宝篋印塔が94基分で全体の約32%を占め、この両種目が中央形式塔のほとんどを占めている。そのほかは、五島玉之浦町で五重層塔1基（大宝寺）と宝塔1基（島山島）が確認されるにすぎない。

とくに五輪塔が全体の約67%を占めているという事実は、一部の大型花崗岩製五輪塔（平戸・大渡長者双塔や日島・花崗岩製五輪塔）を除いて、五輪塔が宝篋印塔に比べ安価で一般的な石塔と考えられていたためではないかと想定される。実際、五輪塔の大半は、花崗岩より石質のおちる安山岩質凝灰岩製の小型塔で占められており、それが五輪塔の大量建塔につながる主な要因と思われる。

次に使用石材で分類すると、安山岩質凝灰岩製塔が244基分（全体の約83%）で圧倒的に多く、花崗岩製塔49基分（約17%）を断然凌いでいる。その他、石英閃緑岩製と思われるものもあるが、確認基数は少ない。

ただ同じ中央形式塔であっても、その彫出内容は花崗岩製塔が高度で精巧に造られており、大きさも花崗岩製塔が大きく立派である。花崗岩製塔の代表的石塔である平戸・大渡長者五輪双塔（鎌倉時代末、総高160センチと157センチ）や対馬・内院宝篋印塔（南北朝後半～室町前期、総高235センチ、写真9）、日島花崗岩製五輪塔などを見れば、そのことは容易に理解されることである。このことから基数の少ない花崗岩製塔の方が安山岩質凝灰岩製塔より質が高く、価格面においても実際高価であったと思われる。花崗岩製塔の造立には、安山岩質凝灰岩製塔以上の強い建塔意欲が感じられる。

なお、これら中央形式塔建塔の性格は、すべて墓塔として造立されたとは言いきれない。確かに日島石塔群の場合、平成6年度の発掘調査で墓の内部遺構が確認されており、墓塔として建塔されていたことは間違いのないものと思われる。また対馬・内院宝篋印塔の場合、かつてこの石塔の地下部分を横の方より掘った際木炭が出てきたという話が伝わっている。断定はできないが、多分にこの時出てきた木炭は、墓の内部遺構に関係したものと思われる。

このように墓塔としての性格が一部で考えられるが、墓塔とは思われない石塔群もある。その一例

として、平戸・安満岳石塔群がある。ここは安満岳（標高534m）のほぼ頂上に近い高所にあり、またその石塔群は非常に狭い範囲に建塔されている。もちろん石塔の組み直しなどで後代人為的な手が増えられたことも考えられるが、石塔の建塔場所そのものは以前と変わらず現在の高所の場所であったと思われる。このことから考えて、この安満岳石塔群は多分に供養塔として建塔された可能性が高いと思われる。また、五島・玉之浦の五重層塔と宝塔は、その塔の性格からみて多分に供養塔と思われる。

以上のことから、中央形式塔はすべて墓塔として建塔されたというよりも、ある所は墓塔として、また別の所では供養塔として建塔された可能性があり、建塔地の違いにより造塔の性格は異なっていたのではないかと思われる。

なお、鹿児島県坊津町の一乗院跡で確認される基礎（日島塔などと同じ安山岩質凝灰岩製、蓮弁式塔）には「逆修」と陰刻されており、逆修行為（自らの死後の冥福などを願うために生前予め善根供養を行うこと）のために建塔していることがわかる（資料7参照）。

② 日島・対馬・平戸島の三島に大量建塔。これに対して壱岐島などでは、ほとんど確認されない。

現在確認される中央形式塔は、日島・対馬・平戸島の三島に集中的に建塔されている（資料1・2、第2図参照）。基数をあげると、日島とその周辺で68基分（全体の約23%）、平戸島全島で70基分（全体の約24%）、対馬全島で108基分（全体の約37%）が確認され、この三島だけで246基分、実に全体の約84%が建塔されている。

また遺跡別にみると、日島の45基分が圧倒的であるが、やや遺跡の範囲を広げると平戸館山是興寺跡とその周辺で46基分、対馬峰町円通寺とその周辺で30基分が確認される。これら三遺跡の集中的建塔が一体何を意味しているのか非常に興味深いところであるが、石塔のもつ性格（墓塔または供養塔）からみて、多分にこれら三遺跡また三島は、建塔者等の生活居住区つまり根拠地的性格の強い場所であった可能性が高いと思われる。

これに対し、同じ国境をまたぐ島である壱岐島では、現在のところ全く確認されていない（註10）。壱岐島の中世・石塔類は、そのほとんどが室町後期以降の佐賀型塔で占められており、南北朝後半頃の中央形式塔などは全く確認されない。

また、五島列島中の宇久島（1基分）や小値賀島（4基分）などでもその確認基数は非常に少なく、本土部でも調川（松浦市、1基分）などでわずかに確認されているにすぎない。

このように大量に建塔されている島とほとんど確認されない島（地域）がはっきりと分別できるところに、中央形式塔の分布の特徴が見られる。

ところで、大量に建塔されている場所とそうでない場所の地理的条件には、際立った差異が認められる。全体的にみて、中央形式塔が大量に建塔されている所は、全島切り立つ山で被われて平地が極端に乏しい島（地域）に限られている。とくに五島若松町日島のように、山が急傾斜で海岸に迫る小

島で平地がなく、わずかに展開する舌状の礫丘に中央形式塔はじめ多数の中世塔が林立している状況は、その代表的な遺跡である。この日島の建塔状況からは、海上で活躍した人々の石塔群であろうことは容易に想定される。

これに対し、壱岐島や宇久島・小値賀島のように島全体が平坦な台地状をなしているような島では、中央形式塔の建塔はほとんど皆無に近い状態である。その原因を探し出すのは非常に困難を極めるが、ただ後述するように、この中央形式塔の建塔には、多分に14世紀後半頃に活躍する倭寇（前期倭寇）が関係していたものと思われる。このことを考えた時、倭寇の根拠地としては壱岐島のような平坦な台地状の島は適さず、むしろ対馬・日島などのように全島切り立つ山で被われ隔絶した島の方が適したのではないかとも思われる。これを補強するものとして、鹿児島県坊津町の一乗院跡がある。ここでも7基分の中央形式塔が確認されるが、この坊津町もリアス式海岸の複雑な入江に囲まれており、対馬や五島・日島などと同じ地理的環境をなしている。

これまで朝鮮側の記録に見られる倭寇の根拠地「三島倭寇」の三島として、対馬・壱岐・松浦地方が挙げられていた（註11）。しかし、壱岐島からは中央形式塔が全く確認されない現状を考えた場合、むしろ対馬・平戸島それに五島（日島）の「三島」が倭寇の根拠地として挙げられ、そのより具体的な根拠地として、先述した日島（五島）、平戸館山是興寺跡とその周辺、それに対馬（主に円通寺跡とその周辺）が挙げられるのではないかと思われる。ただし、それらを直接的に示す資料がないだけに、ここでの断定は避けたいと思う。

なお、現在のところ、長崎県外の九州全域で確認されている中央形式塔は、先述した鹿児島県坊津町一乗院跡で7基分（すべて安山岩質凝灰岩製、資料7参照）と完形塔の5基（福岡市志賀町志賀海神社塔〔貞和三年（1347）銘〕、宮崎県国富町義門寺塔〔資料8参照〕、熊本県大慈寺宝篋印塔2基と十三重層塔1基。5基とも花崗岩製）と福岡県宗像郡や太宰府音観世寺などで確認される数基分だけである。ただ中央製作塔とした場合、志賀海神社塔や宗像郡の数基分には疑問が残るため、明らかに中央製作塔として考えられる塔はわずか11基分だけである。

今後の調査で九州全域での基数は若干増えるかもしれないが、長崎県の島々における集中的建塔は九州全域からみても非常に注目すべき基数であることは理解されると思われる。

③ 中央形式塔の分布地は、渡来仏などの朝鮮系・中国系請来物の安置場所とほぼ一致する。

対馬をはじめとする長崎県の島々では、多くの朝鮮系ならびに中国系の渡来仏が確認されている（註12）。その分布地は、主に対馬・壱岐・平戸・五島列島など国境をまたぐ島々であるが、県下の本土部にあっても確認されている。最近では北松浦郡吉井町で統一新羅時代の銅造如来立像が確認されたし、また大村市松原の東光寺跡に安置されている銅像薬師如来座像は中国・明代の作となっている。

ところで、渡来仏の主な搬入地は、やはり対馬を中心とする島々である。現在までに対馬だけで約100軒近くの渡来仏が確認されているが、その代表的な渡来仏といえば対馬上県町佐護の北魏仏（写真

10) であろう。この北魏仏の台座には「興安二年」(北魏年号・453年)の銘が刻まれており、現在のところ伝世仏としては日本最古の渡来仏である。この北魏仏は、たまたま佐護・伝福寺跡の石塔調査の際に出てきたもので、ここには1基分の中央形式五輪塔(安山岩質凝灰岩製)が建塔されている。

また、今年(平成7年)、平戸・大川原の大師堂から「宋景平三年正月十日」銘の渡来仏(総高13センチ、光背裏面に銘陰刻、写真11)が発見された。宋とは中国南北朝時代南朝の王朝で、景平三年つまり425年の作で、対馬佐護の北魏仏より約20年ほど前のものである。伝世仏としては、佐護・北魏仏を凌いで日本最古の渡来仏と考えられる。ただ現在の段階ではまだ専門的な調査が実施されておらず、その真偽については今後の調査を待ちたい。この大師堂は、もともと近くの現・大師堂跡にあったといわれ、その大師堂跡裏手墓地で1基分の中央形式五輪塔(安山岩質凝灰岩製)が確認された。これが契機となって渡来仏がないかということになり、大師堂を維持管理している亀淵吉太郎氏の案内で大師堂内部を調査したところ出てきたものである。なお、この大師堂では、もう1軀渡来仏が確認される。

対馬の北魏仏、平戸の南朝景平仏(?)ともに中央形式塔と一緒に出てくることは、この両渡来仏の搬入時期を考える際に有力な手がかりを与えてくれるものと思われる。つまり仏教公伝(6世紀)以前の銘をもつ両渡来仏であるが、後述する中央形式塔との関係からみて、他の渡来仏同様、南北朝後半頃の搬入と考えるのが一番妥当と思われる。

ところで、中央形式塔が集中的に建塔されている三遺跡またその周辺でも、やはり渡来仏が確認される。

五島若松町日島では約45基分の中央形式塔が確認されるが、この日島が属する主島・若松島の極楽寺には、国指定重要文化財に指定されている統一新羅時代の銅造如来立像がある。この仏像は、対馬峰町海神社の銅像如来立像(写真12)同様、統一新羅時代の逸品である。

対馬峰町円通寺とその周辺では約30基分の中央形式塔が確認されるが、この円通寺には県指定有形文化財に指定されている銅造薬師如来座像(高麗時代、写真13)をはじめ宝冠の釈迦像など数軀の渡来仏が安置されている。またこの円通寺には李朝初期といわれる朝鮮鐘(県指定)もあり、中央形式塔と朝鮮系搬入物との結びつきが濃厚に表れている場所である。

同じ対馬の厳原町久根浜にある大興寺では約12基分の中央形式塔が確認されるが、ここでも数軀の渡来仏が確認される。とくに県指定となっている銅造如来形座像(高麗時代末期)や銅造誕生仏(高麗時代前半)は、大興寺を代表する渡来仏である。

平戸是興寺跡とその周辺でも中央形式塔が約46基分確認されるが、ここでも数軀の渡来仏が確認される。とくに最教寺には、高麗時代の大型金銅如来像の頭部がある。この渡来仏頭部は、現在木造の体部がつくられ安置されているが、非常に損傷が激しい。この損傷が激しいという点は、対馬などで確認される渡来仏全体にみられる現象で、渡来仏の搬入時期が李朝初期の儒教政策による破壊と前後した時代であったという論拠になっている(註13)。

以上、渡来仏と中央形式塔との関係について述べてきたが、現在県下で確認された渡来仏がすべて



写真9 対馬・内院宝篋印塔



写真10 対馬・北魏仏



写真11 平戸・南朝仏(?)



写真12 対馬・海神社銅像如来立像



写真13 対馬・円通寺銅像薬師如来座像

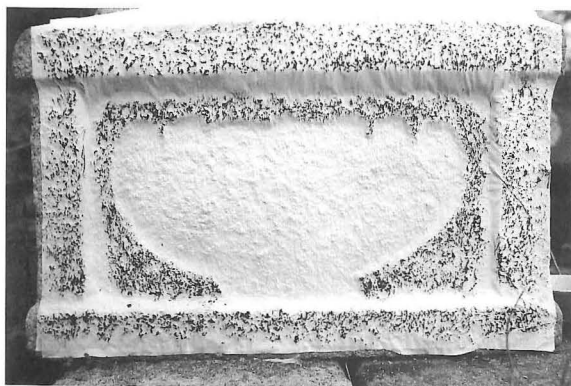


写真14 対馬・西福寺宝篋印塔格狭間 [拓本]



写真15 広島県因島・金蓮寺石塔群

中央形式塔とその搬入時期に関係したものとは言いきれない。ただ、両者の分布地がほぼ一致することは留意すべきであり、とくに損壊の激しい渡来仏の特徴が、李朝初期におこった排仏と密接な関係が想定されることは注目すべきことと思われる。というのも、中央形式塔の搬入時期は、後述するように、渡来仏の損壊に関係すると思われる李朝初期またはその前後の時期と考えられ、渡来仏搬入者と中央形式塔の搬入者は実は同一の人々であったことが十分に想定されるからである。

なお、現在のところ中央形式塔が全く確認されない壱岐島でも、数鉢の渡来仏が確認されている(註14)。この点の解釈は非常に難しいが、ただ中央形式塔がまとまって確認できる所つまり根拠地と思われる地域以外の所でも交易(略奪行為)が当然考えられるため、中央形式塔の建塔が確認できなくても渡来仏が請来されて不思議ではないと解釈したい。実際、壱岐島が倭寇構成者の一つであったことは、「李朝世宗実録」(巻百四、二十六年四月己酉条)などでも明らかである(註15)。

(3) 中央形式塔の製作年代

現在までに中央形式塔で紀年銘が確認される塔は、下記の5基分である。

①「正平十二年／八月廿二日／□□理阿」

- ・正平十二年，1357年
- ・五島玉之浦町島山島
- ・宝塔(安山岩質凝灰岩製)

②「正平廿貳年丁未十一月二十日敬白」

- ・正平二十二年，1367年
- ・五島若松町日島釜崎
- ・宝篋印塔(安山岩質凝灰岩製)

③「正平廿二年」

- ・正平二十四年，1369年
- ・五島玉之浦町大宝寺
- ・五重層塔(安山岩質凝灰岩製)

④「壽徳禅尼／応安七七廿二」

- ・応安七年七月二十二日，1374年
- ・対馬巖原町内院
- ・五輪塔(安山岩質凝灰岩製)

⑤「応永三十□年／妙林禅尼／六月□□」

- ・応永三十～三十四年，1423～1427
- ・対馬峰町志多賀
- ・宝篋印塔(安山岩質凝灰岩製)

この5基の銘はともに安山岩質凝灰岩製の塔に陰刻されているが、その彫出の仕方は大変に拙なく素人の手によるものと思われる。おそらく石塔搬入後、現地で彫出されたものと思われる。

ところで、石造物に刻まれた銘文の信憑性については、慎重に検討する必要がある。とくに素人彫りであればなおさらであるが、たとえ専門石工の手にかかったものであっても、その真偽を問うことは必要である。

銘文とくに紀年銘の信憑性は、まず銘文が刻まれた石造物自体の形態と比較することが第一であり、次に銘文の内容の検討である。例えば大村市松原の延命寺跡に「紫雲山延命寺／天平念戊子八月」と陰刻された石造物（現・大村市立資料館蔵）がある。天平戊子は天平二十年（748）にあたるが、この石造物は室町時代後期の六地藏塔竿部であることからして、銘文は明らかに後刻であることがわかる。また、「紫雲山延命寺」という山号が用いられるのは平安時代以降のことであり、天平年間に使用されることはない。このように、石造物の銘文については慎重な検討が求められる。

ところで、上記の中央形式塔5基の紀年銘は、平戸・大渡長者五輪双塔（鎌倉時代末）を除く中央形式塔の製作年代が、主に1300年代後半から1400年代前半つまり南北朝後半から室町前期頃の製作であることを示唆している。ただ、その銘文が果たして信頼できるものかどうか、上述した形態と銘文（紀年銘）内容の両点から検討してみたい。

まず、紀年銘と形態との比較である。この点は、先述した「中央形式塔の特徴」の項で、大渡長者双塔を除く中央形式塔全体の編年が、その形態上の特徴から南北朝後半から室町前期頃に製作されたことを指摘した。ただ、この点をさらに詳しく検討するため、とくに蓮弁式宝篋印塔の基礎に彫出されている格狭間の内容に着目してみたい。

日島正平廿二年銘釜崎宝篋印塔や平戸安満岳宝篋印塔また対馬・西福寺宝篋印塔などに代表される蓮弁式塔の格狭間は、曲線が強く左右に張り出してふくらみに力量感があり古様式を見せているが、鎌倉様式に比べやや葉状に移行する傾向がうかがえる。このことから、その製作年代が1300年代後半から1400年代前半頃のものであることはほぼ明らかである（写真14）。

ただ同じ中央形式蓮弁式塔である対馬内院宝篋印塔（花崗岩製）の場合、その格狭間の形態が肩から側線にかけての強い張りが消えて全体に力強さがなくなり萎縮していることを考慮して、正平廿二年銘の日島宝篋印塔よりやや時代が降って、南北朝時代末から室町時代前期とくに1400年代前後頃の製作と思われる。

なにはともあれ、長崎県下で確認される中央形式塔の製作年代は、鎌倉時代末の平戸・大渡長者双塔を最初として、その他すべての中央形式塔は、形態上の特徴からみて南北朝時代後半から室町時代前半頃として間違いのないものと思われ、上記5基の紀年銘が妥当な年号であることが裏付けられる。

次に銘文の内容について検討してみる。この点は、紀年銘として使用されている南朝年号・北朝年号が、他の文献資料の使用年号と一致しているかどうかで信憑性を判断してみる。

「資料5」は、長崎県に見られる主な南朝年号・北朝年号銘を記載・彫出している文書類ならびに石塔類の一覧表である。文書としては、中世文書として長崎県を代表する「青方文書」「福田文書」「深

資料5 長崎県に見られる主な南朝・北朝年号銘記載の石塔類・文書等一覧

西 暦	南 朝	石 塔 類 ・ 文 書 等	北 朝	石 塔 類 ・ 文 書 等
1332	元弘2		正慶1	
1333	3	武藤貞經書下案（「青方」）など 肥前國千松寺住持重濟寄進状（「深堀」）など 福田兼信着到状寫（「福田」）など	2	青方覚性申状案（「青方」）
1334	（建武1） 建武新政府	●大村・延命寺跡五輪塔地輪（?），某沙汰事書案（「青方」）など （建武元年）深堀政綱安堵申状，（正慶3年）深堀政綱所領讓状（「深堀」）など （建武元年）福田兼信着到状寫，後醍醐天皇繪旨寫，（「福田」）など （建武元年）後醍醐天皇繪旨（「来島」）など		
1335	（建武2）	足利尊氏軍勢催促状案（「青方」）など， 少貳頼尚施行状寫（「福田」）など，後醍醐天皇繪旨（「来島」）		
1336	延元1		建武3	【足利尊氏，九州下向】 足利尊氏軍勢催促状（大村四郎宛） 青方高直軍忠状案（「青方」）など 深堀明意軍忠状（「深堀」）など 今川助時軍勢催促状寫（「福田」）など 大島又四郎宛源有催促状（「来島」）など
1337	2		4	●壹岐安国寺高麗版大般若經寫本 鎮西管領一色道猷施行状案（「青方」）など 源俊賢施行状（「深堀」） 福田兼信軍忠状寫（「福田」）など 足利尊氏（カ）御判感状寫（「来島」）など
1338	3		暦応1	（建武5年）鎮西管領一色道猷軍勢催促状案（「青方」）など （建武5年）深堀明意番役勤仕注進状（「深堀」）など （建武5年）福田兼益軍忠状寫（「福田」）など
1339	4		2	青方高直注進状案（「青方」）など 深堀明意博多警固番役勤仕注進状（「深堀」）など 福田兼信軍忠状寫（「福田」）など
1340	興国1		3	青方聞軍忠状案（「青方」） 福田兼信軍忠状寫（「福田」）など
1341	2		4	深堀明意田地等讓状（「深堀」）
1342	3		康永1	（暦応5年）青方高直軍忠状案（「青方」） （暦応5年）小俣道刺召文（「青方」）など 沙彌某軍勢催促状寫（「福田」）など
1343	4		2	鎮西管領一色道猷舉状案（「青方」）など 深堀時元・同清政連署和与状（「深堀」） など 沙彌某軍勢催促状寫（「福田」） 大島聞軍忠状（「来島」）
1344	5		3	●对馬・多久頭魂神社梵鐘銘 寂念置文案（「青方」）など 深堀時廣着到状（「深堀」） 松浦小次郎（聞）宛一色範氏宛行状（「来島」）
1345	6		貞和1	（康永4年）某御使請取状案（「青方」） （康永4年）藤原直郷召文（「深堀」）など
1346	正平1	深堀明願・小宮通廣連署押書（「深堀」）	2	足利尊氏御教書案（「青方」）など 大友氏泰軍勢催促状寫（「福田」）
1347	2		3	
1348	3		4	一色道猷書下（「深堀」）など
1349	4		5	【足利直冬，鎮西下向】 藤三郎起請文（「青方」）など
1350	5		観応1	鎮西管領一色直氏書下案（「青方」）など

西 暦	南 朝	石塔類・文書等	北 朝	石塔類・文書等
1350	正平5		観応1	(貞和6年)今川直貞軍勢催促状(「深堀」)など (貞和6年)福田兼政軍忠状寫(「福田」)など (貞和6年)足利直冬宛行下文(「来島」)など
1351	6		2	●(貞和7年)諫早・慶嚴寺名号石 貞宗・忠孝連署奉書(「深堀」) 沙彌某所領宛行状寫(「福田」)
1352	7		文和1	(観応3年)松浦理契約状案(「青方」)など (観応3年)小俣氏連軍勢催促副状(「深堀」)
1353	8		2	
1354	9	源建請文案(「青方」)	3	
1355	10	●松浦市今福・善福寺鐔口銘	4	
1356	11	深堀明智・同明願連署讓状案(「深堀」)	延文1	(文和5年)みやうえ所領讓状案(「深堀」)
1357	12	◎五島・玉之浦島山島宝塔銘 ●対馬・多久頭魂神社金鼓,大蔵経種により奉懸 白魚政讓状案(「青方」)など 深堀時久請取状(「深堀」)	2	
1358	13		3	
1359	14		4	
1360	15	【大保原合戦で菊池南朝方勝利】	5	
1361	16	【1361より72年まで征西將軍宮,太宰府占領】 征西將軍宮懷良親王令旨案(「青方」) 深堀時勝軍忠状(「深堀」)	康安1	(延文6年)青方重相傳状案(「青方」)など
1362	17	【長者原合戦で菊池南朝方勝利】 彼杵一揆契諾状断簡寫(「福田」) 征西將軍宮懷良親王令旨案(「青方」)など 征西將軍宮懷良親王令旨案(「来島」)	貞治1	
1363	18	●老岐安国寺高麗版大般若經写本 彼杵一揆連判状(「郷村記」) 征西將軍宮懷良親王令旨案(「青方」)	2	
1364	19	●大村・大般若經写經 (正平25年まで。佐賀県相知町医王寺藏) 了満・正七等連署起請文案(「青方」)	3	
1365	20	白魚繁讓状案(「青方」)	4	
1366	21	●東彼杵五輪塔 ●東彼杵宝篋印塔 宇久・有河住人等連署置文案(「青方文書」)	5	
1367	22	◎五島・若松町宝篋印塔 征西將軍宮懷良親王令旨(「来島」)	6	
1368	23		応安1	
1369	24	◎五島・玉之浦大宝寺五重層塔銘 高麗渡りの大山二艘の公事免除(「大山田小田文書」) 平某所領安堵状寫(「福田」)	2	
1370	建徳1	(正平廿五年)青方重讓状案(「青方」) (正平廿五年)深堀時勝莊分濟物用途納状(「深堀」) (正平廿五年)藤原季高宛行状寫(「福田」)	3	
1371	2	●老岐安国寺高麗版大般若經写本 白魚乙若丸申状案(「青方」)など	4	【幕府,今川了俊を九州探題に補任】
1372	文中1	征西將軍宮懷良親王令旨案(「青方」)	5	【今川了俊,太宰府奪取】

西 暦	南 朝	石 塔 類 ・ 文 書 等	北 朝	石 塔 類 ・ 文 書 等
1372	文中1	〔青方固, 宮方として転載〕	応安5	● 岩波安国寺高麗版般若経写本 彼杵一揆契諾状断簡寫 (「福田」) 深堀時弘軍忠状 (「深堀」) など
1373	2		6	五島住人等一揆契諾状案 (「青方」) など 今川了俊書下案 (「深堀」) など
1374	3	澄茂発給文書	7	◎ 対馬・内院五輪塔 称・頼阿連署押書状案 (「青方」) 今川頼泰領家職預ケ状 (「深堀」) など 福田兼親軍忠状寫 (「福田」) など
1375	天授1	(文中4年) 澄茂発給文書	永和1	(応安8年) 宇久松熊丸等連署押書状案 (「青方」) ● (応安8年) 五島玉之浦大宝寺梵鐘銘 (応安8年) 式見兼綱軍忠状 (「深堀」) など
1376	2		2	澄茂遵行状 ● 佐賀県相知町医王寺梵鐘 (「西海路肥前州彼杵庄父賀志村」)
1377	3		3	青方重置文案 (「青方」) など 今川貞臣証判大島堅軍忠状 (「来島」) など
1378	4		4	● 対馬木坂八幡宮棟札 (大檀那当州守護是宗朝臣伊賀守澄茂) 尼聖阿彌陀仏沽却状案 (「青方」) 深堀時勝代時澄軍忠状 (「深堀」) 今川貞臣証判大島堅軍忠状 (「来島」) など
1379	5		康暦1	(永和5年) 青方重等連署讓状案 (「青方」)
1380	6		2	
1381	弘和1		永徳1	今川了俊安塔状 (「青方」) など 深堀時久軍忠状 (「深堀」) など 福田兼親軍忠状寫 (「福田」)
1382	2		2	青方重軍忠状 (「青方」)
1383	3		3	與等連署押書状案 (「青方」) など
1384	元中1		至徳1	(永徳4年) 下松浦住人等一揆契諾状案 (「青方」) など
1385	2		2	● 北高来郡小長井町遠嶽宝篋印塔 善賢等連署裁決状案 (「青方」) 大村・紫雲山延命寺縁起序 (?)
1386	3		3	白魚糺讓状案 (「青方」)
1387	4		嘉慶1	某沽却状案 (「青方」) など
1388	5		2	下松浦住人等一揆契諾状案 (「青方」)
1389	6		康応1	● 東彼杵五輪塔 散位某書下寫 (浦上一揆) (「福田」) 深堀時清知行分田地段銭請取状 (「深堀」)
1390	7		明徳1	● 康応2年銘大村・石走五輪塔 深堀時弘軍忠状 (「深堀」) など 福田兼親軍忠状寫 (「福田」)
1391	8		2	● 大村・三城五輪塔 ● 長与・寺屋敷五輪塔 みやうおん田地讓状 (「深堀」)
1392	9		3	下松浦住人等一揆契諾状案 (「青方」) など

(註) 「青方」は「青方文書」, 「福田」は「福田文書」, 「深堀」は「深堀文書」, 「来島」は「来島文書」の略。

◎印は, 中央形式塔を示す。

堀文書」「来島文書」を取り上げた。また石塔類としては、現在までに長崎県下で確認された南北朝銘12基の石塔類をすべて挙げ、その他として大般若経写本紀年銘や梵鐘銘、鰐口銘、棟札銘なども入れた。

当地における南北朝時代は、建武新政府時代、足利尊氏下向、足利直冬下向と三勢力鼎立、征西將軍宮の全盛、今川了俊九州探題時代という政治的変動に左右された時代であり、南朝か北朝そのどちらの年号を使用するかはどの勢力に属していたかを知る指標である。

ところで、この「資料5」に表れた南朝・北朝年号の使い分けをみると、大きく4グループに分類できる。

まず1335年までの部分（建武新政府時代）では、石塔類としてみられる大村延命寺塔の紀年銘が他の文書同様に南朝年号を使用していることが理解される。

第2グループとして1336年から1352年までの間（足利尊氏、足利直冬下向と三勢力鼎立）を区切ってみると、対馬・多久頭魂神社梵鐘銘や諫早・慶厳寺名号石銘が、他の文書同様に北朝年号に変化している。

次の第3のグループは、征西將軍宮が太宰府を占領する1361年から1372年までとすべきかもしれないが、大まかに南朝年号が再び使用される1354年から今川了俊が九州探題として補任される1371年までとして見る。ここでは、中央形式塔である五島玉之浦宝塔銘や五島若松町日島塔銘が、他の文書・鰐口銘・大般若経銘同様に南朝年号を使用している。

最後のグループである1372年から1392年までの第4グループ（今川了俊九州探題時代）では、対馬内院五輪塔銘や他の石塔銘が、他の文書等同様に北朝年号を使用している。

以上のことからみて、少なくとも南北朝時代の銘をもった12基の石塔類とくにここで問題にしている中央形式塔の4基は、南朝と北朝がめまぐるしく変動した時代にあっても、時代の変化に即応した紀年銘を刻んでいることから、その銘文内容は信頼できる正確な内容をもっていると思われる。

なお、「資料5」に見られる中央形式塔のあり方からみて、この中央形式塔は、南朝または北朝のどちらか一方の勢力に限定されることなく両朝を通じて建塔されていることが理解され、一部の限られた勢力による建塔ではないことがわかる。

なにはともあれ、平戸・大渡長者双塔を除く中央形式塔のすべては、これまで述べた紀年銘ならびに形態の内容より南北朝時代後半から室町時代前期頃に製作されたことは間違いのないものと考えられる。

(4) 中央形式塔の製作地

日島・対馬・平戸等で確認される中央形式塔とくに蓮弁式宝篋印塔の形態が、鎌倉末から南北朝時代にかけて関西方面で整備された関西形式であることから、その製作地が関西方面であろうことは容易に考えられることである。ただ、同じ関西形式で製作された宝篋印塔が瀬戸内海地方などでも確認されるため、その製作地の限定はより慎重な検討が求められる。

そのことを裏付けるため、平成6年8月、山口県から瀬戸内海の因島(広島県)、そして関西地方と

くに丹波方面にかけて調査をおこなった。

因島村上氏は、かつて“海の名”とまで呼ばれ瀬戸内海中部で勢力を築いた海賊衆である。この村上氏に関する石塔群（写真15）が、広島県因島市中庄町金蓮寺（こんれんじ）にある。この石塔群は寄せ集めであり、もともとは分散していたという。製作時期は、形態より室町中期以降のものと考えられる。

さて、この石塔群の主体をなす蓮弁式宝篋印塔は、対馬・平戸・日島等で確認されるものと同じ関西形式である。ただ、基礎総高に対する反花部分の高さ比率が本県のもの（平均で0.3）より高く、全体に細身で彫出内容は劣っている。一見して、本県で確認される中央形式塔の彫出内容とは異質であることが理解される。室町中期以降という製作時代の違いを差し引いても日島等の中央形式塔とは異質であり、因島石塔群は明らかに瀬戸内海地方で製作された地方製作塔と考えられる。なお、福岡県志賀海神社塔や宗像郡などで確認される中央形式塔は、この因島石塔群と同じ彫出内容をもっており、両者は同じ石工系譜につながるように思われる。

続いて京都府から兵庫県にまたがる丹波地方の調査に入った。

京都府福知山市の福知山城は、一説に天正七年（1575）、織田信長の命にもとづき明智光秀が築城したと伝えられている（註16）。この福知山城の石垣には多数の石塔が転用されており、総計で約500点が確認されている（写真16, 17）。とくに五輪塔の地輪部分が多く転用されているが、宝篋印塔や石仏なども使われている。

その中で、五輪塔や宝篋印塔の転用石塔は、まぎれもなく日島・対馬・平戸などで確認される蓮弁式塔と完全に同じものであることを確認した。とくに宝篋印塔の笠は、上端6段下端2段で軒幅が薄く、隅飾の斜角は約12度前後、相輪においては請花の下部が複弁八葉、上部が単弁の八葉で九輪の彫り方も全く同じであった。また五輪塔においては、その種字（梵字）の刻み方や柄穴の彫り方、地輪上端をやや盛り上げる仕方など、県下で確認されるものとすべての点で完全に一致した。

ここの転用石塔は、築城の際、近在の寺院や墓地等から持ち込まれたと言われている。その中で最古の紀年銘をもったものは、延文四年（1359）銘の五輪塔地輪である。その他、14世紀半ば以降のものが確認されているが、それらはすべて日島・対馬・平戸等のものとほぼ同様の彫出内容をもっていた。

また、嘉吉三年（1443）銘興善寺宝篋印塔（兵庫県春日町、写真18）、応永三年（1396）銘廃清海寺宝篋印塔（京都府福知山市夜久野町）なども、その彫出内容はほぼ同じものであった。さらに兵庫県市島町の白毫寺には、貞治四年（1368）銘の宝篋印塔（県指定）がある。この塔は、県下の中央形式塔とはやや形態が異なり、笠の軒下を別石とし基礎の反花に対応させるため複弁の請花を造り出している。ただ基礎側面に石工藤原弘行の名が刻まれており、日島の正平廿二年（1367）銘釜崎塔とほぼ同じ時期に丹波地方を中心に藤原弘行なる石工が活躍していたことが推察される（註17）。

以上、主な調査箇所での石塔類を述べてきたが、その他京都府綾部市などでも多数同じ蓮弁式塔などが確認できた（註18）。このように、現在までの調査で明らかのように、県下の島々に建塔されてい

る中央形式塔は、ほぼ間違いなく丹波地方の関西形式塔と同じものであることがわかった。

ところで、肝心の石材の切り出し地はどこなのか、今の段階では断定できない。福知山市夜久野町には夜久野石（玄武岩）と呼ばれる石材切り出し地があるが、県下の中央形式塔は安山岩質凝灰岩が主体であるため、夜久野石とは異なる。このことから、たとえ本県の中央形式塔が丹波地方で製作されたとしても、夜久野での製作はあまり考えられない。

ただ丹波地方の蓮弁式塔の形式は、関西全域にほぼ共通する様式と考えられる。実際、和歌山県那賀郡岩出町の根来寺でも対馬・平戸・日島等の中央形式塔とほぼ同じ彫出様式をもった関西形式塔を確認した。このことから、県下の島々で建塔されている中央形式塔とくに安山岩質凝灰岩製塔は、丹波地方を中心とした関西方面で製作されたと考えた方が妥当と思われる（註19）。

以上述べた点をほぼ決定づける石塔が、五島玉之浦町島山島にある宝塔（写真4）である。この宝塔は、本県で大量に建塔されている中央形式塔と同じ安山岩質凝灰岩製で、形式上、明らかに関西での製作が考えられる。形態は、基礎の四側面に格狭間を彫出し、上端には円形の単弁反花座を造り出す。壺型の塔身は、軸部正面に扉型を造り、その内部に「正平十二年」（1357）の紀年銘を陰刻している。軸部上端の首部の下辺には縁板と勾欄を造り出す。笠は方形の四注状で、その下端には斗栱部を造る。笠上端にのる相輪は惜しいことに残欠であるが、その彫出内容は本県で確認される同石材の宝篋印塔相輪と全く同じものであり、この宝塔が他の同石材宝篋印塔と同じ製作地であることを示している。

この宝塔は、その形式より明らかに関西での製作が考えられ、これとほぼ同形態の宝塔として長福寺塔（京都市右京区）などがある（註20）。また基礎上端に円形の単弁反花座を造り出した宝塔として、鎌倉時代中期末とされる乗禅寺塔（愛媛県今治市）があるが、相輪部分の彫出内容はやや異なっている（註21）。

さらに同じ玉之浦町大宝寺には、正平二十四年（1369）銘の繁層式五重層塔（写真5）がある。この層塔も、形態より九州での地方製作とは考えられず、明らかに関西方面での製作が考えられる。

このように、とくに玉之浦町島山島の宝塔や大宝寺の五重層塔で明らかのように、本県の島々で確認される中央形式塔は、間違いなく関西で製作されたものと考えられる。

（5）中央形式塔の搬入時期とその建塔背景

現在、長崎県下の島々を中心に建塔されている中央形式塔は、先述したように全体で293基分確認している。製作年代は、花崗岩製の平戸・大渡長者五輪双塔（鎌倉時代末）を除いて1300年代後半から1400年代前半頃つまり南北朝後半から室町前期頃と考えられる。また、その製作地は、ほぼすべての中央形式塔が丹波地方を中心とする関西方面であることは先述した通りである。

以上のことから、これら中央形式塔は、遠路関西方面よりわざわざ海上輸送で搬入されたことはほぼ間違いのないものと思われる。

また、本県における中央形式塔の分布状況つまり壱岐島などいくつかの島を除くほぼすべての島々

で建塔されている状況から考えて、これら中央形式塔の大量建塔には、ある一島だけに関係する特殊な問題ではなく、建塔されたすべての島々に共通する歴史的背景があったものと考えられる。

ところで、この1300年代後半頃を中心に対馬・平戸・五島列島（日島など）などで考えられる共通した歴史的事項として「倭寇」の問題がある。とくに14世紀半ばから15世紀前半にかけて朝鮮半島沿岸部を中心に荒らしまわった倭寇の活動には、対馬・平戸などの住人が参加していたことは多くの文献で明らかである（註22）。

さて、この前期倭寇（14～15世紀の倭寇）の朝鮮半島に対する侵攻は、田中健夫氏が作成した「高麗・朝鮮における倭寇の行動回数」（末尾資料）より理解されるように高麗・忠定王につづく恭愍王の時代（1352～1374）から本格化し、次の辛禡王の治世（1375～1388）で極点に達する。そして1400年代の前半頃まで侵攻は続く（註23）。

この前期倭寇の侵攻時期は、先述したように日島・対馬・平戸等に大量に搬入されている中央形式塔の建塔時期に完全に一致する。また、その分布地は、倭寇の拠点といわれる地域にほぼあてはまる。このことから考えてみても、中央形式塔の建塔と倭寇との間には深い関係があったことが想定される。次に分布地がほぼ一致する渡来仏と中央形式塔の関係について述べてみる。

県下の島々を中心に多数確認される渡来仏は主に新羅仏や高麗仏などであるが、これら渡来仏が果たしていつ頃どういう人々によって当地に請来されたものなのか、それを追求することは非常に困難である。それは、ほとんどの渡来仏に銘文が追刻されていないためであり、たとえ銘文が刻まれていたとしても、請来にいたる経緯等について詳しく追刻したものがないためである。

そこで、他の朝鮮系梵鐘銘や金鼓銘などの内容から請来時期を想定せざるをえない。この点について九州歴史資料館の八尋和泉氏は、日本に搬入されている朝鮮系梵鐘の追銘（17口のうち10口が1376年から1394年まで）や対馬・多久頭魂神社金鼓の追銘（正平十二年、1357年）などから、1300年代半ば以降の倭寇の活動が一番活発な時期に梵鐘などと同じように請来されたのではないかとしている（註24）。

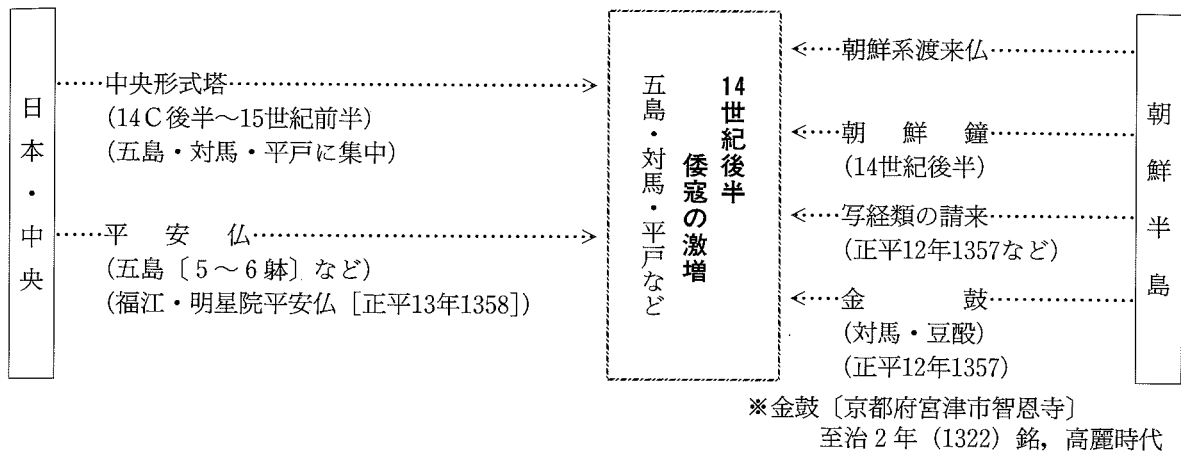
また永留久恵氏は、渡来仏が受けている火中痕に着目して、「李朝の排仏が、日本の室町時代の頃である。そこで、対馬に渡来した仏像の多くは、この朝鮮で排斥された仏たちを、請うて貰ってきたのではないか、（略）対馬だけでなく、壱岐や松浦にも高麗仏が行っている。それが倭寇の根拠地と見合うのは、倭寇といえども海賊が本業ではなく、彼らの正業は交易であり、その正体は浦々の土豪であったから、その菩提寺の仏壇にこれを据えたのではないか。」（註25）と述べられ、倭寇との関係にもふれている。

さらに大蔵経の輸入について田中健夫氏は、「康成元年（1389）から天文八年（1539）までの150年間に、日本から朝鮮に大蔵経を求めること八三回、四三部の大蔵経が渡来した。」（註26）と述べられている。

以上のことから、渡来仏などの請来についても14世紀半ば以降の朝鮮半島における倭寇の活動が想定され、倭寇を軸に朝鮮半島から渡来仏を日本の中央（関西）から石塔類をそれぞれ請来・搬入した

構図が浮かび上がってくる。

ところで、これまで述べてきた内容をまとめてみると次記の表のようになる。



つまり五島・対馬・平戸などで倭寇の活動が最も活発化する14世紀後半頃以降において、倭寇は、朝鮮半島から渡来仏・朝鮮鐘・大蔵経・金鼓などを搬入したと考えられるが、その一方で中央形式塔の大量建塔に見られるように、当地と中央(大和・山城)の間でも頻繁に海上交流を行っていたと思われる。

そこで次に、14世紀後半頃の五島・対馬・平戸などの島々と中央(関西方面)との関係について、五島玉之浦町大宝寺の梵鐘銘(写真19)を取り上げてみたい。

大宝寺梵鐘銘は、池ノ間4区と縦帯に合計233文字が陰刻されている。一区の「大日本國関西路利肥前州／五嶋珠浦弥勒山大寶寺」から始まり、四区には「應安八年歳次乙卯二月十八日／友塔書之／大工豊前小蔵 藤原顕宗／十方檀那／院主 賢仙」とあり、この梵鐘が應安八年(1375)に豊前小蔵(小倉)の藤原顕宗によって作られていることがわかる。1375年といえば、前期倭寇の活動が極点に達している時代である。

ところで、この梵鐘の大願主については、縦帯部分に「大願主播州多賀郡西林寺住僧増信」とあり、大願主増信の寺・西林寺は現在も兵庫県西脇市にある。

この梵鐘銘から、五島玉之浦と豊前(北九州市小倉)それに播州多賀郡(兵庫県西脇市)が結ばれ、14世紀後半頃の関西方面と当地をつなぐ海上交流のルートが想定される。つまり、倭寇の活動が極点に達している頃の14世紀後半頃は、倭寇集団を軸にして、当地と朝鮮半島また当地と関西方面の往来は決して驚くべきことではなく、当時あつては頻繁に行き来がなされていたものと思われる。

このことは、五島列島だけでも数艘(5～6艘)確認される平安仏(正平十三年(1358)墨書銘明星院藤原仏など)の搬入からも理解されることである。

以上のように、14世紀後半頃を中心にして倭寇集団の活動は活発化し、その産物として朝鮮半島からは渡来仏などが、また日本・関西方面からは大量の中央形式塔が請来・搬入されたものと思われ、このルートの延長線上に日島塔と同じ中央形式塔が建塔されている鹿児島県坊津町一乗院跡があつたものと考えられる。

なお、「朝鮮王朝（李朝）世宗実録」によれば、1400年代前半に朝鮮・松浦・薩摩・琉球を結ぶ海上ルートで活躍していた肥前の海商・金元珍という人物がいたことが記されている。この金元珍の行動範囲は、ここで問題にしている朝鮮系渡来仏の請来地（対馬・平戸・五島列島など）と関西製作塔の搬入地（対馬・平戸・五島列島などと鹿児島県坊津など）とほぼ一致しており、朝鮮・肥前・薩摩・琉球を結ぶ海上ルートの存在がより具体的に浮かび上がってくるものと思われる（註27）。

(6) 搬入ルート……長崎県外で見られる中央形式塔の分布と今後の課題

県下の島々で確認される中央形式塔は、長崎県を含めた九州内での製作はまず考えられない。それは形態面からだけでも言えることであるが、大部分の中央形式塔が、九州全域では石材として使用されない特殊な安山岩質凝灰岩が用いられていること、また花崗岩製塔にしても、その彫出内容や石工技術の問題また石質の点から九州内での製作でないことは明らかと考えられる。以上の点も含めて、県下の島々で確認される中央形式塔は、(4)「中央形式塔の製作地」で述べたように丹波地方を含めた関西方面での製作が考えられる。

では、その中央形式塔の搬入ルートは瀬戸内海ルートなのか日本海ルートなのか、という点が問題になる。そこで、長崎県外で確認される同時期の中央製作塔と考えられる石塔類の所在地を結ぶことで搬入ルートを割り出してみたい。ただし、調査が十分でないために結論をだせる段階でないことを最初に断っておく。今後の課題として、あえて述べる次第である。

ところで、昨年（平成6年）8月の調査で、日本海側の山口県豊北町誓念寺と油谷町二尊院で、安山岩質凝灰岩製の中央形式塔が2基分確認された。誓念寺では宝篋印塔の相輪が1点（写真20）、二尊院では五輪塔の火輪が1点（写真21）確認され、製作年代はその形態や彫出内容より14世紀後半頃（南北朝）と考えられる。これらは明らかに日島などで大量に確認される中央形式塔と全く同じものであり、またその形態や石材面から考えて現・山口県での製作ではなく日島などと同じく関西方面からの搬入塔と考えられる。とくにこの安山岩質凝灰岩は、先述したように九州や山口県などでは石材として使用されない特殊なものであるだけに、日島等への大量搬入のルートに関して、重要な示唆を与えるものと思われる。

なお、油谷町二尊院では、先述した安山岩質凝灰岩製の五輪塔火輪以外に、二尊院石塔群の中心をなす鎌倉時代後期の五輪塔（花崗岩製、写真22）が確認される。この五輪塔について、「山口県下の石造美術」の著者内田伸氏は、「この向津具の地に鎌倉時代、中央の文化をうけ入れる豪族があったということはまちがいない。」（註27）としている。

また萩市長寿寺の十三重層塔（花崗岩、鎌倉時代後期）は、もともと二尊院にあったものといわれているが、この層塔についても、内田氏は「地方作ではなく、二尊院の五輪塔と共に、中央でつくって送って来たものであろう。地方臭のないオーソドックスなもので、鎌倉後期の標準作である。」（註28）とされ、中央との関係を述べられている。

さらに下関市長府にある功山寺宝篋印塔（3基のうちの右塔、南北朝、花崗岩、写真23）について

内田氏は、「川勝政太郎氏の御教示によると、このような線形の多い中心飾のある格狭間は丹後、丹波に十八点あるのみで、他には今まで類例を知らなかったものといわれる。京都をはなれて遠く下関長府に一点あることは、山陰経由で結ばれたものであろうか。」(註29)とされ、日本海側経由による搬入を示唆している。

日本海側で確認される中央形式塔は、鳥取県でも確認される。しかもそれら中央形式塔の石材は、日島など県下の「国境をまたぐ島々」で大量に確認される安山岩質凝灰岩製である。鳥取県鳥取市景福寺では蓮弁式宝篋印塔基礎(高64センチ・横幅92センチ、写真24)が確認され、そのあり方は明らかに日島などと同じ中央製作塔と考えられる。また同じ鳥取県内では、岩見郡岩見町長安寺でも全階式の宝篋印塔(安山岩)が確認され、その彫出内容から中央製作塔と考えられる。

ところで、丹後の名刹である京都府宮津市智恩寺には、高麗・至治二年(1322)銘の金鼓1口(現・京都府立丹後郷土資料館蔵、重文、写真25)がある。銘文から至治二年に海州首陽山薬師寺のものとして製作された高麗時代の金工品であり、明らかに朝鮮半島から請来されたものである(註31)。この金鼓について、いつ頃誰によって請来されたものなのか確かなことはわかっていない。ただ江戸時代末の「丹哥府志」卷之三・與謝郡第二・九世戸の庄の項に「一、鰐口 鰐口の銘に至治二年壬戌十月十六日海州首陽山薬師寺禁口とあり、(中略)愚按ずるに至治は元英宗の年なり、至治二年は本朝の後醍醐天皇元亨二年に當る、當時本朝無頼の徒支那の海國を攻むることあり、是を倭寇と称す、蓋倭寇の取り來るものと覚ゆ。」とあり、前期倭寇との関係を伝えている(註32)。もちろんこの資料をそのまま採用することはできないが、ただ先述したように渡来仏や金鼓などの請来文物の搬入については14世紀後半頃の前期倭寇によることが想定されていることを思えば、丹後・智恩寺の金鼓も「丹哥府志」で述べられているように前期倭寇との関係が十分に考えられる。つまり日島等への中央形式塔の搬入に関係したと考えられる前期倭寇の足跡が、高麗金鼓を通じて若狭湾沿岸の丹後方面までたどることができるのではないかと考えられるのである。

以上あげた事例だけで考えれば、日本海側に位置する山口県や鳥取県で日島などと同じ石塔類が確認されると同時に、丹後・宮津市智恩寺の金鼓から前期倭寇の足跡が想定されることを考えた時、県下の島々で大量に建塔されている関西製作塔の搬入ルートは日本海側の可能性も十分ある。とくに当地にあって特殊な安山岩質凝灰岩製塔が日本海側の豊北町や鳥取市景福寺などで確認されたことは留意する必要があると思う。

ところで山口県内では、以上あげた石塔以外にも中央形式をもった五輪塔や宝篋印塔が多数確認される。これらは、先述した安山岩質凝灰岩製塔(2基分)と源久寺塔(凝灰岩)等を除きほとんどが花崗岩製であるが、代表的な塔として、先述した下関市長府の功山寺宝篋印塔(3基分、鎌倉から南北朝)、油谷町二尊院の五輪塔(伝・楊貴妃の墓、鎌倉末)、山口市吉敷の伝・大内義興宝篋印塔(南北朝)や山口市陶・正護寺の陶氏墓所(蓮弁式宝篋印塔の基礎など残欠)、山口市大内御堀の乗福寺・伝琳聖太子供養塔(10数基分の関西形式宝篋印塔の残欠)、柳井市上田の金剛寺宝篋印塔(花崗岩、建武年間)、大島郡東和町の和佐宝篋印塔(建武二年銘(1335))また宇部市東隆寺の厚東家墓所などで



写真16 京都・福知山城



写真17 京都・福知山城



写真18 兵庫・興善寺宝篋印塔



写真21 山口・二尊院五輪塔火輪



写真19 五島玉之浦町大宝寺梵鐘



写真20 山口・誓念寺相輪残欠



写真22 山口・二尊院五輪塔

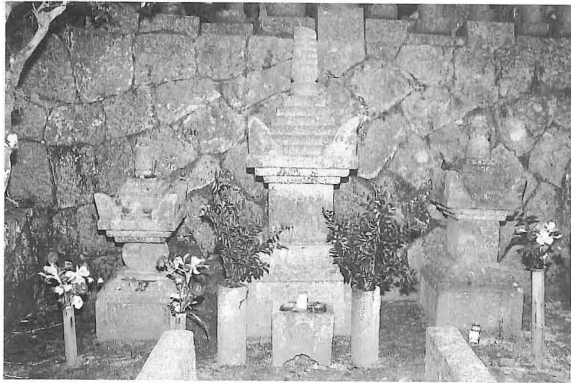


写真23 山口・功山寺宝篋印塔

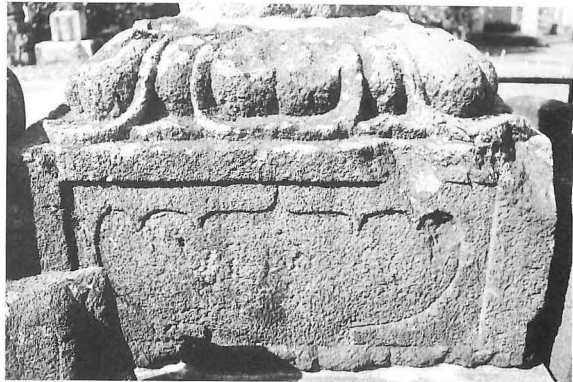


写真24 鳥取・景福寺宝篋印塔基礎



写真25 京都府宮津市智恩寺金鼓



写真26 熊本・大慈寺宝篋印塔



写真27 鹿児島・坊津一乗院跡
関西形式宝篋印塔(一部)



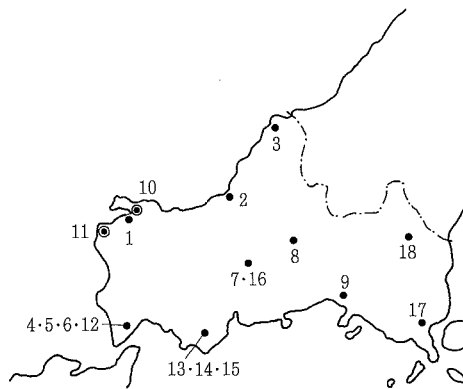
写真28 宮崎・義門寺
宝篋印塔

も中央形式塔が確認される。これらは、後述する福岡県志賀の志賀海神社塔（花崗岩製）とは異なり、中央で製作されて搬入されたものか、または中央石工による現地での製作が考えられ、中央との密接な関係が想定される。ただし、山口県内で確認される花崗岩製の中央形式塔は、長崎県内の花崗岩製塔である対馬・内院宝篋印塔（南北朝）や平戸・大渡長者五輪双塔（鎌倉末）などに通じる内容をもっており、長崎県内の島々における中央形式塔の大量搬入というあり方から考えると、山口県内の中央形式塔も中央で製作された後に搬入された可能性が高いと思われる。

例えば山口市仁保郷の源久寺宝篋印塔（鎌倉後半，凝灰岩）は確かに関西形式塔ではあるが、その基礎上端の反花などの彫出内容から、現地での製作（地方作）が考えられる。このことは、中央の影響をうけた石工により現地で製作されたことを示唆しており、そこに地方色が出てくる背景があるように思われる。

中世の石造美術は、移動困難な石を素材にするためか、現地の石材を使用した地方色豊かな遺品で占められるのが一般的である。つまり中世は、地方の個性が豊かに華開いた時代と考えられる。しかし、先述した伝・大内義興塔などの中央形式塔は、源久寺塔など極めて地方色豊かな石造文化の中にあって異質な彫出内容をもっており、その意匠に地方作の傾向を認めることはできない。

以上あげた山口県内における中央形式塔の分布地は、第3図「山口県内における中央形式塔の分布地」にあげているように、瀬戸内海側（柳井市，宇部市，山口市，下関市長府，大島など）と日本海側（油谷町，豊北町，萩市）に分かれるが、ただ特殊な石材である安山岩質凝灰岩製塔は日本海側でのみ確認される。この安山岩質凝灰岩製塔が、長崎県内の島々で244基分（中央形式塔全体の約83%）確認されることを考えれば、日本海側の海上



第3図「山口県における主な中央形式塔の分布地」

	種目と所在地	時代
1	二尊院五輪塔 (油谷町・花崗岩)	鎌倉時代
2	長寿寺十三重層塔 (萩市・花崗岩)	
3	中津宝篋印塔 (須佐町・花崗岩)	
4	功山寺宝篋印塔 中央塔 (下関市長府・花崗岩)	
5	笑山寺十三重層塔 (下関長府・花崗岩)	
6	専念寺五輪塔 (下関市南部・花崗岩)	
7	平野五輪塔 (山口市平川・花崗岩)	
8	法光寺十三重層塔 (佐波郡・花崗岩)	
9	慈福寺宝篋印塔 (徳山市・花崗岩)	
10	二尊院五輪塔(火輪残欠) (油谷町・安山岩質凝灰岩)	南北朝時代
11	誓念寺宝篋印塔(相輪残欠) (豊北町・安山岩質凝灰岩)	
12	功山寺宝篋印塔(左塔・右塔) (下関市長府・花崗岩)	
13	東隆寺五輪塔 (宇部市・花崗岩)	
14	東隆寺宝篋印塔 (宇部市・花崗岩)	
15	浄名寺五輪塔 (宇部市・花崗岩)	
16	陵雲寺宝篋印塔 (山口市・花崗岩)	
17	金剛寺宝篋印塔 (柳井市・花崗岩)	
18	寺原宝篋印塔 (美和町・花崗岩)	

◎は安山岩質凝灰岩，●は花崗岩を示す。

資料6 長崎（九州）・山口両県に見られる主な中央形式塔分類表

	長 崎 県	九州（長崎県を除く）	山 口 県
鎌倉時代	大渡長者五輪双塔（2基） （平戸市・花崗岩）	大慈寺宝篋印双塔〔熊本〕 （熊本市・花崗岩） 大慈寺十三重層塔〔熊本〕 （熊本市・花崗岩）	二尊院五輪塔 （油谷町・花崗岩） 長寿寺十三重層塔 （萩市・花崗岩） 中津宝篋印塔 （須佐町・花崗岩） 功山寺宝篋印塔〔中央塔〕 （下関市長府・花崗岩） 笑山寺十三重層塔 （下関市長府・花崗岩） 専念寺五輪塔 （下関市南部・花崗岩） 平野五輪塔 （山口市平川・花崗岩） 法光寺十三重層塔 （佐波郡・花崗岩） 慈福寺宝篋印塔 （徳山市・花崗岩）
南北朝時代	日島とその周辺（若松町） ・花崗岩製五輪塔14基分 ・安山岩質凝灰岩製五輪塔35基分 ・安山岩質凝灰岩製宝篋印塔19基分 上五島町奈麻 ・安山岩質凝灰岩製五輪塔1基分 平戸島 ・花崗岩製五輪塔11基分 ・安山岩質凝灰岩製五輪塔31基分 ・安山岩質凝灰岩製宝篋印塔26基分 対馬 ・花崗岩製五輪塔13基分 ・花崗岩製宝篋印塔4基分 ・安山岩質凝灰岩製五輪塔57基分 ・安山岩質凝灰岩製宝篋印塔34基分 生月島 ・花崗岩製五輪塔1基分 ・安山岩質凝灰岩製五輪塔16基分 ・安山岩質凝灰岩製宝篋印塔1基分 度島 ・安山岩質凝灰岩製五輪塔1基分 的山大島 ・安山岩質凝灰岩製五輪塔3基分 ・安山岩質凝灰岩製宝篋印塔4基分 鷹島 ・安山岩質凝灰岩製五輪塔4基分 ・安山岩質凝灰岩製宝篋印塔1基分 護舜寺（松浦・調川） ・安山岩質凝灰岩製宝篋印塔1基分 山本基地（宇久島） ・花崗岩製五輪塔1基分 小値賀島 ・花崗岩製五輪塔1基分 ・安山岩質凝灰岩製五輪塔2基分 ・安山岩質凝灰岩製宝篋印塔1基分 野崎島（小値賀町） ・安山岩質凝灰岩製宝篋印塔4基分 玉之浦 ・安山岩質凝灰岩製宝塔1基 ・安山岩質凝灰岩製層塔1基 ・安山岩質凝灰岩製五輪塔2基分 ・安山岩質凝灰岩製宝篋印塔2基分 ・花崗岩製五輪塔1基分	一乗院跡宝篋印塔など（7基分） ・鹿児島県坊津町 ・安山岩質凝灰岩製	二尊院五輪塔（火輪残欠） （油谷町・安山岩質凝灰岩） 誓念寺宝篋印塔（相輪残欠） （豊北町・安山岩質凝灰岩） 功山寺宝篋印塔（左塔・右塔） （下関市長府・花崗岩） 東隆寺五輪塔 （宇部市・花崗岩） 東隆寺宝篋印塔 （宇部市・花崗岩） 浄名寺五輪塔 （宇部市・花崗岩） 陵雲寺宝篋印塔 （山口市・花崗岩） 金剛寺宝篋印塔 （柳井市・花崗岩） 寺原宝篋印塔 （美和町・花崗岩）

（主な参考資料）内田伸著「山口県の石造美術」など。

ルートの可能性が高いように思われる。

以上の点は、今の段階ではまだ推論の域をでないためここでの結論はさげたいと思うが、14世紀後半頃の中央形式塔のあり方から考えると、長崎県の島々における中央形式塔（倭寇）と山口県内にみられる中央形式塔（主に大内氏）との間に共通した部分が多く、両者の間になんらかの密接な関係があったことも想定されるのではないかとと思われる。ただこの問題は重要な内容を含んでおり、ここでこのこれ以上の言及はさけて今後の課題としたい。

次に九州内では、先述したように熊本県で中央形式の宝篋印塔が2基（写真26）と十三重層塔1基が確認される。これらの塔は熊本市野田町の大慈寺にあるもので、宝篋印塔2基の形式は蓮弁式塔ではなく基礎上端を2段にした全階式である。ただ、その彫出内容（とくに基礎四面に近江文様を彫出）や石材（花崗岩）からみて中央製作塔の可能性が高く、製作時期は形態より鎌倉時代末頃と考えられる。平戸・大渡長者五輪双塔とほぼ同時期の搬入の可能性もある。

また鹿児島県坊津町一乗院跡石塔群でも関西形式宝篋印塔と五輪塔が7基分確認され、それらの石材はすべて日島などの中央形式塔と同じ安山岩質凝灰岩である（写真27、資料7参照）。彫出内容や石材から考えて、一乗院跡の塔も中央製作塔であろうことはほぼ間違いなく、日島などと同じ時期に関西方面より搬入されたものと考えられる。

さらに宮崎県国富町の義門寺宝篋印塔（写真28、資料8参照）は花崗岩製の蓮弁式塔であり、基礎四面には近江文様が彫出されている。彫出内容や石材などからみて製作時期は南北朝時代と考えられるが、この義門寺塔も関西製作の可能性が高い。「九州の石塔」の著者・多田隈豊秋氏も「恐らく関西地方で造塔されたものを移入したのであろう」と述べられ、関西製作を示唆している（註33）。

ところで、福岡市東区志賀町の志賀海神社による花崗岩製の宝篋印塔（南北朝）や宗像郡さらには太宰府観世音寺などで確認される宝篋印塔は中央形式の蓮弁式塔であるが、本県の島々や山口県内で確認される中央形式塔とはその彫出内容に違いが見られる。とくに基礎高に対する反花の背高が高く、その分反花全体が下方に垂直に垂れて蓮弁のふくらみが弱い点や八角に造られた相輪伏鉢部分など微細な彫出の仕方は明らかに異なっている。当然この志賀海神社塔の全体の塔形は、反花部分の背が高い分細身となって安定感に欠ける印象を受ける。以上の点から、この志賀海神社塔は、中央の影響を受けた人物による現地または瀬戸内海地方の製作の可能性も充分考慮する必要があり、中央製作塔としては疑問が残る。先述したように、因島石塔群と同じ石工系譜につながるようにも考えられる。

なにはともあれ、以上述べた各点をまとめると、関西方面から当地への大量搬入の海上ルートは、中央形式塔の大部分を占める安山岩質凝灰岩製塔に関しては、若狭湾から主に鳥取・山口県を通る日本海ルートの可能性が高い。また花崗岩製塔に関しては、山口県内の瀬戸内海側でも確認されることから、瀬戸内海側からの搬入も考えられる。さらにその関西方面からの海上ルートは、県下の島々を通り抜けて熊本県から鹿児島県までのびていたことが想定される（第4図「中央製作塔の分布地とその製作地」参照）。

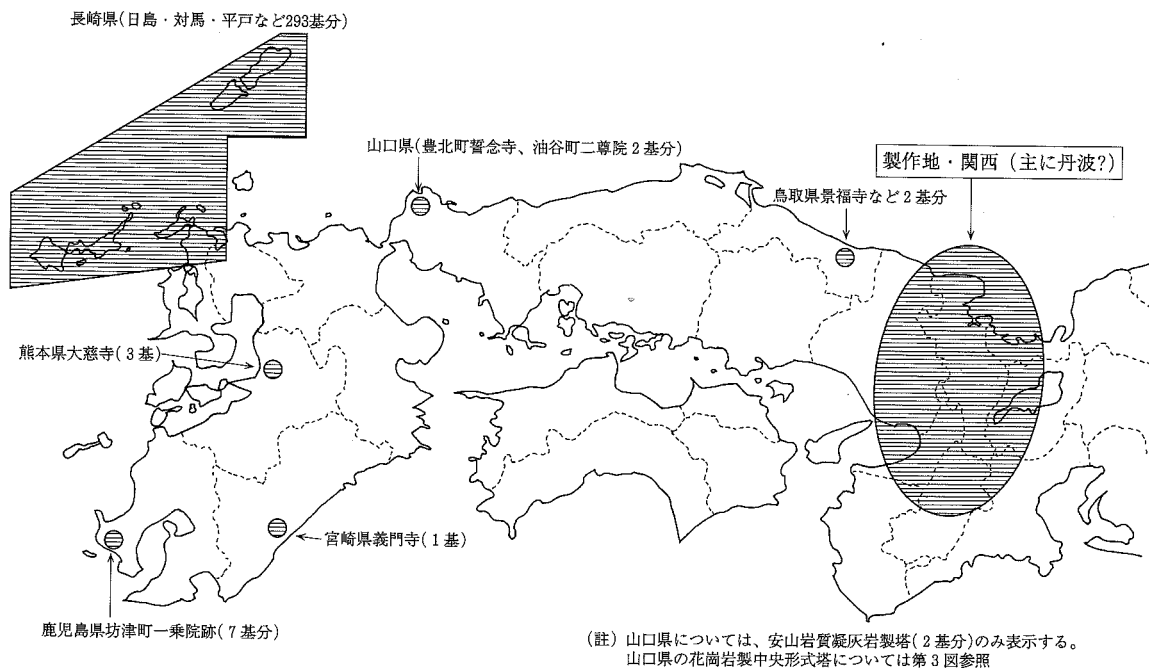
次に製作時代で整理してみると、鎌倉時代の中央形式塔として、山口県内では、油谷町二尊院五輪

塔や萩市長寿寺の十三重層塔、佐波郡徳地町の法光寺十三重層塔、下関市長府の笑山寺十三重層塔、下関市長府の功山寺宝篋印塔、徳山市久米の慈福寺宝篋印塔など多数確認されるが、長崎県内では平戸市の大渡長者五輪双塔、熊本県では野田町大慈寺の宝篋印塔（2基）と十三重層塔があげられる程度で基数は少ない。またこの鎌倉期の中央形式塔はすべて花崗岩製であり、その彫出内容は高度である。

これに対し、次の南北朝時代になると、俄然長崎県の日島や対馬・平戸島を中心とした国境をまたぐ島々で大量に中央形式塔が確認される。その基数は九州全域はもちろんのこと山口県全域の中央形式塔の基数を大幅にうまわる数であり、そこに先述した14世紀から15世紀の前期倭寇の活動という歴史的背景が想定されるのである（資料6「長崎（九州）・山口両県にみられる主な中央形式塔分類表」参照）。また石材は、花崗岩製塔が激減して安山岩質凝灰岩製塔がほとんどを占めていることから、花崗岩製塔に比べ安価な石塔の大量搬入が考えられる。

今後、九州を含めた西日本全域の調査を行い、各地に見られる14世紀後半頃の中央形式塔の分布地と石質・彫出内容等をより正確に位置づけることにより、搬入ルートの具体的な結論を出したいと考えている。

第4図 中央製作塔の分布地とその製作地



資料7 坊津・一乗院跡中央形式塔一覧（鹿児島県）

【種目・基数】

石 材	種 目	基 数	備 考
安山岩質凝灰岩 【計7基分】 ・宝篋印塔5基分 ・五輪塔2基分	宝篋印塔		基礎上端に反花を造り出した関西形式塔。基礎で、正面のみに格狭間を彫出しているもの1点、3面に彫出しているもの4点。 笠は、下端2段・上端6段。
	基 礎	5 点	
	笠 相	2 点 1 点	
	五輪塔		地輪正面に「ア」の種字彫出。 地輪と火輪の大きさが明らかに異なるため、五輪塔は2基分とする。
	地 輪	1 点	
火 輪	1 点		

●製作時期は、主に14世紀後半～15世紀前半頃と考えられる。とくに格狭間が葉状に彫出された基礎1点（格狭間に「妙椿」銘陰刻基礎）は、15世紀前半頃と考える。

【銘文】

種目	宝篋印塔 基礎（格狭間内）	宝篋印塔 基礎（格狭間内）
銘文	玄	妙
	修 沈 逆	椿

【主な種目の法量】……（註）単位センチ。損壊あれど、すべて現在の法量で示す。

①〔宝篋印塔基礎〕

基 礎 名	下端幅	総背高	背高(反花部分除く)	反花背高	反花背高/総背高	蓮肉高	上端幅
玄沈基礎	25.1	20.5	14.5	5.0	0.24	1.0	15.0
妙椿基礎	25.5	20.5	13.0	5.7	0.28	1.8	15.5
基礎 A	21.0	17.5	11.0	5.5	0.31	1.0	14.4
基礎 B	21.0	17.5	11.0	5.5	0.31	1.0	14.4

②〔宝篋印塔笠〕

笠名	総高	下端1段幅・厚	下端2段幅	軒幅	軒厚	上端1段厚	2段厚	3段厚	4段厚	5段厚	6段厚	最上端幅	隅飾高	隅飾幅
笠A	17.0	14.2・2.0	2.0	21.5	2.4	1.5	1.5	1.6	1.7	1.6	1.5	9.5	5.4	6.5
笠B	14.5	11.5・1.7	1.8	18.0	2.0	1.5	1.4	1.8	2.0	2.0	1.9	8.0	7.0	5.6

③〔宝篋印塔相輪〕……九輪部分の6輪途中で損壊

現 総 高	伏鉢下端幅	伏鉢高	下部請花高	現存九輪高	柄 高
16.2	8.0	6.2	3.0	7.0	1.5

④〔五輪塔火輪〕

総 背 高	軒 幅	軒中央厚	軒 端 厚	上 端 幅	柄穴直径	柄穴深さ
14.5	23.0	4.5	4.2	9.3	6.5	4.7

⑤〔五輪塔地輪〕

背 高	下 端 幅	上 端 幅	下端盛り上がり	上端盛り上がり	柄穴直径	柄穴深さ
21.0	27.0	27.5	1.0	2.0	6.7	3.5

資料 8 義門寺宝篋印塔

- ・宮崎県国富町義門寺
- ・石材 花崗岩
- ・形式 関西形式
- ・特徴 蓮弁式塔で、基礎格狭間内に近江文様を彫出。笠は下端2段上端6段。
- ・製作年代 形態より南北朝時代(1350年前後頃)
- ・法量 現総高 155.1センチ 最大横幅(基礎) 64.2センチ

〔基礎〕	基礎横幅	基礎高(反花部分除く)	反花高	蓮肉高	端横幅	反花高/基礎総高
	64.2	36.4	10.0	1.3	39.2	0.27

〔塔身〕	塔身横幅	塔身背高
	33.0	31.2

〔笠〕	笠総高	軒横幅	軒厚	下端1段幅・高	2段幅・高	上端1段幅・高	2段幅・高
	38.0	56.4	5.4	39.2・4.2	48.0・3.4	19.0・4.2	24.0・4.4
	3段幅・高	4段幅・高	5段下端幅・上端幅・高	6段下端幅・上端幅・高	隅飾幅	隅飾高	
	29.0・4.4	32.4・4.0	27.0・26.4・4.0	21.4・20.2・4.0	18.0	20.0	

〔相輪〕・・・九輪までの残欠

相輪現総高	伏鉢下端幅・上端幅・高	下部請花上端幅・高	九輪下端幅・上端幅・現九輪高
49.5	19.0・16.0・4.0	21.0・6.5	17.0・14.0・39.0

4) 〈国境をまたぐ島々〉の特異性……結語にかえて

最近、五島・対馬・平戸・壱岐などの島々が、あらたに注目を浴びている。それは単なる地方史的な意味ではなく、アジア史的な広い意味での注目である。

五島・対馬などは、いうまでもなく中国・朝鮮半島と日本列島とのはざまに浮かぶ島々であり、有史以前より交流の舞台をなす飛石の地として重要な役割を果たしてきた。

しかし、最近注目されてきた点は、これまでのような単なる文物の行き交う通路としての役割ではなく、対馬・五島などの〈国境をまたぐ島々〉を一つの世界にとらえ、その社会がもつ特異なあり方にあらたな世界観を見いだそうとする考えである。

昨年刊行された村井章介氏の「中世倭人伝」(岩波新書)は、そのような日本・朝鮮・中国のはざまに生きる人々を〈マージナルマン〉と呼び、「かれらが身におびる特徴は、なかば日本、なかば朝鮮、なかば中国といったあいまいな(マージナルな)もの」(註34)という。

村井氏は、このような考えを、主に「朝鮮王朝実録」を史料としてひきだしているが、〈国境をまたぐ島々〉のもつ特異性は、渡来仏をはじめとするいろいろな搬入物からも読みとることができる。

渡来仏については九州歴史資料館の八尋和泉氏により調査・研究がなされているが、先述したように渡来仏は十四世紀後半頃の前期倭寇が最も活動した時代に搬入されたのではないかとされている(「大陸渡来文物緊急調査報告書」県教委, 1992年)。

ところで、この朝鮮系渡来仏は、対馬などの主に〈国境をまたぐ島々〉で大量に受け入れられたの

に対して、日本本土とくにその中心地である京都などではほとんど受け入れられなかったという。その理由として八尋氏は、朝鮮系渡来仏のもつ独特の形態は、平安仏的イメージをもった日本人の仏像観にはそぐわないものがあり、見方によっては異様な感じさえ受けるからではないかという。

一方、これらの島々では、渡来仏と一緒に、畿内から直接もたらされたと思われる純日本的な平安仏も受け入れているという。

このような異質な渡来仏と平安仏を同時に受け入れるという態度は、同じ対馬や平戸・五島を中心に建塔されている中世・石塔類のあり方からも推察される。

これらの島々では、先述したように主に1300年代後半頃に関西で製作されたと考えられる石塔類(五輪塔など)が大量に運ばれ建塔されているが、この石塔群を建塔した人々は、実は朝鮮半島から仏像を搬入した人々(14~15世紀の前期倭寇)であった可能性が高い。つまりこのことは、日本でのみ石塔化された純国産の五輪塔などを、日本的でない朝鮮系渡来仏の請来に深く関わった人々が建塔したことを示唆しており、純日本的なものとはそうでないものを同時に受け入れるというマージナルな関係が、ここでも読みとることができると思う。〈国境をまたぐ島々〉のもつ独特の世界観は、一枚岩的な価値観で縛られる国家・民族からは異質な世界と映り警戒の対象となるが、そこにある多様な価値観こそは自由で開放的なエネルギーを生み出す源泉である。

国家という実態はないが、どことなく異国的な世界……かつての〈国境をまたぐ島々〉は、一つの考えに縛られることのない多様な価値観を内包しながら、複層的な文化をもった独特の世界を形成していたように思われる。

※本稿は、平戸市史編纂室の了解のもと、「平戸市史」(自然・考古編、1995年)に収録されている「平戸の中世・石造美術(その1)」をベースに、五島・日島編として書き改めたものである。

なお、末筆ながら本稿を草する過程でいろいろ御教示いただきました柴田恵司長崎大学名誉教授、瀬野精一郎早稲田大学教授、畑地正憲山口大学教授、小田富士雄福岡大学教授、外山幹夫長崎大学教授、九州歴史資料館八尋和泉氏、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長松下孝幸氏、若松町教育委員会(代表・江頭重男教育長)、若松町文化財委員長近藤章氏、東彼杵町歴史民俗資料館館長満井録郎氏、大村史談会会長梅田和郎氏、対馬在住の永留久恵氏、長崎県教育庁文化課安楽勉氏、京都・福知山市郷土資料館(館長塩見行雄氏)、平戸市史編纂室(代表・萩原博文氏)、小値賀町教育委員会塚原博氏、玉之浦町教育委員会西村正一氏、松浦市教育委員会中田敦之氏、鷹島歴史顕彰会(代表・有浦和昭氏)、宇久在住の瀬尾泰平氏、宇久町教育委員会、生月町教育委員会、大島村教育委員会米村伍則氏、山口県教育委員会文化課(山口県文化財愛護協会)、鹿児島県坊津町歴史民俗資料館、坊津町在住の佐藤順二氏、佐賀県立名護屋城博物館本多美穂氏、京都府立丹後郷土資料館(資料課長井之本泰氏)、智恩寺(京都府宮津市)、観興寺(京都府福知山市)、興善寺(兵庫県春日町)、白毫寺(兵庫県市島町)、景福寺(鳥取県鳥取市)、金蓮寺(広島県因島市)、二尊院(山口県油谷町)、誓念寺(山口県豊北町)、功山寺(山口県下関市)、大慈寺(熊本県野田町)、大宝寺(五島・玉之浦町)、極楽寺(五

島・若松町), 延命寺(平戸市津吉町), その他関係各位の皆様に厚くお礼申し上げます。また県立大村高等学校阪口和則先生には, お忙しい中, 石材分析のためプレパラートまで作成していただきました。厚くお礼申し上げます。

補 註

- (註1) 青方文書「関東使者義首座注進状案」(1975年「史料纂集『青方文書』第一」
《統群書類従完成会》65頁)
- (註2) 大石一久 1987「地方における中世石塔造立階層の問題について」(『史迹と美術』第572号), 1992「中世石塔類における長崎県の主な特徴について」(『大村史談』第42号) 参照
- (註3) 大石一久 1995「永仁五年銘川棚・緑泥五輪塔について」(『大村史談』第44号) 参照
- (註4) 1520年代から40年代にかけて, 地輪上端に反花を造り出し, 縦蓮子彫出の首部をもった水輪, 露盤付き火輪など石工技術の高い装飾豊かな緑泥五輪塔がでてくる。その代表的な塔が, 大永3年(1523)銘の純伊地輪(大村市立資料館展示)である。
- (註5) 下川達彌 1974「滑石製石鍋考」(長崎県立美術博物館紀要2)。壱岐鉢形嶺経塚出土の延久3年銘石造弥勒如来坐像については, 村井康彦編・1980「年表日本歴史第2巻平安」(筑摩書房)18頁参照。
- (註6) 1980 東脊振村文化財調査報告書第4集「霊仙寺跡」(佐賀県東脊振村文化財研究会)参照
- (註7) 1983「京塚遺跡」(芦辺町文化財調査報告書第1集)参照
- (註8) 大石 1989, 1990「対馬の中世・石造美術(その1・その2)」(「対馬の自然と文化」第17集, 18集)参照
- (註9) 大石前掲書「対馬の中世・石造美術(その1・その2)」, 大石 1994「県下に見られる関西形式宝篋印塔の分布について」(『長崎県の考古学』)参照
- (註10) 橋本幸男氏は, その著「壱岐島における永仁2(1294)年の地震説話について」(『島の科学』31号, 1994)の中で, 元禄13年の地震が中世石塔類の残存に影響を与えているのではないかとしている。ただ室町期の石塔や, とくに16世紀後半から江戸初期頃にかけて壱岐で製作される石塔は, 完形また残欠として比較的よく残っている。地震の影響が中世石造物の残存に全くなかったとは言いきれないが, 残欠としても全く確認されない中央形式塔は, もともと建塔されていなかったのではと考えるのが, 現在の状況では一番妥当と思われる。ただ, 壱岐島の調査はまだ不十分なため, この問題は今後慎重に検討すべき事項と思われる。
- (註11) 「三島倭寇」については1980「長崎県史(古代・中世編)」三秀舎 509頁, 「李朝定宗実録」巻一 元年5月乙酉条。「三島倭寇」の「三島」を対馬・壱岐・松浦地方の総称とするものとして, 中村栄孝「日鮮関係史の研究(上)」吉川弘文館 160~162頁, 宮田登「国境の民俗文化」(「玄界灘の島々」小学館1990年)13~14頁など。
- (註12) 長崎県教育委員会 1992「大陸渡来文物緊急調査報告書」など参照
- (註13) 永留久恵 1978「対馬の文化財」杉原書店 239~244頁参照
- (註14) 黒崎釈迦堂の銅造如来形座像(高麗時代後半), 華光寺銅造菩薩座像(高麗時代後期)などがある。前掲書「大陸渡来文物緊急調査報告書」「長崎県の文化財」(長崎県教育委員会)参照。
- (註15) 前掲書「長崎県史(古代・中世編)」509~510頁参照
- (註16) 福知山城の築城については, 天正七年の明智光秀築城説と慶長五年(1600)有馬豊氏による築城説がある(「福知山市史」第二巻, 「福知山城の石垣」福知山市郷土資料館)。
- (註17) 川勝政太郎「大原大長瀬町と福知山観興禅寺の宝篋印塔」(「史迹と美術」第400号), 奥谷高史

1975「丹波古銘誌」綜芸舎

- (註18) 綾部市楞嚴寺宝篋印塔(永正八年, 1511), 福知山市觀興寺宝篋印塔, 和知町升谷宝篋印塔など
- (註19) 花崗岩を石材とした対馬内院宝篋印塔について, 篠原良吉氏は, 「(石質が) やや白っぽいことなどから瀬戸内海系の花崗岩とみたい」(「日本海側の近江式装飾文をもつ石塔」歴史考古学23号 平成元年四月号) と述べられている。
- (註20) 川勝政太郎 1981「新版 石造美術」誠文堂新光社109~110頁参照
- (註21) 断定はできないが, この乗禅寺宝塔も, その形式より関西方面で製作されたものではないかと考えている。
- (註22) 前掲書「長崎県史」509~512頁, 「李朝太祖実録」(卷八, 四年七月辛丑条), 「李朝定宗実録」(卷一, 元年五月乙酉条) など。
- (註23) 前掲書「長崎県史」493~512頁。田中健夫 1966「倭寇と勘合貿易」至文堂。倭寇の行動回数表については, 田中健夫著「倭寇一海の歴史」(1982, 教育社) による。
- (註24) 前掲書「大陸渡来文物緊急調査報告書」30~32頁
- (註25) 前掲書「対馬の文化財」244頁
- (註26) 田中健夫 1982「倭寇」教育社 98頁
- (註27) 「李朝実録」(卷19・5年3月乙酉条, 卷22・5年12月乙卯条など), 前掲書「倭寇」(教育社) 86頁, 村井章介1994「中世倭人伝」岩波書店37頁参照。
- (註28) 内田伸「山口県下の石造美術(一)」(山口県文化財第2号) 34頁
- (註29) 内田伸「山口県下の石造美術(二)」(山口県文化財第3号) 39頁
- (註30) 前掲書「山口県下の石造美術(一)」39頁
- (註31) 1980「特別展図録 丹後の仏教文化」(京都府立丹後郷土資料館) 70頁など参照
- (註32) 1972丹後史料叢書第六輯「丹哥府志」174頁参照。
- (註33) 多田隈豊秋1978「九州の石塔(下巻)」西日本文化協会222頁参照。
- (註34) 前掲書「中世倭人伝」4頁参照。

〔高麗・朝鮮における倭寇の行動回数〕——田中健夫著「倭寇」(教育社) より1350年から1424年までを引用。

西暦	日本年号	高麗王年	行動回数
1350	観応元年	忠定王	6
1351	文和元年	恭愍王	4
1352	文和二年	恭愍王	1
1353	文和三年	恭愍王	7
1354	文和四年	恭愍王	4
1355	延文元年	恭愍王	6
1356	延文二年	恭愍王	4
1357	延文三年	恭愍王	5
1358	延文四年	恭愍王	3
1359	康安元年	恭愍王	1
1360	康安二年	恭愍王	5
1361	康安三年	恭愍王	4
1362	康安四年	恭愍王	3
1363	康安五年	恭愍王	1
1364	貞治元年	恭愍王	3
1365	貞治二年	恭愍王	10
1366	貞治三年	恭愍王	3
1367	貞治四年	恭愍王	1
1368	貞治五年	恭愍王	1
1369	貞治六年	恭愍王	1
1370	貞治七年	恭愍王	1
1371	貞治八年	恭愍王	2
1372	貞治九年	恭愍王	1
1373	貞治十年	恭愍王	3
1374	貞治十一年	恭愍王	1
1375	貞治十二年	恭愍王	7
1376	貞治十三年	恭愍王	12
1377	貞治十四年	恭愍王	19
1378	貞治十五年	恭愍王	15
1379	貞治十六年	恭愍王	22
1380	貞治十七年	恭愍王	12
1381	貞治十八年	恭愍王	17
1382	貞治十九年	恭愍王	15
1383	貞治二十年	恭愍王	22
1384	貞治二十一年	恭愍王	29
1385	貞治二十二年	恭愍王	12
1386	貞治二十三年	恭愍王	24
1387	貞治二十四年	恭愍王	12
1388	貞治二十五年	恭愍王	19
1389	貞治二十六年	恭愍王	17
1390	貞治二十七年	恭愍王	15
1391	貞治二十八年	恭愍王	22
1392	貞治二十九年	恭愍王	12
1393	貞治三十年	恭愍王	17
1394	貞治三十一年	恭愍王	15
1395	貞治三十二年	恭愍王	22
1396	貞治三十三年	恭愍王	12
1397	貞治三十四年	恭愍王	17
1398	貞治三十五年	恭愍王	15
1399	貞治三十六年	恭愍王	22
1400	貞治三十七年	恭愍王	12
1401	貞治三十八年	恭愍王	17
1402	貞治三十九年	恭愍王	15
1403	貞治四十年	恭愍王	22
1404	貞治四十一年	恭愍王	12
1405	貞治四十二年	恭愍王	17
1406	貞治四十三年	恭愍王	15
1407	貞治四十四年	恭愍王	22
1408	貞治四十五年	恭愍王	12
1409	貞治四十六年	恭愍王	17
1410	貞治四十七年	恭愍王	15
1411	貞治四十八年	恭愍王	22
1412	貞治四十九年	恭愍王	12
1413	貞治五十年	恭愍王	17
1414	貞治五十一年	恭愍王	15
1415	貞治五十二年	恭愍王	22
1416	貞治五十三年	恭愍王	12
1417	貞治五十四年	恭愍王	17
1418	貞治五十五年	恭愍王	15
1419	貞治五十六年	恭愍王	22
1420	貞治五十七年	恭愍王	12
1421	貞治五十八年	恭愍王	17
1422	貞治五十九年	恭愍王	15
1423	貞治六十年	恭愍王	22
1424	貞治六十一年	恭愍王	12

〔追加資料〕

1) 今福参集殿横墓地石塔群 (松浦市今福町)

〔中央形式塔〕……合計 4 基分, 製作年代は1300年代後半～1400年代前半頃

安山岩質凝灰岩	五輪塔		<ul style="list-style-type: none"> ・地輪と水輪は右の墓地にあり。 ・地輪の正面には「ア」の種字陰刻。上端は素面で柄穴なし。 ・水輪は壺型で種字なしの素面。下端に柄あり。柄や種字の有無で水輪と地輪は別物。 ・火輪は, 他の地輪・水輪に比べ小型で明らかに別物。五輪塔合計基数 3 基分
	地輪	1 点	
	水輪	1 点	
	火輪	1 点	
花崗岩	五輪塔		<ul style="list-style-type: none"> ・壺型。風化が激しいため断定はできないが, 表面には種字の陰刻はなく素面と考えられる。
	水輪	1 点	

※その他, 佐賀型安山岩製塔が10数基分確認される。1400年代中ごろまで遡れる宝篋印塔が数点 (2 基分?), 他の大部分は1500年代後半から1600年代前半頃の宝篋印塔と五輪塔である。また, 六地藏塔が 2 基分確認される。

2) 金福寺宇久八代覚の墓 (五島・岐宿町)

〔中央形式塔〕……五輪塔 2 基分, 製作年代は1300年代後半～1400年代前半頃

花崗岩	五輪塔	1 点	<ul style="list-style-type: none"> ・ほぼ球形。風化が激しいため断定はできないが, 表面には種字の陰刻はなく素面と考えられる。 ・下端幅 (9.5センチ), 上端幅 (10センチ) 最大幅 (23センチ), 高さ (19センチ)
	水輪		
	風・空輪	2 点	<ul style="list-style-type: none"> ・大の方 (最大高23.5センチ) には, 五輪塔四方種字 (キャ・カ) が陰刻。 ・小の方 (最大高18.5センチ) は素面。 ・小の風・空輪は, 大きさからみて水輪と一体のものと考えられるため, 合計基数は 2 基分とする。

※右塔・左塔ともに寄せ集め。

※右塔の水輪と風・空輪は中央形式塔であるが, 火輪と地輪はともに江戸時代製作のもの。とくに火輪は佐賀型の安山岩製であり, 江戸時代前半以降のものである。また一番下の反花座も, 地輪同様現地製作の江戸時代以降のもの。

※左塔の風・空輪は中央形式塔であるが, 笠は安山岩製で1500年代前後の佐賀型宝篋印塔の笠である。その他は現地製作の江戸時代以降のものである。

※当塔は, 宇久八代覚 (さとり) の墓と伝えられている。覚公は1388年 (嘉慶二) に逝去したとなっており, 中央形式塔の製作年代とほぼ一致する。

※覚公の墓後方の墓域に凝灰岩製の五輪塔火輪が 1 点確認される。法量は下記の通り。

軒幅 (36.0), 軒厚 (中央・6.0, 端7.5), 軒下端中央と両端の傾斜幅 (1.5), 上端幅 (16.0), 上端柄穴幅 (8.5), 柄穴深さ (4.5), 火輪背高 (21.0)

この火輪は、軒下端がゆるやかな弧を描く形態や彫出の仕方、またその石材 (凝灰岩) などから、明らかに九州内 (佐賀県または熊本県の可能性が高い) の製作であり、1300年代前半 (鎌倉時代後期から南北朝前期) 頃の製作と考えられる。同じものは、五島若松町の日島などでも確認される。中央形式塔と同所で凝灰岩製塔が確認される点は、先述した日島や当地の歴史を考える上で重要な示唆を与えるものと思われる。つまり石造美術上からは、日島や当地は、最初九州内の地方文化を享受した勢力があり、その後数十年の間隔をおいて中央形式塔を搬入した勢力の存在が指摘できる。ただし、その勢力が当地出身の勢力か九州本土から移動した勢力かは、中世において石塔製作ができなかった地域 (島) のもつ性格上、断定することは不可能である。

3) 一部戸ノ川 (生月島)

〔中央形式塔〕 ……合計 3 基分、製作年代は1300年代後半～1400年代前半頃

安山岩質凝灰岩	五輪塔 水 輪 風・空輪	2 点 2 点	・水輪, 風・空輪ともに, 他の中央形式の五輪塔と同形態。
	宝篋印塔 塔 身	1 点	・塔身 4 面に金剛界四仏種字を陰刻。

●戸ノ川の中央形式塔 3 基分を加え、生月島全体の中央形式塔基数は21基分となる。

若松町内の古石塔群

若松町文化財保護審議会委員長 近藤 章

町内には数多くの石塔類が見うけられる。五島列島の中でも数の多さでは他町より多く群を抜いている。その背景には山王山に見られる信仰の対象としての霊山の存在や、複雑な入江を有する地理的な要因が考えられる。ここでは町内に所在する中世の石塔について紹介したい。

所在地 荒川郷字割子藤原与左衛門敷地内

種類 関西形式宝篋印塔1基

内容 山王山の西麓、現海岸からわずかに奥まった所に1基だけ存する。

この地一帯は寛文年間の大水害により、被害が甚大で墓地の石塔群は悉く流失されたものと思われる。志佐氏一族のものであろうか。この宝篋印塔のみが沢下の敷地内に埋没していたものを掘り上げて祀られていた。塔身の部分が欠失していたが、近年になり下段写真のように復原されている。



図版43 荒川郷割子宝篋印塔

寺屋敷跡石塔群

所在地 荒川郷本倉

種類 宝篋印塔 五輪塔

内容 鎌倉時代に第2次的に起こったとされている山王権現を祀るところに天台宗の寺院があり、天台寺院のあるところには山王権現を祀るならわしであった。このつながりで、この跡地にはいわゆる神宮寺的な寺が存在していたと考えられる。

この五輪塔は室町時代のものと推定される。一説には阿波撫養に於いて薨ずとある室町幕府十代足利義直將軍が身の危険を察して五島に逃れ荒川山王権現を祭祀し天文十四年（1545）天寿80歳をまっとうしたと伝えられている。

荒川郷域は鎌倉の初期は松浦清の朱印地であったが、正平九年（1354）中浦部（中通島）証文によれば、松浦清の跡は清の二男志佐松浦貞と平戸松浦氏の二方領であった。後には宇久氏の領有となり宇久氏平戸松浦氏の二方領となる。



図版44 寺屋敷跡石塔群

宿之浦郷薬師堂裏石塔

所在地 宿之浦郷字宿ノ浦

種類 関西形式宝篋印塔，五輪塔，自然石の板碑

内容 奥まった湾には宿之浦の波止があり，北側に薬師堂が祀られている。その裏手には墓地が営まれている。

この地は松浦党志佐小次郎祝が蒙古合戦の恩賞地として宿之浦及び荒川方面を分配された地で，南北朝時代には専ら海外貿易で水軍の根拠地として活用した浦であったと記録がある。

青方文書には弘和三年（1383）志佐氏宿ノ浦幸阿弥跡に遺乱を加うとある。

宿ノ浦薬師堂には懸仏が祀られ，その裏に白魚山王宮（白魚神社）の創祀は天正十二年（1518）午九月九日の観請とある。なお，この懸仏と思われるものはすぐ南側の高台にある宿之浦神社にある。懸仏は5面あり，1面は完形で一番大きなものは直径25cmを測る。

石塔類は現在薬師堂の裏に並べられているが，本来は裏手の墓地から出土したものとされている。そのことを裏付けるように墓地内には今でも宝篋印塔の基礎の部分が残る。



図版45 宿ノ浦郷薬師堂裏石塔

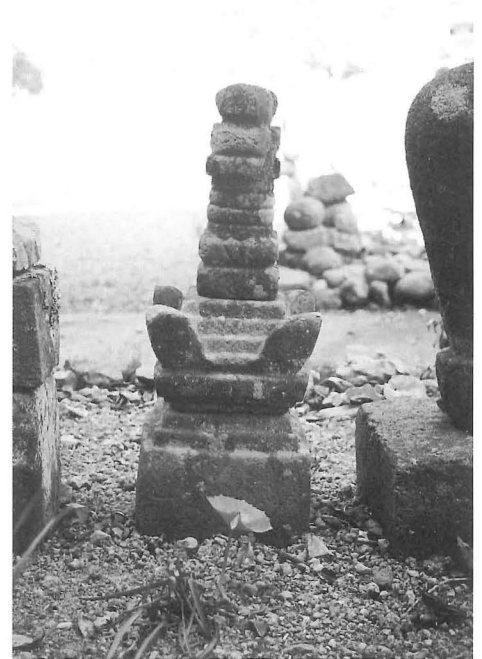
白魚四人塚石塔群

所在地 宿之浦郷白魚

種類 関西形式宝篋印塔 肥前型宝篋印塔 五輪塔

内容 文永十一年（1274）白魚氏が起こる。青方二郎家高の二子、弥次郎弘高が白魚に移住し白魚を姓としている。

蒙古合戦に功績があり正応二年（1289）肥前筑後に賞田を賜る。白魚氏は初代弘高（西仏）2代時高（行覚）3代盛高（正覚弥九郎）4代繁（弥次郎、孫鬼）でおよそ100年間佐尾、白魚を治めたが、4代繁の時（正平十二年）青方氏の家来、半左エ門の夜襲によって滅ぼされた。この墓として青温石の五輪塔や宝篋印塔が小高い所に祀られていたが、現在は周辺の石塔類も含めて一カ所に集められて供養されている。また海浜には無縁墓（千人塚）もある。



図版46 白魚四人塚石塔群

光石海岸墓地石塔

所在地 間伏郷字光石

種類 五輪塔，板碑

内容 若松島の中央部に間伏湾が南に深く湾入するが，なか程に間伏の集落が位置し，寛文五年（1665）開山の神護寺がある。この寺から北へ約200m程行った海岸に面した斜面に墓地が営まれている。この墓地は五島藩家老白浜氏一族の墓地とも伝えられる。大半は雑草に覆われているが，大きな自然石を利用した墓石をはじめ，凝灰岩や花こう岩の墓石が多く見られる。大半は近世墓であるが，五輪塔の中には中世までさかのぼるものも見られる。

永正四年五島藩における玉ノ浦納騒動で逃れてきて数年この地に止まるとある白浜久右エ門の記念碑がある。

神護寺の過去帖には嘉永元年白浜家先祖供養の院号に「永禄七年二月没義憲院須達國正……白浜御先祖」とある。



図版47 光石海岸墓地石塔群

林蔵庵跡石塔群

所在地 榊ノ浦郷立石

種類 関西形式宝篋印塔

内容 榊ノ浦郷は日島の

東側の対岸にあり、
三年ヶ浦、月ノ浦、
榊ノ浦から成る。こ
の地域には各所に石
塔類が点在する。立
石には廃寺林蔵庵の
名があり、現在寺屋
敷跡は水害などに
よって荒廃して跡型
がないが、宝篋印塔、
五輪塔などの残欠が
見られる。



図版48 林蔵庵跡石塔群

榊ノ浦郷宝篋印塔

所在地 榊ノ浦郷

種類 宝篋印塔 五輪塔

内容 室町時代の寺屋敷跡からほど遠くない山手の二カ所に関西形式宝篋印塔並びに室町時代の五輪塔が残存している。

古くはこの一帯を兵庫浦と称し遺唐船の水汲場であったのではないかと伝えられている。



図版49 榊ノ浦郷宝篋印塔

モエン様石塔群

所在地 神部郷真浦

種類 関西形式宝篋印塔，肥前型宝篋印塔，五輪塔

内容 南北朝時代～室町時代にかけての石塔群である。この墓地は慶長年間のキリシタンによって破壊されたとも伝えられる。

すぐ北側の老松神社裏の岩屋観音跡より永正年の武運長久祈願の鏝口が出土している。



図版50 モエン様石塔群

経崎宝篋印塔

所在地 神部郷経崎

種類 南北朝時代関西形式宝篋印塔

内容 この墓地はモエン様と同様キリシタンの破壊を受けたものと思われ、現在の地に埋没していた残欠であると思われる。



図版51 経崎宝篋印塔

報告書抄録

ふりがな	まがりこぼぐん							
書名	曲古墓群							
副書名	—五島列島若松町日島所在の中世墓群—							
巻次								
シリーズ名	長崎県若松町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1集							
編著者名	安楽 勉, 古門雅高, 大石一久, 分部哲秋							
編集機関	若松町教育委員会							
所在地	〒853-23 長崎県南松浦郡若松町若松郷277番地7							
発行年月日	西暦 1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ' "	東経 ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まがりこぼぐん 曲古墓群	ながさきけんみなみまつうら 長崎県南松浦 ぐんわかまつちよう 郡若松町 ひのしまごう 日島郷12番地	42406	31-7	32°54'47"	28°57'29"	19930823	1,000m ²	遺跡整備
						19930924		
						19940829		
						19940916		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
曲古墓群	墓地	中世	宝篋印塔 五輪塔 板碑	中国輸入陶磁器 土師質土器 瓦質土器 素文鏡				